秋田県文化財調査報告書第340集

後　山　遺　跡

－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ＸⅡ－

２００２・３

秋田県教育委員会

後山（うしろやま）遺跡

－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ＸⅡ－

２００２・３

秋田県教育委員会

遺跡近景

序

本県には、これまでに発見された約4,500箇所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、日本海沿岸東北自動車道をはじめとする高速交通体系の整備は、ゆとりと活力に満ちた新しいふるさと秋田の創造をめざす開発事業の根幹をなすものであります。本教育委員会では、これら地域開発との調和をはかりながら、埋蔵文化財を保護し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、日本海沿岸東北自動車道建設に先立って、平成12年度に昭和町で実施した後山遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。

この調査では、縄文時代中期や平安時代の竪穴住居跡が発見され、当時の人々の生活の一端が明らかになりました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、御協力をいただきました日本道路公団東北支社秋田工事事務所、昭和町教育委員会など関係各位に対し厚くお礼申し上げます。

平成14年３月

秋田県教育委員会

教育長　小　野　寺　清

例　　言

1．本書は、日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本書は、2000（平成12）年度に調査された秋田県南秋田郡昭和町に所在する後山遺跡の調査結果を収めたもので、日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書としては12冊目に当たる。

3．調査の内容については、すでにその一部が年報などによって公表されているが、本報告書を正式なものとする。

4．自然科学的分析は下記に委託した。

炭化物年代測定および樹種同定・・・・・・・・・・・・・・・・株式会社　古環境研究所

5．本書に使用した地形図は、国土地理院発行25,000分の１地形図『大久保』、50,000分の１地形図『五城目』と日本道路公団東北支社秋田工事事務所提供の1,000分の１工事用図面である。

6．本報告書を作成するにあたり、以下の方々からご指導・ご助言を賜わった。記して感謝申し上げます。（五十音順）

穴澤義功　工藤清泰　三宅徹也　門間裕一　瀬下三男

8．本書の草稿執筆は、渡邊慎一が行い、加筆・編集を渡邊慎一、高橋忠彦が行った。

凡　　例

1．遺構番号は、その種類ごとに略記号を付し、検出順に通し番号を付したが、後に検討の結果、遺構ではないと判断したものは欠番とした。また、遺構には下記の略記号を使用した。

ＳＩ・・・竪穴住居跡　ＳＲ・・・土器埋設遺構　ＳＫ・・・土坑　ＳＮ・・・焼土遺構

ＳＤ・・・溝跡　ＳＫＰ・・・柱穴様ピット

2．遺跡基本層位と遺構土層中の土色の色調表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』（1998年版）によった。

3．土層番号に用いた数字は、ローマ数字を遺跡基本層位に算用数字を遺構土層に使用した。

4．報告書中の遺物番号は、縄文時代と弥生時代の土器・石器は、それぞれ通し番号を付し、古代の遺物については全て通し番号を付した。

5．遺物の縮尺は、土器１／３、石器１／２、礫石器１／３、鉄製品１／３とした。

6．遺構図で使用したスクリーントーンは下記のとおりである。

焼 土　　地 山

目　　次

序
例言・凡例……ii
目次……iii
挿図・図版目次……iv
第１章　はじめに……1
　第１節　発掘調査に至る経過……1
　第２節　調査要項……1

第２章　遺跡の立地と環境……5
　第１節　遺跡の位置と立地……5
　第２節　歴史的環境……8

第３章　発掘調査の概要……11
　第１節　遺跡の概観……11
　第２節　調査の方法……11
　第３節　調査の経過……15

第４章　調査の記録……16
　第１節　縄文・弥生時代……16
　　1　検出遺構と出土遺物……16
　　2　遺構外出土遺物……35
　第２節　古代……51
　　1　検出遺構と出土遺物……51
　　2　遺構外出土遺物……57

第５章　自然科学分析……67
　第１節　後山遺跡出土炭化材の放射性炭素年代測定……67
　第２節　炭化材の樹種同定……69

第６章　まとめ……72

報告書抄録
あとがき

挿図目次

第１図　日本海沿岸東北自動車道と関連遺跡… 2
第２図　調査範囲と工事計画…… 3
第３図　遺跡の位置…… 5
第４図　後山遺跡周辺の地形分類図…… 6
第５図　後山遺跡周辺の表層地質図…… 7
第６図　後山遺跡周辺の遺跡位置図…… 9
第７図　グリッド配置図……12
第８図　調査区基本土層（１）……13
第９図　調査区基本土層（２）……14
第10図　遺構配置図……17・18
第11図　竪穴住居跡……19
第12図　土器埋設遺構・土坑・柱穴様ピット……21
第13図　土坑……24
第14図　土坑……25
第15図　土坑・焼土遺構・溝跡……28
第16図　柱穴様ピット……30
第17図　遺構内出土土器（１）……32
第18図　遺構内出土土器（２）……33
第19図　遺構内出土石器（１）……34
第20図　遺構外出土土器（１）……36
第21図　遺構外出土土器（２）……37
第22図　遺構外出土土器（３）……38
第23図　遺構外出土土器（４）……39
第24図　遺構外出土土器（５）……40
第25図　遺構外出土土器（６）……41
第26図　遺構外出土土器（７）……42
第27図　遺構外出土石器（１）……45
第28図　遺構外出土石器（２）……46
第29図　遺構外出土石器（３）……47
第30図　遺構外出土石器（４）……48
第31図　遺構外出土石器（５）……49
第32図　遺構外出土石器（６）……50
第33図　竪穴住居跡……51
第34図　土坑・焼土遺構…… 53
第35図　遺構内出土土器……54
第36図　溝跡・土坑…… 56
第37図　柱穴様ピット・溝跡…… 57
第38図　遺構外出土土器（１）……58
第39図　遺構外出土土器（２）……59
第40図　遺構外出土土器（３）……60
第41図　遺構外出土鉄製品他……61

図版目次

巻頭図版　遺跡近景
図版１　１　調査前（北→南）
　　２　調査風景（南→北）
図版２　１　ＳＩ196（北西→南東）
　　２　ＳＲ169（東→西）
図版３　１　ＳＫ170（南西→北東）
　　２　ＳＩ203（北東→南西）
図版４　１　ＳＫ59（南→北）
　　２　ＳＫ59土器出土状況（北→南）
図版５　１　遺構内出土土器
　　２　遺構外出土土器（１）
図版６　１　遺構内出土土器（２）
　　２　遺構外出土土器（３）
図版７　１　遺構外出土土器（４）
　　２　遺構外出土石器
図版８　後山遺跡の木材Ⅰ
図版９　後山遺跡の木材Ⅱ

第1章　はじめに

第1節　調査に至る経過

日本海沿岸東北自動車道は、新潟市から青森市にかけての日本海沿岸や県内の高速交通体系の改善など、地域の生産活動と県民生活に必要な情報や資源の交流を促進することを目的として計画された総延長340kmの高速道路である。このうち、秋田県内では、国土交通省によって一部事業化されている象潟仁賀保道路及び仁賀保本荘道路、秋田外環状道路、琴丘能代道路、大館西道路と連結して、小坂ＪＣＴで東北自動車道に接続する。1997(平成９)年２月に新潟市～青森市までが日本海沿岸東北自動車道として路線指定され、このうちの秋田南Ｉ・Ｃ～昭和男鹿半島Ｉ・Ｃ間の25.7kmについては、同年11月13日に開通している。

後山遺跡に係る昭和～琴丘間の20.7kmについては、1991(平成３)年12月に整備計画区間に、1993(平成５)年12月には実施計画認可を経て1994(平成６)年11月に路線が発表された。

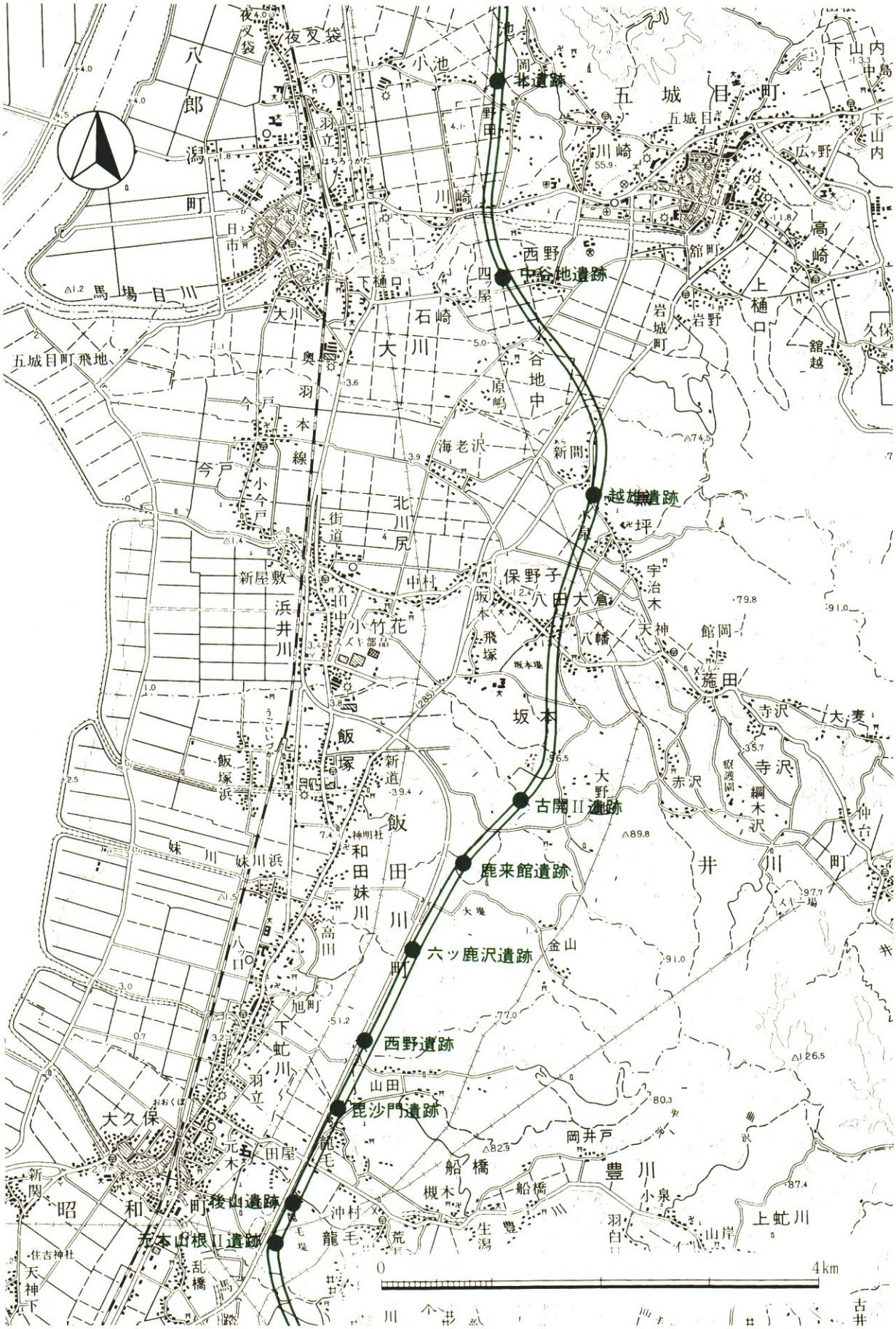
これを受けて県教育庁文化課では、路線上の埋蔵文化財確認のため、1996(平成８)年９・12月に分布調査を実施し、その結果、後山遺跡を含む新たに発見した遺跡16箇所と、周知の遺跡３箇所の計19遺跡が工事区内に存在することが明らかとなった。

後山遺跡については、工事区域内の3,500㎡を対象範囲として、1999(平成11)年６・７月にかけて範囲確認調査を行った。その結果、遺跡は縄文時代、弥生時代、平安時代の複合遺跡であり、各時代の集落跡や、鉄滓などの出土からは、平安時代の製鉄関連遺構の存在も予測された。遺跡の推定範囲は、西側の国道７号線と元木山球場周辺を中心とする10,000㎡にも及ぶものと推定され、工事に係わる調査の必要な面積は1,700㎡で、遺跡全体では東端に位置していることも判明した。

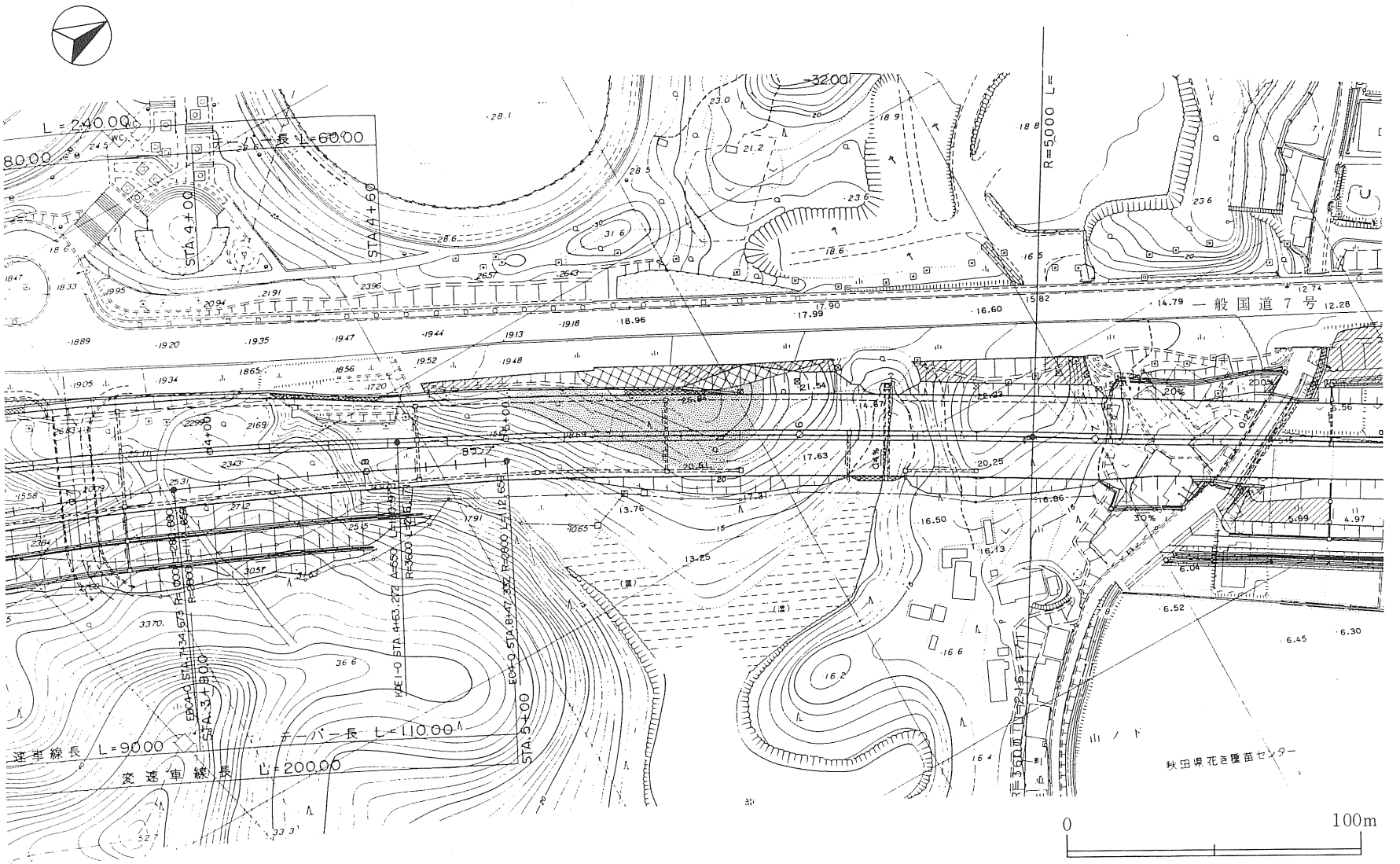
後山遺跡の調査が行われた平成12年には、昭和～琴丘間において同事業に伴って、西野遺跡(昭和町)、越雄遺跡(井川町)、小林遺跡(琴丘町)、堂の下遺跡(琴丘町)の調査も行われ、同区間における発掘調査を全て終了した。

第2節　調査要項

遺　跡　名	後山遺跡
遺跡略号	４ＵＹ
所　在　地	秋田県南秋田郡昭和町豊川龍毛字後山25－３外
調査期間	平成12年６月11日～８月11日
事　業　名	日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る事前発掘調査
調査対象面積	1,700㎡
調査面積	1,700㎡
調査主体	秋田県教育委員会
調査担当	渡邊　慎一（現　秋田県立矢島高等学校教諭）



第１図　日本海沿岸東北自動車道と関連遺跡



第2図　調査範囲と工事計画

	斎藤　浩志（秋田県埋蔵文化財センター調査課非常勤職員）
	片岡　稔彦（秋田県埋蔵文化財センター調査課非常勤職員）
総 務 担 当	佐藤　　悟（秋田県埋蔵文化財センター総務課長）
	佐々木敬隆（秋田県埋蔵文化財センター総務課主事）
	成田　　誠（秋田県埋蔵文化財センター総務課主事）
	土橋　謙一（秋田県埋蔵文化財センター総務課主事）
	八文字　隆（現　中仙町立清水小学校主事）
調査協力機関	日本道路公団東北支社秋田工事事務所
	飯田川町教育委員会　昭和町教育委員会　井川町教育委員会

《参考文献》

秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第270集　1997（平成９）年

秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第281集　1998（平成10）年

秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第291集　1999（平成11）年

秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第308集　2000（平成12）年

秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ＸⅨ－古野遺跡－』秋田県文化財調査報告書第253集　1995（平成７）年

秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ＸＸ－蟹子沢遺跡－』秋田県文化財調査報告書第261集　1996（平成８）年

秋田県教育委員会『戸平川遺跡－東北横断自動車道秋田線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ＸＸⅣ－』秋田県文化財調査報告書第294集　2000（平成12）年

秋田県教育委員会『兵ヶ沢遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－』秋田県文化財調査報告書第296集　2000（平成12）年

秋田県教育委員会『元木山根Ⅱ遺跡･毘沙門遺跡･六ツ鹿沢遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－』秋田県文化財調査報告書第309集　2000（平成12）年

秋田県教育委員会『岱Ⅰ遺跡･岱Ⅱ遺跡･岱Ⅲ遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ－』秋田県文化財調査報告書第314集　2001（平成13）年

秋田県教育委員会『北遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ－』秋田県文化財調査報告書　第315集　2001（平成13）年

秋田県教育委員会『中谷地遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ－』秋田県文化財調査報告書第316集　2001（平成13）年

秋田県教育委員会『古開Ⅱ遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ－』秋田県文化財調査報告書第317集　2001（平成13）年

秋田県教育委員会『大平遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ－』秋田県文化財調査報告書第329集　2001（平成13）年

秋田県教育委員会『鹿来館跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ＸⅠ－』秋田県文化財調査報告書第332集　2002（平成14）年

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　遺跡の位置と立地

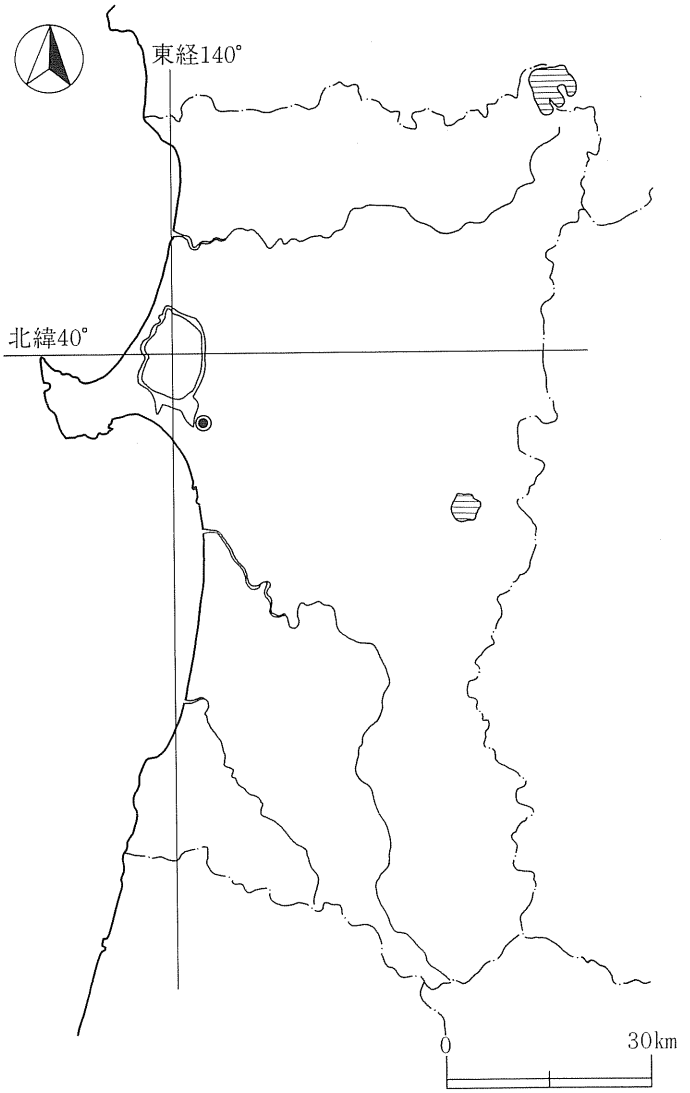
後山遺跡の所在する秋田県南秋田郡昭和町は、八郎潟残存湖の南東部、出羽丘陵西端部にある。出羽丘陵西部から八郎潟残存湖へは様々な小河川が西流しており、各水系により浸食を受ける丘陵地、河岸段丘が発達している。昭和町は出羽丘陵俎山に水源を発する豊川流域に位置する。

本遺跡は八郎潟残存湖岸から約３㎞南東、昭和町大久保集落から南東へ約500ｍに位置する。調査区は国道７号の東側に隣接し、西側は元木山公園として整備されている。また、遺跡から約1.5㎞南東には豊川油田が位置する。

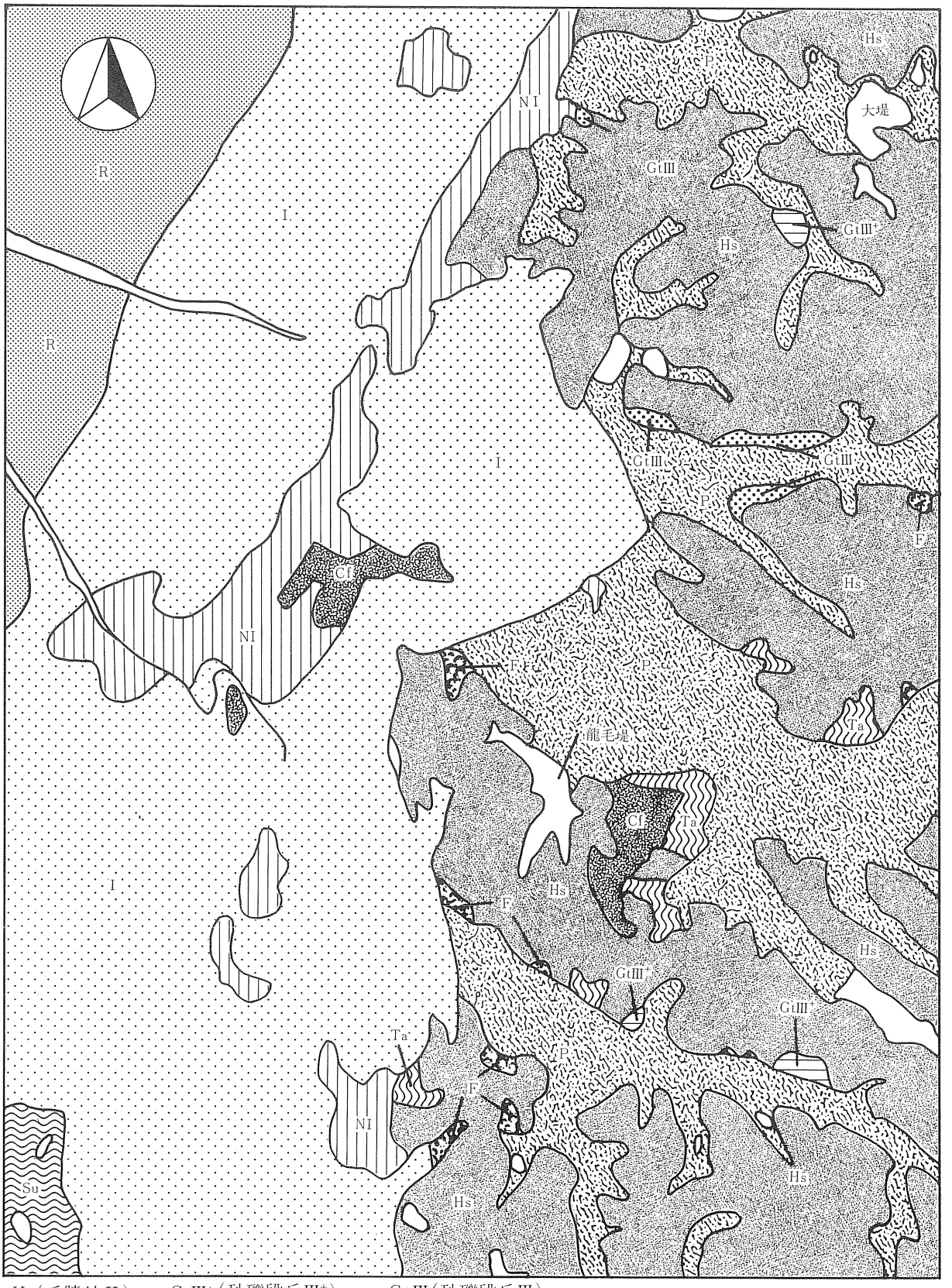
遺跡周辺の地形は出羽丘陵西部から八郎潟残存湖に向けて山地、丘陵地、段丘、低地に分けられる。『土地分類基本調査　五城目』によると、俎山を中心とする山地では俎山山地が広がり、その側辺では井川丘陵、豊川丘陵がみられる。豊川流域では河岸段丘が一部発達し、谷底低地である豊川低地が形成される。湖岸の沖積低地は丘陵地と残存湖岸の間に広がる湖東沖積低地と馬踏川流域に形成される馬踏川低地から成る。

地質は、下位から新第三紀中新世の女川層、船川層、天徳寺層、鮮新世の笹岡層、第四紀更新世の潟西層、段丘堆積物、完新世の段丘堆積物、沖積低地堆積物から構成されている。山地から湖岸に向かって地質時代の古い地層から若い地層が順に重なっているが、地層が褶曲しているため、褶曲軸に沿って同一層が繰り返し露出する。このため沖積低地に接する丘陵地の一部では、船川層の泥岩、女川層の珪質頁岩がみられる。

後山遺跡は、豊川水系と馬踏川水系による侵食を受け西へ向かって舌状に張り出す豊川丘陵上にあり、龍毛堤へ向かって東へ高度を下げる部分に立地する。地質は第四紀更新世に形成された砂礫層となっている。遺跡の標高は17～26ｍである。



第３図　遺跡の位置



Hs（丘陵地Ⅱ）　GtⅢ+（砂礫段丘Ⅲ+）　GtⅢ（砂礫段丘Ⅲ）
P（谷底平野）　F（扇状地）　NI（自然提防及び砂錐）
I（湖岸平野）　Ta（崖錐及び土石流）　Su（被覆砂丘）
R（干拓地）　Cf（人工改変地）

0　1km

第４図　後山遺跡周辺の地形分類図

r（泥・砂および礫）　sa2（砂がち堆積物２）　tr（砂および礫）
ma（泥がち堆積物）　sa3（砂がち堆積物３）　sgK（砂礫層）
siT（シルト岩）　msF（泥岩）　shO（珪質頁岩）

0　1km

第５図　後山遺跡周辺の表層地質図

第２節　歴史的環境

八郎潟残存湖南東部の沖積低地及び出羽丘陵西縁部の丘陵地には、各時代にわたる多くの遺跡が立地している。ここでは秋田県教育委員会発行の『秋田県遺跡地図（中央版）』『遺跡詳細分布調査報告書』に基づいて概観する。なお遺跡名の次の（　）内数字は、『秋田県遺跡地図（中央版）』に登録されている地図番号であり、26は昭和町を指す。

縄文時代の遺物が出土している遺跡は、上松館(1-2)、大清水台Ⅰ(1-3)、大清水台Ⅲ(1-5)、大清水台Ⅳ(1-6)、大沢(1-15)、元木山Ⅰ(26-12)、元木山Ⅱ(26-13)、鳥巻Ⅱ〔前期,中期〕(26-33)、真形尻〔中期〕(26-34)、元木山根Ⅰ(26-MⅠ)、松葉沢〔中期,晩期〕(28-６)がある。また、昭和町槻木地区の豊川油田は縄文・弥生時代の遺物に付着する天然アスファルトの産地として有名である。

遺跡周辺では弥生時代の遺跡はまだ確認されていないが、八郎潟南東部では井川町新間地区の台地に集中して確認されており、遠賀川系土器が出土している。

古代の遺跡は豊川低地に接する井川丘陵南縁および豊川丘陵北縁に数多く分布する。井川丘陵南縁では西野(26-15)、深田沢(26-21)、千刈田(26-22)、深田沢Ⅱ(26-Ｆ)、塩辛田(26-24)、塔田Ⅰ(26-25)、塔田Ⅱ(26-26)、塔田Ⅲ(26-27)、槻木盛土墳(26-28)、塔田Ⅳ(26-29)、大宮(26-30)、豊川丘陵北縁では　元木山Ⅰ(26-12)、元木山Ⅱ(26-13)、鳥巻Ⅰ(26-32)、正戸尻Ⅰ(26-41)、正戸尻Ⅱ(26-42)、寸白沢(26-44)、高野(26-45)、元木山根Ⅱ(26-MⅡ)、がある。西野遺跡、元木山根Ⅱ遺跡では竪穴住居跡が調査されており、西野遺跡では鍛冶炉が検出され、炉に伴う羽口が出土している。

中世の遺跡は井川丘陵、豊川丘陵にそれぞれ自然地形を利用した山城の中世城館として分布する。井川丘陵には山田館(26-20)、極楽館(26-23)、鷲尾館(28-9)、鹿来館(28-10)、鬼王館(28-11)、六ツ鹿沢(28-M)が立地し、豊川丘陵には岩瀬館(1-8)、よもみ(ぎ)館(1-16)、元木館(26-14)、槐館(26-35)、真形館(26-37)、オオサカ館(26-43)がある。鹿来館では空堀、帯曲輪、掘立柱建物跡が検出されている。鬼王館では空掘、郭が確認されており、唐津系陶器片が採集されている。

周辺地域の遺跡を概観すると、古代の遺跡が豊川によって侵食を受ける丘陵地縁辺部に数多いことが特徴的であり、このことは生活用水および交通においての豊川の重要性を窺わせる。

《参考文献》

秋田県『土地分類基本調査　五城目』1973（昭和48）年

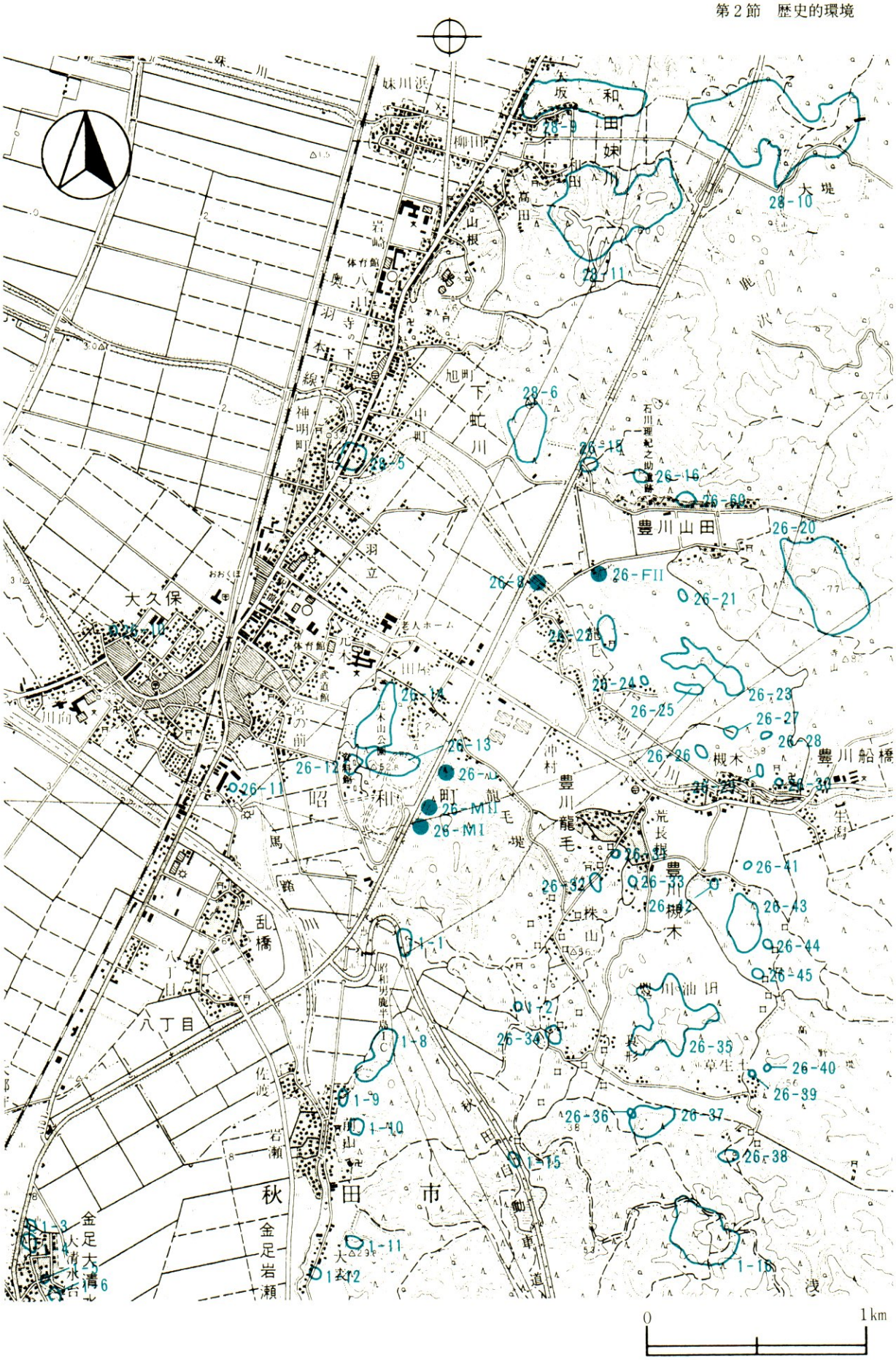
秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図（中央版）』1990（平成２）年

秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』1981（昭和56）年

秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第291集　1999（平成11）年

秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第308集　2000（平成12）年

秋田県教育委員会『元木山根Ⅱ遺跡・毘沙門遺跡・六ツ鹿沢遺跡』秋田県文化財調査報告書第309集　2000（平成12）年



第６図　後山遺跡周辺の遺跡位置図

第１表　周辺遺跡一覧

番　号	遺　跡　名	所　在　地	種　別	内　　容
１－１	松館	秋田市金足岩瀬字松館大平	館跡	帯郭
１－２	上松館	秋田市金足岩瀬字上松館	遺物包含地	縄文土器
１－３	大清水台Ⅰ	秋田市金足大清水字大清水台74	遺物包含地	縄文土器
１－４	大清水台Ⅱ	秋田市金足大清水字大清水台64	遺物包含地	土師器、須恵器
１－５	大清水台Ⅲ	秋田市金足大清水字大清水台49	遺物包含地	縄文土器
１－６	大清水台Ⅳ	秋田市金足大清水字大清水台52	遺物包含地	縄文土器
１－８	岩瀬館	秋田市金足岩瀬字佐渡沢	館跡	
１－９	前山Ⅰ	秋田市金足岩瀬字前山７	遺物包含地	須恵器
１－10	前山Ⅱ	秋田市金足岩瀬字前山	遺物包含地	須恵器
１－11	北田	秋田市金足岩瀬字北田	遺物包含地	須恵器
１－12	大表	秋田市金足岩瀬字大表	遺物包含地	須恵器
１－15	大沢	秋田市金足岩瀬字大沢	遺物包含地	縄文土器・赤褐色土器
１－16	よもみ（ぎ）館	秋田市金足浦山字水上沢	館跡	空堀、土塁
26－10	町後碑	昭和町大久保字町後７	板碑	応永20年
26－11	下畑	昭和町乱橋字下畑115	遺物包含地	須恵器
26－12	元木山Ⅰ	昭和町大久保字元木山根50	遺物包含地	縄文土器（後期）、土師器、須恵器
26－13	元木山Ⅱ	昭和町豊川龍毛開沢	遺物包含地	縄文土器（後期）、土師器、須恵器
26－14	元木館	昭和町豊川龍毛開沢	館跡	
26－15	西野	昭和町豊川山田字家ノ上81	集落跡	竪穴住居跡、鍛冶炉、土師器、須恵器
26－16	下台	昭和町豊川山田字家ノ上54	遺物包含地	
26－20	山田館	昭和町豊川山田字滝の沢、砂子沢	館跡	焼米、茶臼受け皿片
26－21	深田沢	昭和町豊川山田字深田沢	遺物包含地	須恵器
26－22	千刈田	昭和町豊川龍毛字千刈田	遺物包含地	石鏃、須恵器
26－23	極楽館	昭和町豊川龍毛字塩辛田１	館跡	主郭、帯郭、空堀
26－24	塩辛田	昭和町豊川龍毛字塩辛田５	遺物包含地	石刀
26－25	塔田Ⅰ	昭和町豊川槻木字塔田	遺物包含地	土師器、須恵器
26－26	塔田Ⅱ	昭和町豊川槻木字塔田60	遺物包含地	須恵器、土師器
26－27	塔田Ⅲ	昭和町豊川槻木字塔田12	遺物包含地	須恵器
26－28	槻木盛土墳	昭和町豊川槻木字塔田７	火葬墓	須恵器、葺石
26－29	塔田Ⅳ	昭和町豊川槻木字塔田１	遺物包含地	土師器、須恵器
26－30	大宮	昭和町豊川槻木字大富34	遺物包含地	須恵器壺
26－31	蘭戸下	昭和町槻木字蘭戸下53－11	遺物包含地	獣骨
26－32	鳥巻Ⅰ	昭和町豊川槻木字鳥巻	遺物包含地	縄文土器（前期、後期）、須恵器
26－33	鳥巻Ⅱ	昭和町豊川槻木字鳥巻35	遺物包含地	縄文土器（中期、後期）
26－34	真形尻	昭和町豊川槻木字真形尻31	遺物包含地	縄文土器（中期）、鹿・鳥類骨
26－35	槐館	昭和町豊川槻木字高野、真形沢	館跡	本郭、腰郭、空堀
26－36	カラス沢	昭和町豊川槻木字カラス沢	遺物包含地	土師器
26－37	真形館	昭和町豊川槻木字カラス沢、草生士沢	館跡	階段状郭、帯郭
26－38	草生土沢Ⅰ	昭和町豊川槻木字草生土沢	遺物包含地	土師器
26－39	草生土沢Ⅱ	昭和町豊川槻木字草生土沢	遺物包含地	石匙
26－40	草生土沢Ⅲ	昭和町豊川槻木字草生土沢18	遺物包含地	五輪塔頂部、近くに糠塚
26－41	正戸尻Ⅰ	昭和町豊川槻木字正戸尻62	遺物包含地	須恵器
26－42	正戸尻Ⅱ	昭和町豊川槻木字正戸尻	遺物包含地	土師器、須恵器
26－43	オオサカ館	昭和町豊川槻木字正戸尻	館跡	
26－44	寸白沢	昭和町豊川槻木字寸白沢	遺物包含地	須恵器
26－45	高野	昭和町豊川槻木字高野64	遺物包含地	須恵器
26－60	石川理紀ノ助遺跡	昭和町山田	史跡	尚庵、書庫、郷倉
26－Ｂ	毘沙門	昭和町豊川龍毛字上斉藤田12	集落跡	掘立柱建物跡、トイレ状遺構、陶磁器
26－ＦⅡ	深田沢Ⅱ	昭和町豊川山田字深田沢	遺物包含地	土師器、須恵器
26－ＭⅠ	元木山根Ⅰ	昭和町大久保字元木山根	遺物包含地	フレイク
26－ＭⅡ	元木山根Ⅱ	昭和町大久保字元木山根286外	集落跡	竪穴住居跡、土師器、須恵器
28－５	城の内	飯田川町下虻川字城の内84	建物跡	碑一基
28－６	松葉沢	飯田川町下虻川字松葉沢87	遺物包含地	縄文土器（中期、晩期）
28－９	鷲尾館	飯田川町和田妹川字坂の下20	館跡	帯郭、空堀
28－10	鹿来館	飯田川町和田妹川字鹿来20－１外	館跡	帯曲輪、空堀、竪穴住居跡、陶磁器
28－11	鬼王館	飯田川町和田妹川字大宮沢５	館跡	帯郭、空堀、陶器
28－Ｍ	六ツ鹿沢	飯田川町和田妹川字六ツ鹿沢53	館跡	曲輪状の地形

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

後山遺跡は、豊川と馬踏川の浸食を受け西側へ舌状に張り出す丘陵地の北縁部に位置する。調査区の地形は、東側に位置する龍毛堤に向かって標高を下げる斜面となっている。後山遺跡と同丘陵には、前章で述べたように、縄文時代の石器剥片が出土している元木山根Ⅰ遺跡と、平成11年に調査を実施した古代の集落跡である元木山根Ⅱ遺跡が本遺跡の約250m南に位置し、縄文時代後期の土器や、土師器・須恵器が確認されている元木山Ⅰ、元木山Ⅱ遺跡が約300m西に位置する。また、豊川を挟み、調査区北の約1.5kmの丘陵南縁部では平成12年に調査を実施した西野遺跡が位置する。それぞれ、同時期の遺構・遺物が検出されており、本遺跡との関連性が考えられる。

調査区内の地山・地山漸位層では礫が多い。基本層位は下記の通りである。

第Ⅰ層：黒褐色土（10ＹＲ2/2）；表土

第Ⅱ層：暗褐色土（10ＹＲ3/3）；遺物包含層

第Ⅲ層：褐色土（10ＹＲ4/4）；遺物包含層　橙色土(2.5ＹＲ6/6)３％および礫含む

第Ⅳ層：黄褐色土（10ＹＲ5/6）；地山漸位層　にぶい黄褐色土(10ＹＲ5/4)５％および礫含む

第Ⅴ層：明黄褐色土（10ＹＲ6/8）；地山漸位層　礫含む

第Ⅵ層：にぶい黄褐色土（10ＹＲ5/4）；地山　礫含む

調査区東側では第Ⅳ層、第Ⅴ層を部分的に欠く。また、ＭＣ45周辺は削平・盛土により整地される区域が認められる。この区域の土層については下記の通りである。

第１層：暗褐色土（10ＹＲ3/3）　地山50％　炭化物１％

第２層：暗褐色土（10ＹＲ3/3）　炭化物１％　径３～４cmの礫斑状に混入

第３層：黒褐色土（10ＹＲ2/2）

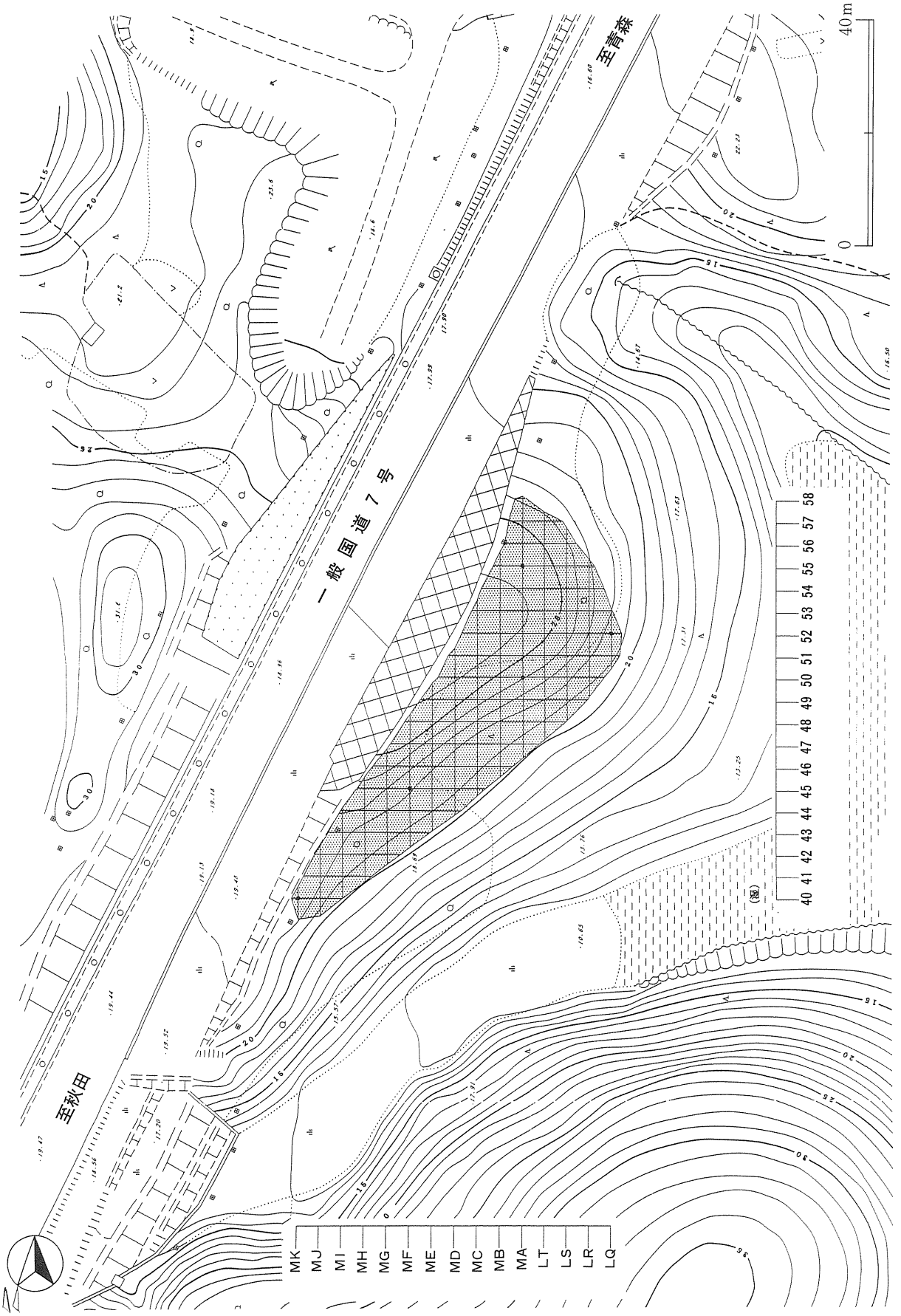
第４層：黒褐色土（10ＹＲ3/2）　径５～15cmの礫斑状に混入

第５層：褐色土（10ＹＲ4/4）　径５～15cmの礫斑状に混入

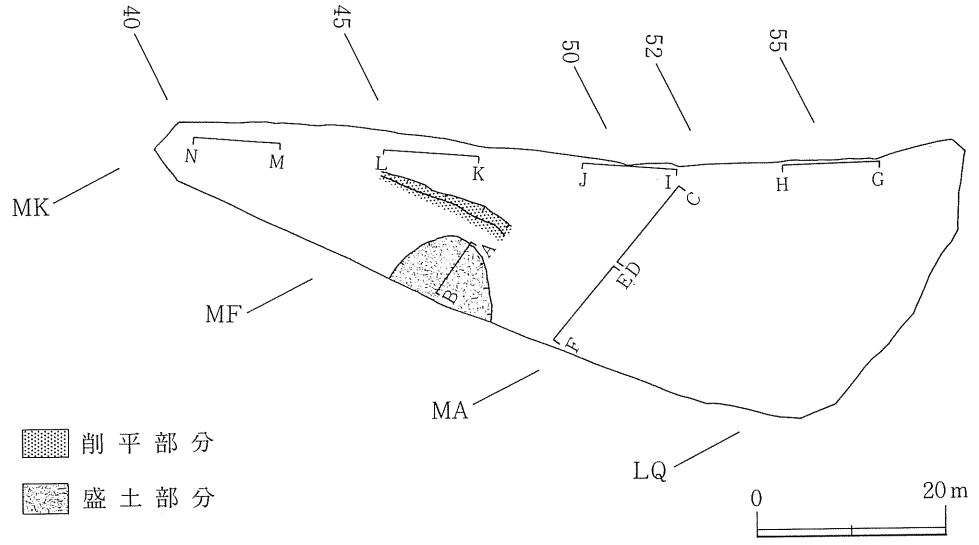
調査当初は遺跡範囲確認調査時に設置されたトレンチ観察から、２時期の盛土による整地面と考え調査を進めていたが、竪穴住居跡SI203のプラン確認後、SI203構築時における整地面と判断した。

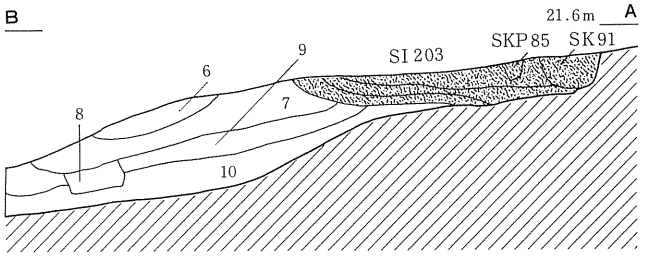
第２節　調査の方法

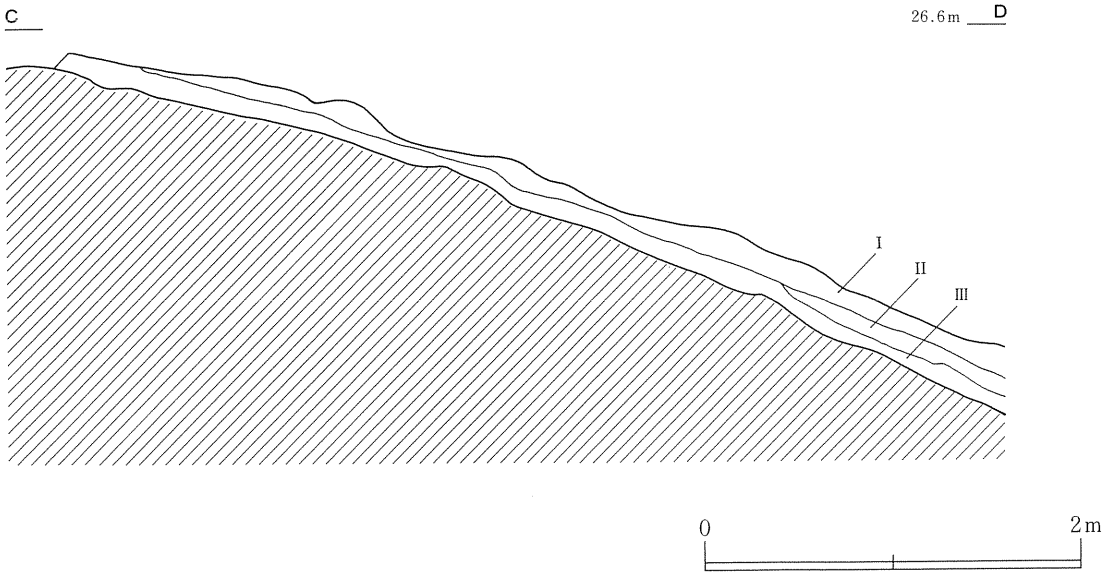
調査は、工事用中心杭のＳＴＡ５＋60を原点（ＭＡ50）とし、この原点から磁北方向に基準点を選定し、この基準点に直交する４ｍ×４ｍのグリッドを設定した。グリッド杭には東から西に向かって東西方向を示す・・・ＬＳ・ＬＴ・ＭＡ・ＭＢ・・・というアルファベットと、南から北に向かって南北方向を示す・・・48・49・50・51・・・の２桁の数字を組み合わせた記号を記入し、グリッドの呼称は、南東隅の記号を用いた。調査対象全域にグリッドを設定することにより、計画的な調査と同時に遺構の平面的位置の把握に努めた。基本土層ベルトは、範囲確認調査の結果に基づき、地形を


至秋田
一般国道７号
至青森
40m
0
MK
MJ
MI
MH
MG
MF
ME
MD
MC
MB
MA
LT
LS
LR
LQ
40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58

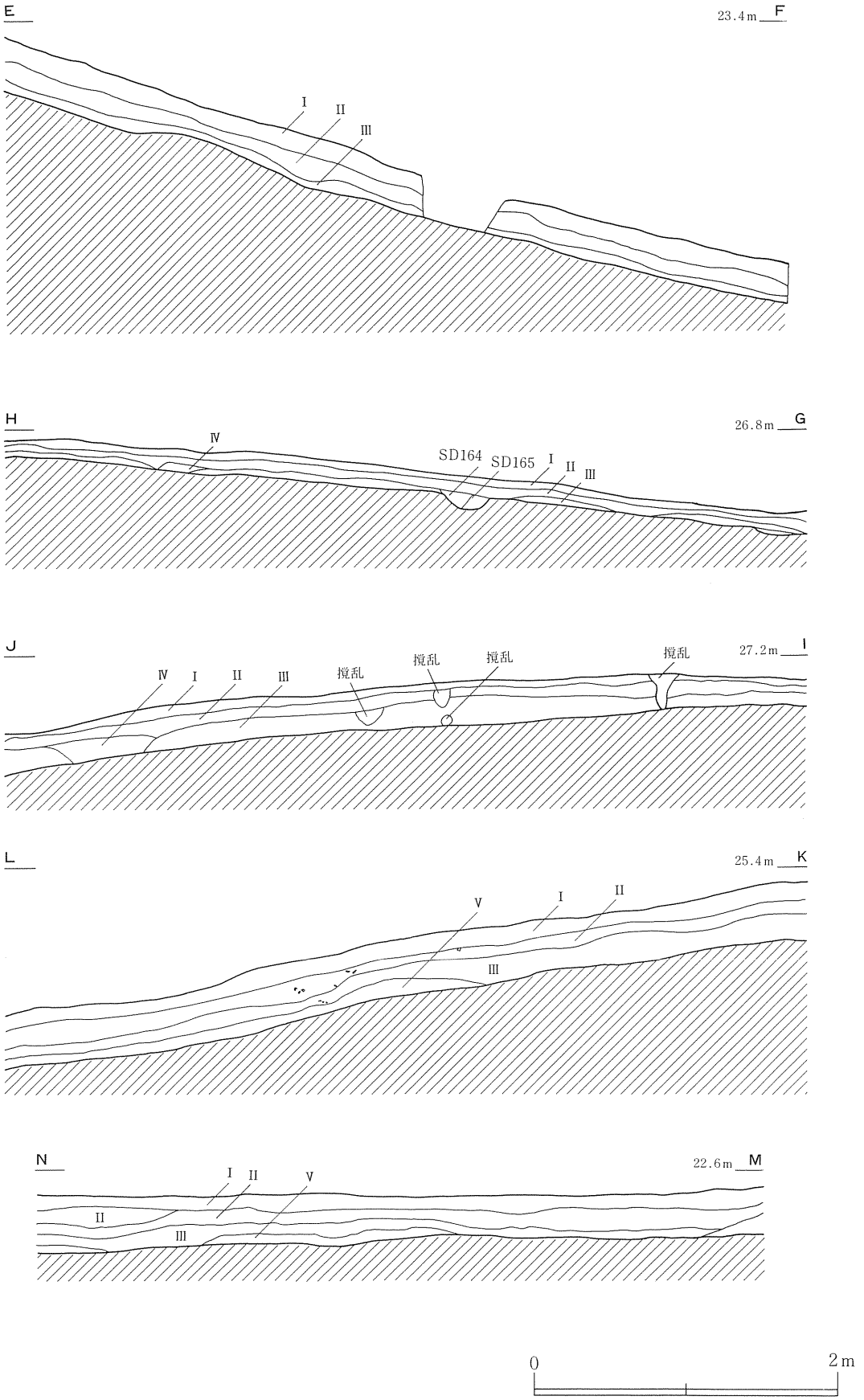
第７図　グリッド配置図







第８図　調査区基本土層（１）



第９図　調査区基本土層（２）

考慮して、等高線と直角になるように設定した。遺構外出土遺物については、出土グリッド、層位、出土年月日をラベルに記入し、遺構内遺物については、出土地点のドット図を作成し、出土遺構名、遺構内層位、取り上げ番号、出土年月日を記入し、それぞれポリ袋に入れて取り上げた。遺構は基本的には２分法、４分法を用いて精査を行い、平面図及び土層断面図1／20の縮尺で製作したが、土器埋設遺構は１／10で作成した。記録用の写真は、35㎜判のカメラを使用し、フィルムはモノクロネガ、カラーリバーサル、カラーネガフィルムを使用した。

第３節　調査の経過

６月19日、発掘調査開始。現場環境整備（電話，ＦＡＸ設置等）を行った。調査区南端から草刈り、表土除去を開始する。22日、調査区南側から遺構精査を開始した。遺物はⅠ層、Ⅱ層で多くなっている。26日、グリット杭打設業務を委託した北州計画より成果品の図面を受け取る。27日、職員健康診断のため、野外調査を中止した。28日、調査区中央部東側の表土除去、全調査区の草刈りを実施した。範囲確認調査時のトレンチを利用し、基本土層ベルトの図面作成を行った。これにより、調査区南側に盛土し整地した可能性のある区域が確認された。土層から、盛土面は２時期にわたって形成された可能性があると判断した。29日、調査区東部表土除去、南部の遺構精査を実施した。基本土層ベルト図面完成。中央部東側表土除去を実施した。

７月３日、県生涯学習課文化財保護室　藤澤昌学芸主事来跡。６日、北側平坦部の遺構精査を実施した。７日、日本道路公団昭和工事区工事長　佐藤明氏、三菱建設副所長　戸沢勉氏来跡。10日、北側平場表土除去、中央斜面遺構精査を実施した。県立能代工業高等学校教諭　栗山知士氏来跡。11日、北側平場遺構精査を実施した。溝跡２条と土器埋設遺構２基を検出した。14日、南側全景写真を調査区中央より撮影。17日、非常勤職員　片岡稔彦が調査に参加する。25日、降雨のため野外活動を中止し、室内で図面チェックを行った。26日、基本土層ベルト除去、盛土区域の精査を実施した。調査区中央の土坑（ＳＫ198）から鉄製品・須恵器の他、縄文時代の土器、石器が出土した。盛土区域に竪穴住居跡（ＳＩ203）のプランを検出した。２時期目の盛土層と考えていた層位が竪穴住居跡の土層であったことが判明し、盛土区域はこの住居を構築する際の盛土整地面であることが明らかとなった。

８月１日　中央斜面表土除去、遺構精査を実施した。猛暑のため体調不良者が多い。４日、払田柵跡調査事務所　高橋学学芸主事来跡。７日、等高線実測開始。８日、調査区西側の基本土層写真を撮影。９日、調査区南側を調査区南端から写真撮影を行った。ＳＩ203付近から、調査区北側を拡張した。等高線計測終了。調査区西側の基本土層図作成開始。10日、調査区北側を北端から写真撮影。基本土層作成終了。調査区内の撤収作業。11日、調査事務所の撤収作業を行い調査を終了した。

《参考文献》

秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第308集　2000（平成12）年

秋田県教育委員会『元木山根Ⅱ遺跡・毘沙門遺跡・六ツ鹿沢遺跡』秋田県文化財調査報告書第309集　2000（平成12）年

第４章　調査の記録

今回の調査により検出した遺構は、竪穴住居跡（ＳＩ）２軒、土坑（ＳＫ）21基、土器埋設遺構（ＳＲ）５基、焼土遺構（ＳＮ）10基、溝跡（ＳＤ）５条、柱穴様ピット（ＳＫＰ）242基である。遺構の時期の判別は、検出面の層位と覆土状況、伴出遺物によるものである。また、柱穴様ピットについては遺物の出土したものについて遺構図を掲載したが、それらを含めて第４表に記した。

第１節　縄文・弥生時代

縄文時代・弥生時代の遺構は竪穴住居跡１軒、土器埋設遺構５基、土坑17基、焼土遺構６基、溝跡３条、柱穴様ピット23基である。また、縄文時代と古代の遺物が出土したＳＫ198については、古代の遺物が遺構内１層に出土しているが、流れ込みによるものと判断し縄文時代の遺構とした。その他、同様に地山漸位層で検出した土坑５基、焼土遺構５基についても縄文時代の遺構とした。

ＳＫ06では縄文時代と弥生時代の遺物が出土しているが、遺構検出面および遺物出土状況から弥生時代の遺構と判断した。

１　検出遺構と出土遺物

（１）竪穴住居跡

ＳＩ196（第11･17図）

ＬＴ53グリッドに位置する。プラン確認中に黒褐色の落ち込みとしてⅢ層で確認した。他の遺構との重複はない。規模と平面形は長軸3.48m、短軸2.92mの略円形を呈す。埋土は３層に分層される。壁は現状では８～26cmの高さで、緩やかに外傾しながら立ち上がる。壁溝はない。床面は凸凹はあるがほぼ平坦である。全体的に床面は堅くしまっていた。炉は地床炉であり、住居中央部からやや南東側にあり、焼土の広がりは長軸88cm、短軸54cmの楕円形を呈する。焼土断面は床面より高さ６cm、底部も床面より６cm下にあり３層に分層される。柱穴は６基、床面で検出された。埋土中および床面より、縄文土器170点、石器剥片８点が出土した。

土器には、波状口縁で原体の側面圧痕文が施される（１）や、体部に結束の羽状縄文（３）、条の太いＬＲ縄文（４）、ＲＬ縄文（５）が付される。

出土土器から縄文時代中期前半の竪穴住居跡と考えられる。

（２）土器埋設遺構

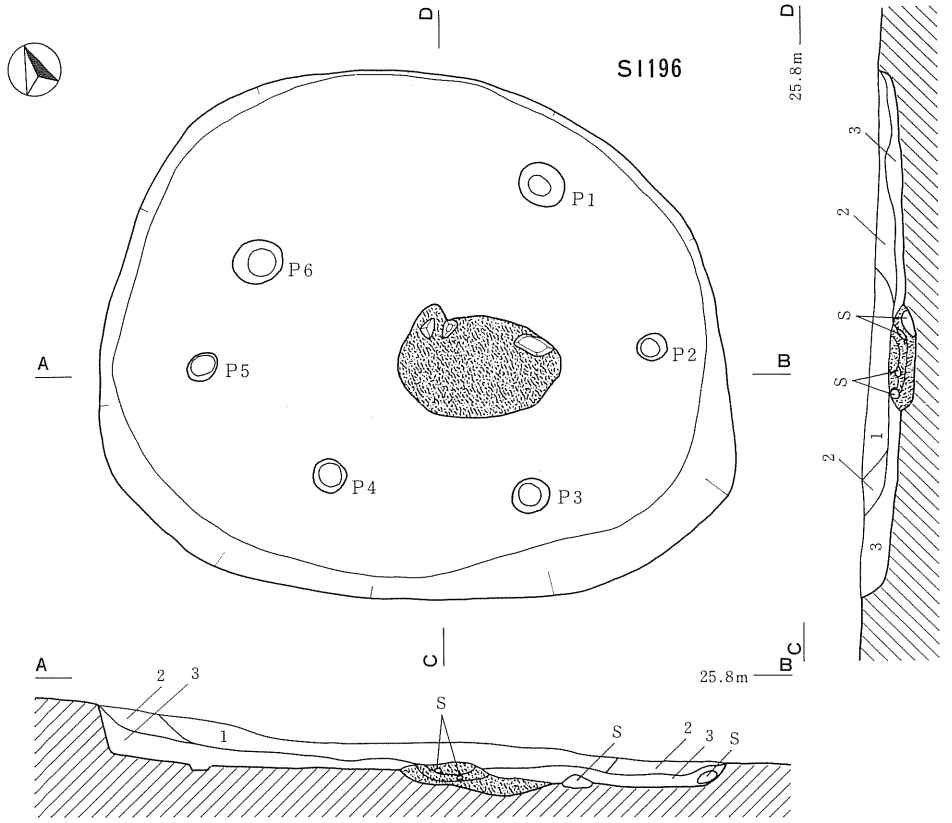
ＳＲ92（第12･17図）

ＭＡ55グリッドに位置する。体部がやや傾いて正立状態で地山面で確認した。他の遺構との重複はない。掘り形規模は開口部28×25cm、深さ14cmで、埋土を土器内と掘り形内で２層に分層した。埋設土器内から遺物は出土していない。埋設土器は深鉢形土器で、体部に結束の羽状縄文が施され、内面は平滑に磨かれている。

本遺構の時期は、埋設土器から縄文時代中期前半と考えられる。

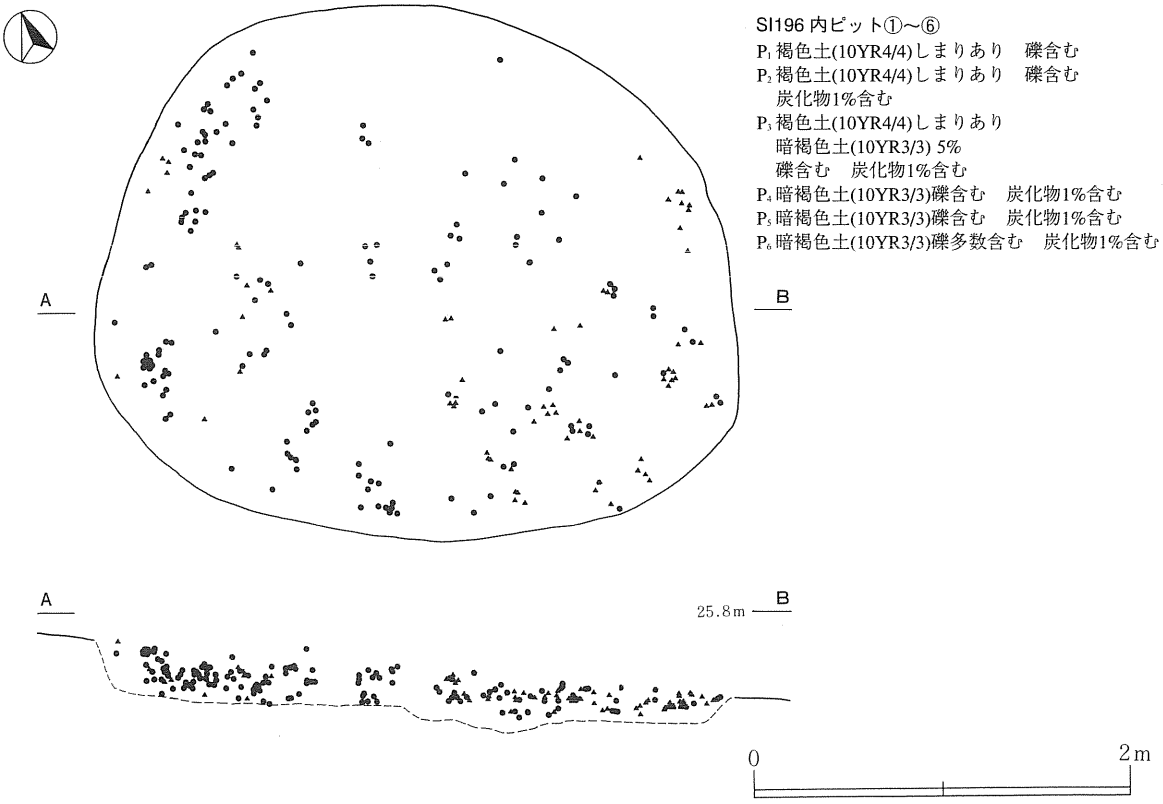
SR169
SK173
SK197
SKP233
SR92
SR168
SN139
SN138
SN137
SK235
SD165
SD164
SN204
SK170
SK171
SK166
SI196
SN163
SN136
SKP155
SR134
SR135
SK179
SKP205
SKP266
SK198
SKP264
SKP268
SKP269
SKP271
SKP270
SK112
SK111
SK114
SK93
SK113
SKP280
SKP109
SKP108
SKP107
SKP122
SKP66
SKP45
SKP46
SD63
SD84
SKP78
SKP97
SKP96
SK91
SK30
SK59
SK167
SI203
SKP74
SN04
SK52
SD02
SKP80
SN50
SKP236
SK06
SN05
SKP79
SKP94
SN51
SKP03
SKP243
SKP60
SK01
0
20m

第10図　遺構配置図



SI196A
1.黒褐色土(10YR2/3)しまりあり　炭化物1%含む
2.暗褐色土(10YR3/4)しまりあり
3.褐色土(10YR4/4)しまりあり
　黄褐色土(10YR5/6)1%　礫含む

SI196B
1.黒褐色土(10YR2/3)しまりあり　炭化物1%含む
2.暗褐色土(10YR3/4)しまりあり　炭化物1%含む
3.褐色土 (10YR4/4)しまりあり



SI196 内ピット①～⑥
P_1 褐色土(10YR4/4)しまりあり　礫含む
P_2 褐色土(10YR4/4)しまりあり　礫含む
　炭化物1%含む
P_3 褐色土(10YR4/4)しまりあり
　暗褐色土(10YR3/3) 5%
　礫含む　炭化物1%含む
P_4 暗褐色土(10YR3/3)礫含む　炭化物1%含む
P_5 暗褐色土(10YR3/3)礫含む　炭化物1%含む
P_6 暗褐色土(10YR3/3)礫多数含む　炭化物1%含む

第11図　竪穴住居跡

ＳＲ134（第12･17･19図）

ＭＢ51グリッドに位置する。上部を削平されていたが、体部がやや傾いて正立状態で地山面で確認した。他の遺構との重複はない。掘り形規模は開口部27×26cm、深さ53cmで、埋土を土器内と掘り形内で２層に分層した。埋設土器は遺存状況が悪く、器形が明瞭でないが、体部に結束の羽状縄文を縦位に施した深鉢形土器（９～11）と考えられる。掘り形内からは、口縁部に原体の側面圧痕文を施す土器（７・８・12）や、使用痕のある黒曜石の縦長剥片（１）が出土している。

本遺構の時期は、埋設土器から縄文時代中期前半と考えられる。

ＳＲ135（第12･17図）

ＭＡ52グリッドに位置する。正立状態で地山面で確認した。他の遺構との重複はない。掘り形規模は開口部16×14cm、深さ11cmで、埋土は単層である。土器内から遺物は出土していない。埋設土器は、遺存状況が悪く、器形、文様など明瞭ではないが、体部には結束の羽状縄文(13)が施されている。

本遺構の時期は、埋設土器から縄文時代中期前半と考えられる。

ＳＲ168（第12･17図）

ＭＡ55グリッドに位置する。体部が傾いて正立状態で地山面で確認した。他の遺構との重複はない。掘り形規模は開口部23×23cm、深さ８cm。埋土は単層である。土器内から遺物は出土していない。埋設土器(15･16)は、体部に結束の羽状縄文が施され、内面には棒状工具による磨きの痕跡が顕著に残っている。胎土には繊維を含んでいる。

本遺構の時期は、埋設土器から縄文時代前期と考えられる。

ＳＲ169（第12･17図）

ＬＴ57グリッドに位置する。正立状態で地山面で確認した。他の遺構との重複はない。掘り形規模は開口部20×17cm、深さ12cmで、埋土は単層である。土器内から遺物は出土していない。埋設土器(17～19)は、体部に結束の羽状縄文が施され、底部は上底となる。内面は平滑に調整され、胎土には繊維を含んでいる。

本遺構の時期は、埋設土器から縄文時代前期と考えられる。

（３）土坑

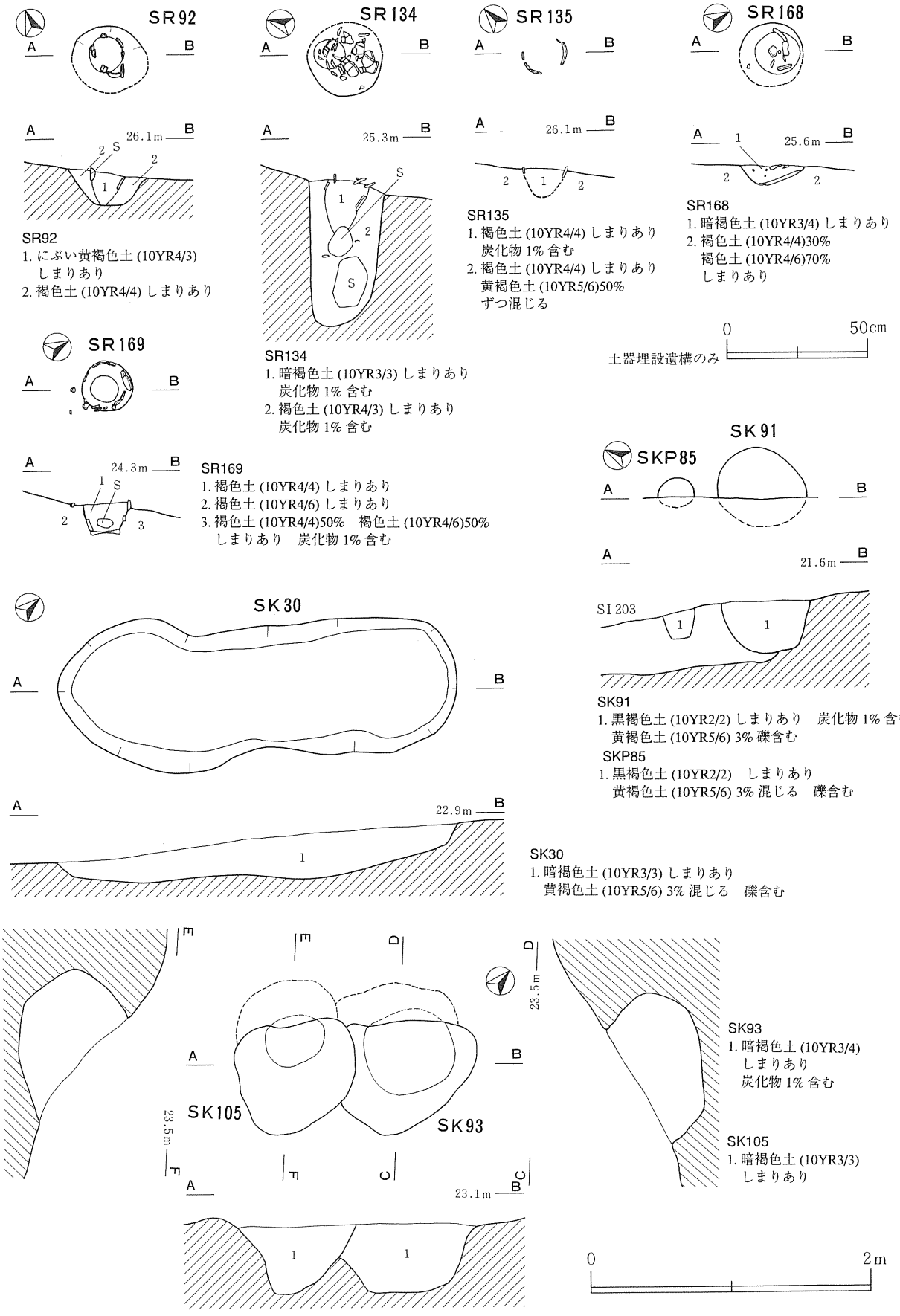
ＳＫ06（第17･36図）

ＭＨ43グリッドに位置する。Ⅲ層面精査中に黒褐色の落ち込みとして確認した。ＳＤ02、ＳＫＰ25と重複していた。新旧関係は本土坑がＳＤ02、ＳＫＰ25より旧い。規模と平面形はＳＤ02と重複しているため全容は不明であるが、残存部分では長軸204cm、短軸114cmの楕円形を呈する。埋土は２層に分層できた。壁は現状では26cmの高さで、緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面はほぼ平坦である。遺物は埋土中より縄文土器10点、口縁部に刷毛目状痕跡のある弥生土器(20) １点が出土した。

本遺構の時期は、遺物の出土状況や土器から縄文時代中期以降と判断される。

ＳＫ30（第12･18･19図）

ＭＧ45グリッドに位置する。Ⅲ層精査中に暗褐色土の落ち込みとしてⅢ層で確認した。他の遺構との重複はない。規模と平面形は長軸284cm、短軸96cmの不整楕円形を呈する。埋土は単層である。壁は現状では10～14cmの高さで緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は多少凹凸があり、斜面のためやや傾斜している。埋土中より、縄文土器14点、石器３点が出土した。土器(21)は、口唇部にＬＲ原



SR92
1. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) しまりあり
2. 褐色土 (10YR4/4) しまりあり

SR134
1. 暗褐色土 (10YR3/3) しまりあり 炭化物 1% 含む
2. 褐色土 (10YR4/3) しまりあり 炭化物 1% 含む

SR135
1. 褐色土 (10YR4/4) しまりあり 炭化物 1% 含む
2. 褐色土 (10YR4/4) しまりあり 黄褐色土 (10YR5/6)50% ずつ混じる

SR168
1. 暗褐色土 (10YR3/4) しまりあり
2. 褐色土 (10YR4/4)30% 褐色土 (10YR4/6)70% しまりあり

SR169
1. 褐色土 (10YR4/4) しまりあり
2. 褐色土 (10YR4/6) しまりあり
3. 褐色土 (10YR4/4)50%　褐色土 (10YR4/6)50% しまりあり　炭化物 1% 含む

SK91
1. 黒褐色土 (10YR2/2) しまりあり　炭化物 1% 含む 黄褐色土 (10YR5/6) 3% 礫含む

SKP85
1. 黒褐色土 (10YR2/2)　しまりあり 黄褐色土 (10YR5/6) 3% 混じる　礫含む

SK30
1. 暗褐色土 (10YR3/3) しまりあり 黄褐色土 (10YR5/6) 3% 混じる　礫含む

SK93
1. 暗褐色土 (10YR3/4) しまりあり 炭化物 1% 含む

SK105
1. 暗褐色土 (10YR3/3) しまりあり

第12図　土器埋設遺構・土坑・柱穴様ピット

体を回転施文し、体部にも同一原体の斜位回転を行う。(21)もＬＲ縄文を回転施文する体部破片である。いずれも、胎土、焼成とも良好である。石器(２)は、両面調整の行われる有茎石鏃であるが、主要剥離面には、先端部に先行剥離面を広く残す。

本遺構の時期は、出土土器から縄文時代前期以降と判断される。

ＳＫ91（第12図）

ＭＤ45グリッドに位置する。ＳＩ203の１層及び範囲確認調査時のトレンチ断面で確認した。ＳＩ203と重複し、本土坑が新しい。規模と平面形は、範確トレンチによって一部削平を受けているため全容は不明であるが、残存部分では長軸66cm、短軸36cmである。埋土は単層である。壁は現状では38cmの高さで、緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面はやや傾斜している。遺物は出土していない。

ＳＫ93（第12･18･19図）

ＭＣ48グリッドに位置する。Ⅲ層精査中に暗褐色土の落ち込みとして確認した。ＳＫ105と重複し、本土坑が古い。規模と平面形は長軸105cm、短軸86cmの不整形を呈する。埋土は２層に分層できた。壁は現状では40～50cmの高さで緩やかに内湾しながら立ち上がる。底面はほぼ平坦だが、南西側がやや低くなる。埋土中より縄文土器81点、石器８点が出土した。土器は、土坑覆土の中位からまとまって出土している。(23)は低波状の頂部に隆帯をアーチ状に貼り付け、アーチ頂部からは右方向に粘土紐を口唇上に貼り付けて緩やかなラインを作り出している。口縁内面には隆帯脇に盲孔があり、沈線が巡る。体部から口縁部にかけて直線的に外反する深鉢形土器で、体部には前段多条のＬＲ縄文が施される。(24)は、内湾する突起部分で上半には４本の横位の隆帯があり、下端の隆帯からはさらに３本の隆帯が垂下する。隆帯上には爪形状の刺突や、鋸歯状の貼り付けが施される。(26)は、口縁部に幅広い隆帯を貼付し、隆帯の上と隆帯に沿っては撚りの異なる原体の側面圧痕が施され、体部にはＲＬ縄文が回転施文される。石器には、両面調整された有茎石鏃(３)があり、主要剥離面の基部側に先行剥離面をわずかに残している。

本遺構の時期は、出土土器から縄文時代中期前半と考えられる。

ＳＫ105（第12･18図）

ＭＣ48グリッドに位置する。Ⅲ層精査中に暗褐色土の落ち込みとして確認した。ＳＫ93と重複し、本土坑が新しい。規模と平面形は長軸86cm、短軸78cmの不整円形を呈する。埋土は２層に分層できた。壁は現状では46～48cmの高さで緩やかに内湾しながら立ち上がる。底面はほぼ平坦である。埋土中より縄文土器38点、石器３点が出土した。土器(29･30)は同一個体で、隆帯上とその周辺に原体の側面圧痕が施される。

本遺構の時期は、出土土器から縄文時代中期前半と考えられる。

ＳＫ111（第13･18図）

ＭＤ48グリッドに位置する。Ⅲ層精査中に暗褐色土の落ち込みとして確認した。他の遺構との重複はない。規模と平面形は長軸109cm、短軸86cmの楕円形を呈する。埋土は単層である。壁は現状では６～16cmの高さで、緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は平坦であるが、斜面のため緩やかに傾斜している。埋土中から縄文土器11点が出土した。土器(31)は体部にＬＲ縄文、(32)は縦位のＲ撚糸文が施される。

本遺構の時期は、出土土器から縄文時代中期前半以降と判断される。

ＳＫ112（第13図）

ＭＤ48グリッドに位置する。Ⅲ層精査中に暗褐色土の落ち込みとして確認した。他の遺構との重複はない。規模と平面形は長軸98cm、短軸93cmのほぼ円形を呈する。埋土は単層である。壁は現状では13～30cmの高さで、緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は斜面のため北西側は傾斜しているが、南東側は平坦である。埋土中から縄文土器細片１点、石器剥片１点が出土した。

ＳＫ113（第13図）

ＭＥ47グリッドに位置する。Ⅲ層精査中に暗褐色土の落ち込みとして確認した。他の遺構との重複はない。規模と平面形は長軸78cm、短軸75cmのほぼ円形を呈する。埋土は単層である。壁は現状では６～12cmの高さで、緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は凹凸はないが、斜面のため傾斜している。遺物は出土していない。

ＳＫ114（第13図）

ＭＥ48グリッドに位置する。Ⅲ層精査中に暗褐色土の落ち込みとして確認した。他の遺構との重複はない。規模と平面形は長軸102cm、短軸74cmの楕円形を呈する。埋土は単層である。壁は現状では７～37cmの高さで、緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は斜面のため北西側は傾斜しているが、南東側はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

ＳＫ166（第13図）

ＭＢ53グリッドに位置する。Ⅲ層精査中に暗褐色土の落ち込みとして確認した。ＳＫ171と重複し、本土坑が古い。規模と平面形はＳＫ171と重複しているため全容は不明であるが、残存部分では長軸67cm、短軸66cmのほぼ円形を呈する。埋土は単層である。壁は現状では23cmの高さで緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は平坦である。埋土中から縄文土器細片３点が出土した。

ＳＫ170（第13･18図）

ＭＡ53グリッドに位置する。地山面精査中に褐色土の落ち込みとして確認した。他の遺構との重複はない。規模と平面形は長軸82cm、短軸71cmの円形を呈する。埋土は単層である。壁は現状では35cmの高さで、緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面はほぼ平坦である。遺物は埋土中から縄文土器29点、土製品１点、半円状扁平打製石器１点が出土した。土器(33)にはＬＲ縄文が、(32)の隆帯には側面圧痕が施される。土製品(44)は太さ８㎜、直径30㎜の環状を呈している。半円状扁平打製石器(８)は、安山岩の扁平な自然礫の両端を、礫石錘と同様な打ち欠き、さらに片側縁を敲打した後に、磨り面が形成されている。

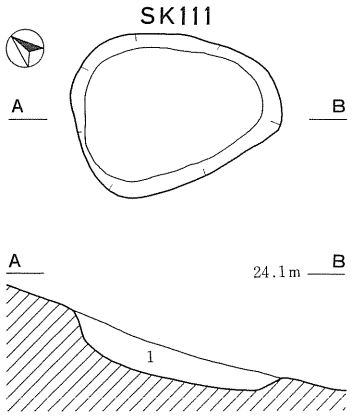
本遺構の時期は、出土遺物から縄文時代中期前半以降と考えられる。

ＳＫ171（第13図）

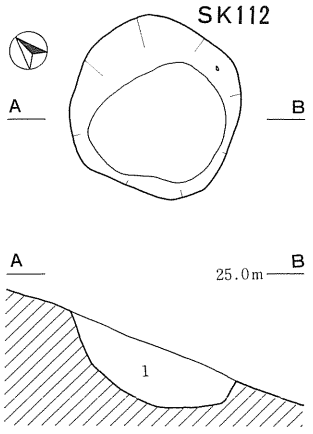
ＭＢ53グリッドに位置する。Ⅲ層精査中に暗褐色土の落ち込みとして確認した。ＳＫ166と重複し、本土坑が新しい。規模と平面形は長軸85cm、短軸70cmの不整形を呈する。埋土は単層である。壁は現状では27cmの高さで、緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は平坦である。埋土中から、摩滅した縄文土器５点が出土した。

ＳＫ173（第13図）

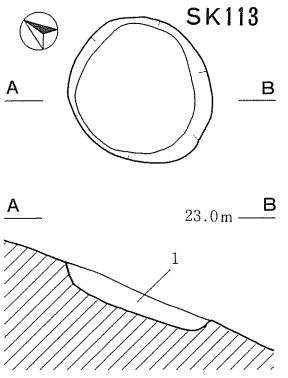
ＬＴ57グリッドに位置する。Ⅲ層精査中に暗褐色土の落ち込みとして確認した。他の遺構との重複はない。規模と平面形は長軸83cm、短軸74cmのほぼ円形を呈する。埋土は単層である。壁は現状では



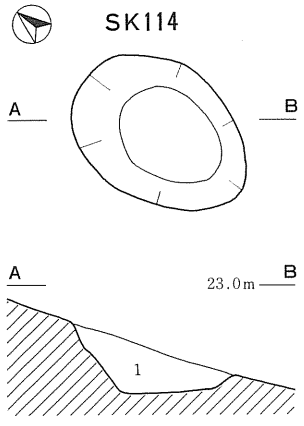
SK111
1. 暗褐色土 (10YR3/3) しまりあり
炭化物 1% 含む



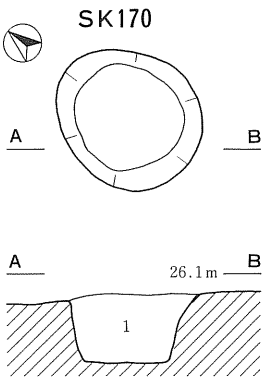
SK112
1. 暗褐色土 (10YR3/3) しまりあり



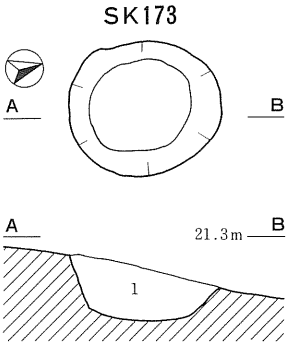
SK113
1. 暗褐色土 (10YR3/3) しまりあり
にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 30% 混じる
炭化物 1% 含む



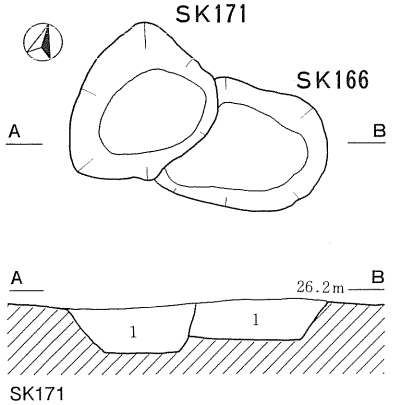
SK114
1. 暗褐色土 (10YR3/3)
しまりあり
褐色土 (10YR4/4) 5% 混じる



SK170
1. 褐色土 (10YR4/4) しまりあり
黄褐色土 (10YR5/6)
粒子 1% 斑状に含む
炭化物 1% 含む

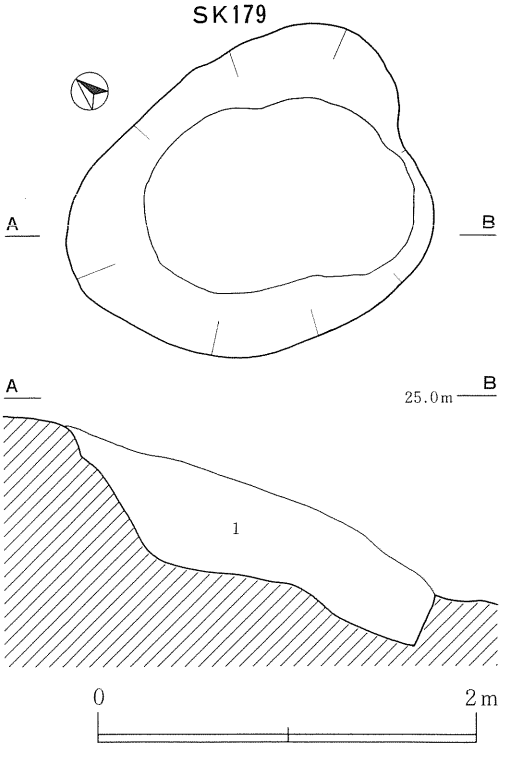


SK173
1. 暗褐色土 (10YR3/3) しまりあり
褐色土 (10YR4/4) 3% 混じる
炭化物 1% 含む



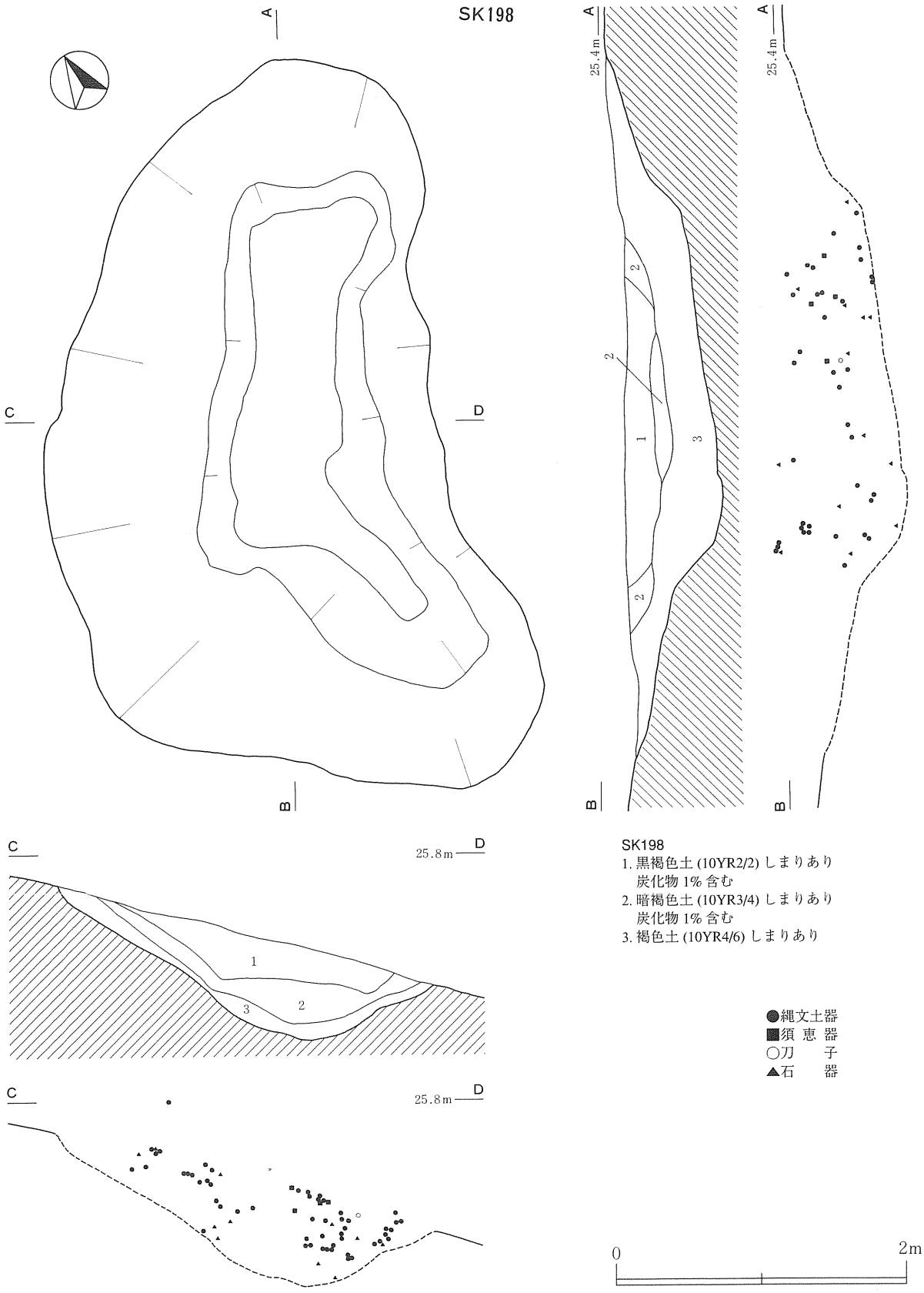
SK166
1. 暗褐色土 (10YR3/3) しまりあり
炭化物 1% 含む
黄褐色土 (10YR5/6) 1% 含む

SK171
1. 暗褐色土 (10YR3/3)50%　黄褐色土 (10YR5/6)50%
しまりあり　炭化物 1% 含む



SK179
1. 暗褐色土 (10YR3/3)
しまりあり　礫含む

第13図　土坑


SK198
A
B
C
D
25.4m
25.8m
1
2
3
SK198
1. 黒褐色土 (10YR2/2) しまりあり
炭化物 1% 含む
2. 暗褐色土 (10YR3/4) しまりあり
炭化物 1% 含む
3. 褐色土 (10YR4/6) しまりあり
●縄文土器
■須 恵 器
○刀　　子
▲石　　器
0
2m

第14図　土坑

16～28cmの高さで、緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は凹凸はないが、中央が窪んでいる。遺物は出土していない。

ＳＫ179（第13図）

ＬＳ52グリッドに位置する。Ⅲ層精査中に暗褐色土の落ち込みとして確認した。他の遺構との重複はない。規模と平面形は長軸188cm、短軸158cmの不整円形を呈する。埋土は単層である。壁は現状では29～70cmの高さで、緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は凹凸は少ないが、斜面に位置するため傾斜している。埋土中から、縄文土器８点が出土した。

ＳＫ197（第15図）

ＬＴ56グリッドに位置する。プラン確認中に褐色土の落ち込みとして地山面で確認した。他の遺構との重複はない。規模と平面形は長軸111cm、短軸60cmの隅丸長方形を呈する。埋土は単層である。壁は現状では10～18cmの高さで、やや外傾しながら立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが斜面のためやや傾斜している。遺物は出土していない。

ＳＫ198（第14･18図）

ＭＡ50グリッドに位置する。Ⅲ層精査中に黒褐色の落ち込みとして確認した。他の遺構との重複はない。規模と平面形は長軸510cm、短軸274cmの不正形を呈する。埋土は３層に分層できた。壁は現状で42～60cmの高さがあり緩やかに外傾しながら立ちあがる。底面は多少の凸凹はあるが、ほぼ平坦である。遺物は、縄文土器59点、石器剥片15点が２・３層から、須恵器４点、刀子１点が１層から出土しているが、後者は流れ込みと考えられる。縄文土器には、絡条体側面圧痕文(37)、ＬＲ縄文の側面圧痕文(38)、Ｒ撚糸文(39)が施されている。

本遺構は、出土土器から縄文時代中期前半と考えられる。

ＳＫ235（第15･19図）

ＭＢ54グリッドに位置する。Ⅲ層面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。他の遺構との重複はない。規模と平面形は長軸113cm、短軸84cmの隅丸方形を呈する。埋土は２層に分層できた。壁は現状では、東側は20cmの高さでやや外傾しながら、また西側は32cmの高さで緩やかに内湾しながら立ち上がる。底面は平坦である。埋土中から摩滅した縄文土器７点と、石匙が出土した。石器(７)は、頁岩の縦長剥片を素材とし、打面の反対端部につまみ部を設ける。背面の両側縁に急角度の刃部を作り出している。

（４）焼土遺構

ＳＮ136（第15図）

ＭＢ52グリッドに位置する。Ⅲ層精査中に焼土の広がりを確認した。他の遺構との重複はない。焼土の広がりは、長軸81cm、短軸47cmのほぼ楕円形を呈する。遺物は出土していない。

ＳＮ137（第15図）

ＭＡ54グリッドに位置する。Ⅲ層精査中に焼土の広がりを確認した。他の遺構との重複はない。焼土の広がりは、長軸75cm、短軸51cmの不整楕円形を呈する。焼土中から石器１点が出土した。

ＳＮ138（第15図）

ＭＡ54グリッドに位置する。Ⅲ層精査中に焼土の広がりを確認した。他の遺構との重複はない。焼土の広がりは、長軸30cm、短軸14cmの楕円形を呈する。遺物は出土していない。

ＳＮ139（第15図）

ＭＡ54グリッドに位置する。Ⅲ層精査中に焼土の広がりを確認した。他の遺構との重複はない。焼土の広がりは、長軸48cm、短軸35cmの楕円形を呈する。遺物は出土していない。

ＳＮ163（第15図）

ＭＢ52グリッドに位置する。Ⅲ層精査中に焼土の広がりを確認した。他の遺構との重複はない。焼土の広がりは、長軸53cm、短軸41cmの不整円形を呈する。遺物は出土していない。

ＳＮ204（第15図）

ＬＳ54グリッドに位置する。Ⅲ層精査中に焼土の広がりを確認した。他の遺構との重複はない。焼土の広がりは、長軸82cm、短軸73cmの不整円形を呈する。遺物は出土していない。

（５）溝跡

ＳＤ63（第15図）

ＭＦ45グリッドに位置する。暗褐色のプランとしてⅢ層で確認した。他の遺構との重複はない。規模は長さ4.0m、幅10～24cm、深さ３～13cm。断面形はＵ字形を呈する。埋土は単層である。遺物は縄文土器が２点出土している。

ＳＤ164（第15図）

ＭＡ54、ＭＢ54グリッドに位置する。暗褐色のプランとしてⅢ層で確認した。ＳＤ165と重複し、本遺構が新しい。規模は長さ4.3m、幅22～39cm、深さ５～24cm。断面形はＵ字形を呈する。埋土は単層である。遺物は縄文土器が７点出土している。

ＳＤ165（第15図）

ＭＡ54、ＭＢ54グリッドに位置する。暗褐色のプランとしてⅢ層で確認した。ＳＤ164と重複し、本遺構が古い。規模は長さ3.7m、幅28～40cm、深さ８～25cm。断面形はＵ字形を呈する。埋土は単層である。遺物は縄文土器が２点出土している。

（６）柱穴様ピット

ＳＫＰ45（第16図）

ＭＦ45グリッドに位置する。暗褐色のプランとしてⅢ層で確認した。他の遺構との重複はない。規模と平面形は長軸33cm、短軸28cmの略円形を呈する。埋土は単層である。遺物は縄文土器が１点出土している。

ＳＫＰ46（第16図）

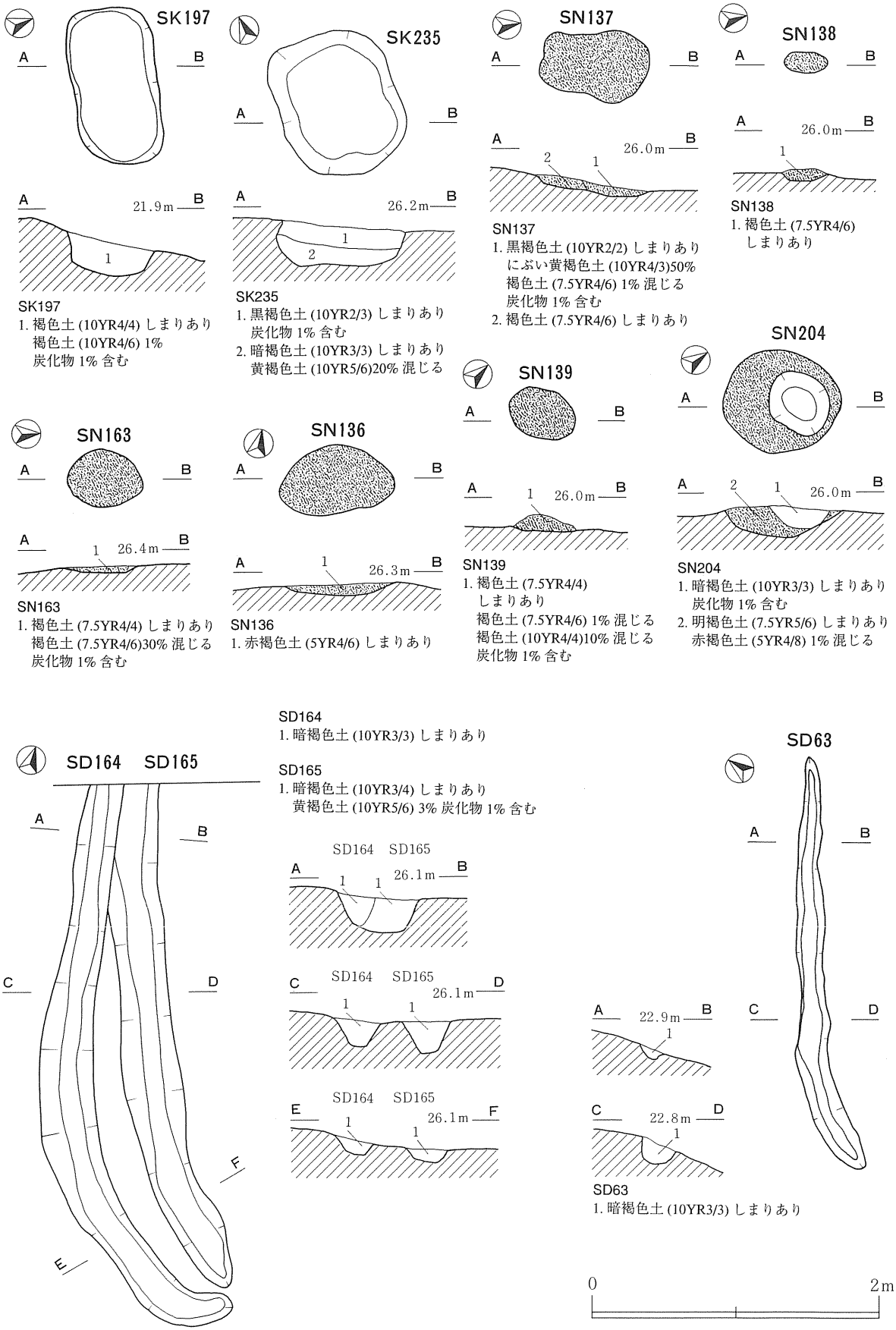
ＭＦ45グリッドに位置する。暗褐色のプランとしてⅢ層で確認した。他の遺構との重複はない。規模と平面形は長軸35cm、短軸29cmの楕円形を呈し、埋土は単層である。遺物は縄文土器が１点出土している。

ＳＫＰ60（第16図）

ＭＩ41グリッドに位置する。暗褐色のプランとしてⅢ層で確認した。他の遺構との重複はない。規模と平面形は長軸29cm、短軸26cmの略円形を呈し、埋土は単層である。遺物は縄文土器が２点出土している。

ＳＫＰ66（第16図）

ＭＦ45グリッドに位置する。暗褐色のプランとしてⅢ層で確認した。他の遺構との重複はない。



第15図　土坑・焼土遺構・溝跡

規模と平面形は長軸34cm，短軸18cmの楕円形を呈し、埋土は単層である。遺物は縄文土器が１点出土している。

ＳＫＰ74（第16･19図）

ＭＨ44グリッドに位置する。暗褐色のプランとしてⅢ層で確認した。他の遺構との重複はない。規模と平面形は長軸28cm、短軸22cmの方形を呈する。埋土は単層である。遺物は縄文土器が３点と、頁岩の楔形石器（５）と二次加工のある剥片（４）が出土している。

ＳＫＰ78（第16図）

ＭＥ44グリッドに位置する。黒褐色のプランとしてⅢ層で確認した。他の遺構との重複はない。規模と平面形は長軸20cm、短軸18cmの略円形を呈し、埋土は単層である。遺物は縄文土器が２点出土している。

ＳＫＰ82（第16図）

ＭＥ44グリッドに位置する。黒褐色のプランとしてⅢ層で確認した。他の遺構との重複はない。規模と平面形は直径18cmの円形を呈する。埋土は単層である。遺物は縄文土器が１点出土している。

ＳＫＰ96（第16図）

ＭＣ45グリッドに位置する。暗褐色のプランとしてⅢ層で確認した。他の遺構との重複はない。規模と平面形は長軸53cm、短軸45cmの不整円形を呈し、埋土は単層である。遺物は縄文土器が１点出土している。

ＳＫＰ97（第16図）

ＭＣ45グリッドに位置する。黒褐色のプランとしてⅢ層で確認した。他の遺構との重複はない。規模と平面形は長軸23cm、短軸21cmの不整円形を呈し、埋土は単層である。遺物は縄文土器が１点出土している。

ＳＫＰ107（第16図）

ＭＢ46グリッドに位置する。黒褐色のプランとしてⅢ層で確認した。他の遺構との重複はない。規模と平面形は長軸19cm、短軸16cmの不整円形を呈し、埋土は単層である。

ＳＫＰ108（第16図）

ＭＢ47グリッドに位置する。暗褐色のプランとしてⅢ層で確認した。他の遺構との重複はない。規模と平面形は長軸23cm、短軸21cmの不整円形を呈し、埋土は単層である。

ＳＫＰ109（第16図）

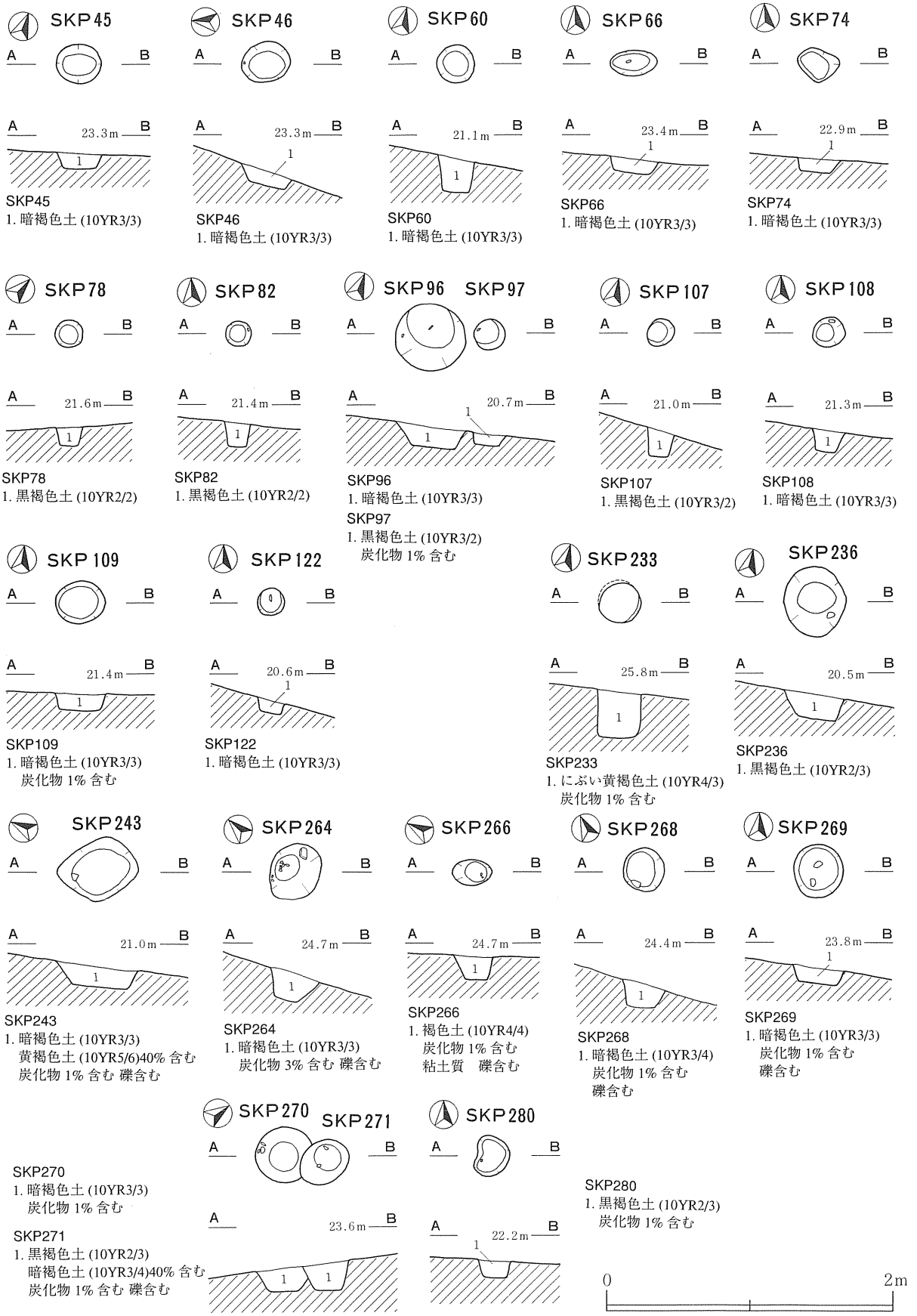
ＭＢ47グリッドに位置する。暗褐色のプランとしてⅢ層で確認した。他の遺構との重複はない。規模と平面形は長軸35cm、短軸30cmの不整円形を呈し、埋土は単層である。遺物は縄文土器が８点出土している。

ＳＫＰ122（第16図）

ＭＢ46グリッドに位置する。暗褐色のプランとしてⅢ層で確認した。他の遺構との重複はない。規模と平面形は長軸20cm、短軸19cmの略円形を呈し、埋土は単層である。

ＳＫＰ233（第16図）

ＭＡ55グリッドに位置する。にぶい黄褐色のプランとしてⅢ層で確認した。他の遺構との重複はない。規模と平面形は長軸30cm、短軸28cmの略円形を呈する。埋土は単層である。遺物は縄文土器が３


SKP45
SKP46
SKP60
SKP66
SKP74
SKP78
SKP82
SKP96
SKP97
SKP107
SKP108
SKP109
SKP122
SKP233
SKP236
SKP243
SKP264
SKP266
SKP268
SKP269
SKP270
SKP271
SKP280
A
B
23.3m
21.1m
23.4m
22.9m
21.6m
21.4m
20.7m
21.0m
21.3m
20.6m
25.8m
20.5m
21.0m
24.7m
24.4m
23.8m
23.6m
22.2m
1
SKP45
1. 暗褐色土 (10YR3/3)
SKP46
1. 暗褐色土 (10YR3/3)
SKP60
1. 暗褐色土 (10YR3/3)
SKP66
1. 暗褐色土 (10YR3/3)
SKP74
1. 暗褐色土 (10YR3/3)
SKP78
1. 黒褐色土 (10YR2/2)
SKP82
1. 黒褐色土 (10YR2/2)
SKP96
1. 暗褐色土 (10YR3/3)
SKP97
1. 黒褐色土 (10YR3/2)
炭化物 1% 含む
SKP107
1. 黒褐色土 (10YR3/2)
SKP108
1. 暗褐色土 (10YR3/3)
SKP109
1. 暗褐色土 (10YR3/3)
炭化物 1% 含む
SKP122
1. 暗褐色土 (10YR3/3)
SKP233
1. にぶい黄褐色土 (10YR4/3)
炭化物 1% 含む
SKP236
1. 黒褐色土 (10YR2/3)
SKP243
1. 暗褐色土 (10YR3/3)
黄褐色土 (10YR5/6)40% 含む
炭化物 1% 含む 礫含む
SKP264
1. 暗褐色土 (10YR3/3)
炭化物 3% 含む 礫含む
SKP266
1. 褐色土 (10YR4/4)
炭化物 1% 含む
粘土質　礫含む
SKP268
1. 暗褐色土 (10YR3/4)
炭化物 1% 含む
礫含む
SKP269
1. 暗褐色土 (10YR3/3)
炭化物 1% 含む
礫含む
SKP270
1. 暗褐色土 (10YR3/3)
炭化物 1% 含む
SKP271
1. 黒褐色土 (10YR2/3)
暗褐色土 (10YR3/4)40% 含む
炭化物 1% 含む 礫含む
SKP280
1. 黒褐色土 (10YR2/3)
炭化物 1% 含む
0
2m

第16図　柱穴様ピット

点出土している。

ＳＫＰ236（第16図）

ＭＥ43グリッドに位置する。黒褐色のプランとして地山面で確認した。他の遺構との重複はない。規模と平面形は長軸50cm、短軸44cmの略円形を呈し、埋土は単層である。遺物は縄文土器が１点出土している。

ＳＫＰ243（第16図）

ＭＥ44グリッドに位置する。暗褐色のプランとして地山面で確認した。他の遺構との重複はない。規模と平面形は長軸57cm、短軸43cmの方形を呈し、埋土は単層である。遺物は縄文土器が１点出土している。

ＳＫＰ264（第16・18図）

ＭＢ49グリッドに位置する。暗褐色のプランとして地山面で確認した。他の遺構との重複はない。規模と平面形は長軸46cm、短軸35cmの不整円形を呈し、埋土は単層である。口縁部に側面圧痕文の施される土器(41)など８点が出土している。

ＳＫＰ266（第16図）

ＭＢ50グリッドに位置する。褐色のプランとして地山面で確認した。他の遺構との重複はない。規模と平面形は長軸27cm、短軸19cmの楕円形を呈し、埋土は単層である。遺物は縄文土器が３点出土している。

ＳＫＰ268（第16図）

ＭＢ49グリッドに位置する。暗褐色のプランとして地山面で確認した。他の遺構との重複はない。規模と平面形は長軸32cm、短軸29cmの不整円形を呈し、埋土は単層である。遺物は縄文土器が１点出土している。

ＳＫＰ269（第16図）

ＭＢ49グリッドに位置する。暗褐色のプランとして地山面で確認した。他の遺構との重複はない。規模と平面形は長軸39cm、短軸36cmの略円形を呈する。埋土は単層である。遺物は縄文土器が２点出土している。

ＳＫＰ270（第16図）

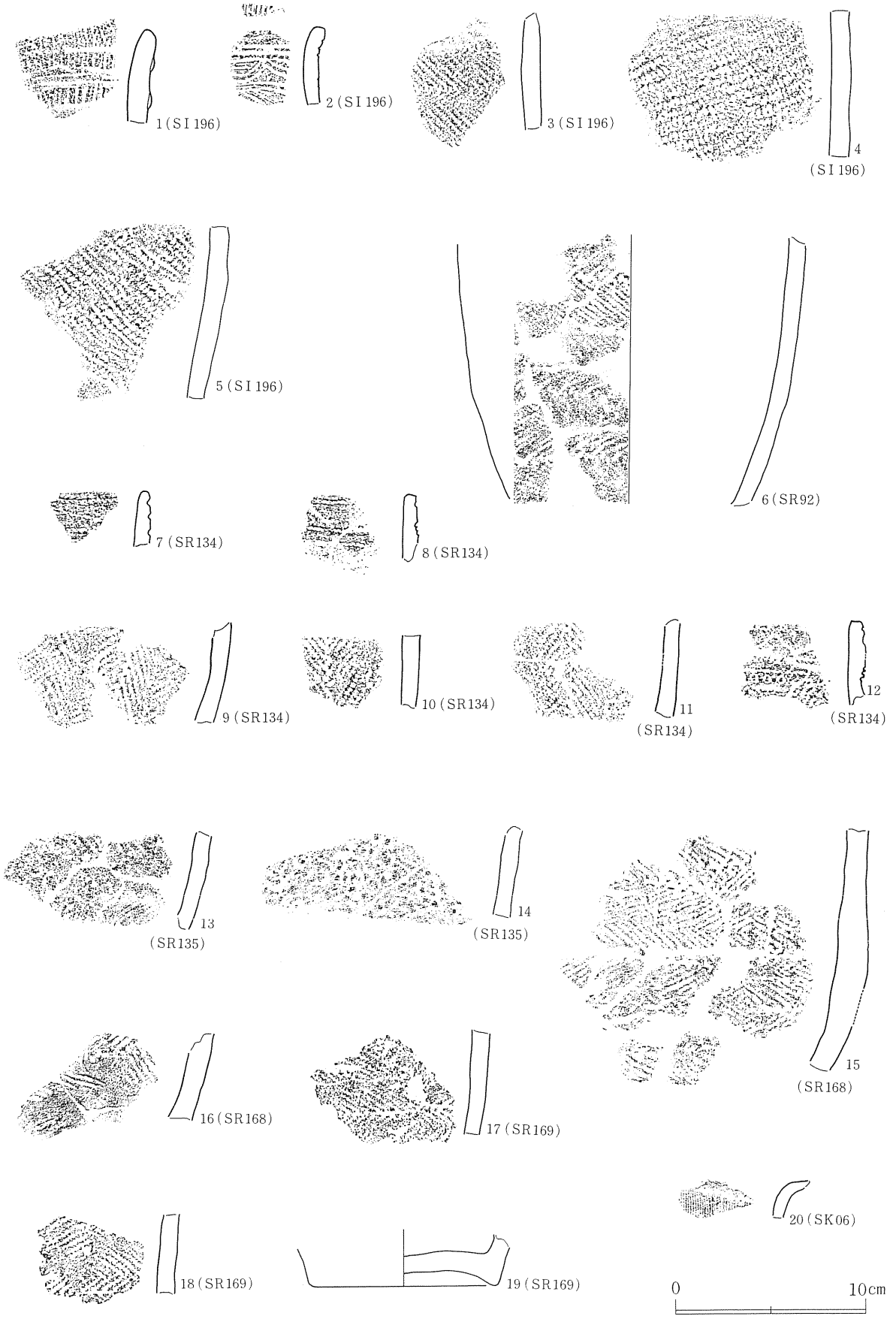
ＭＢ49グリッドに位置する。暗褐色のプランとして地山面で確認した。ＳＫＰ271と重複し、本遺構が旧い。規模と平面形はＳＫＰ271と重複しているため全容は不明であるが、現状では長軸38cm、短軸32cmの不整円形を呈する。埋土は単層である。遺物は縄文土器が３点出土している。

ＳＫＰ271（第16図）

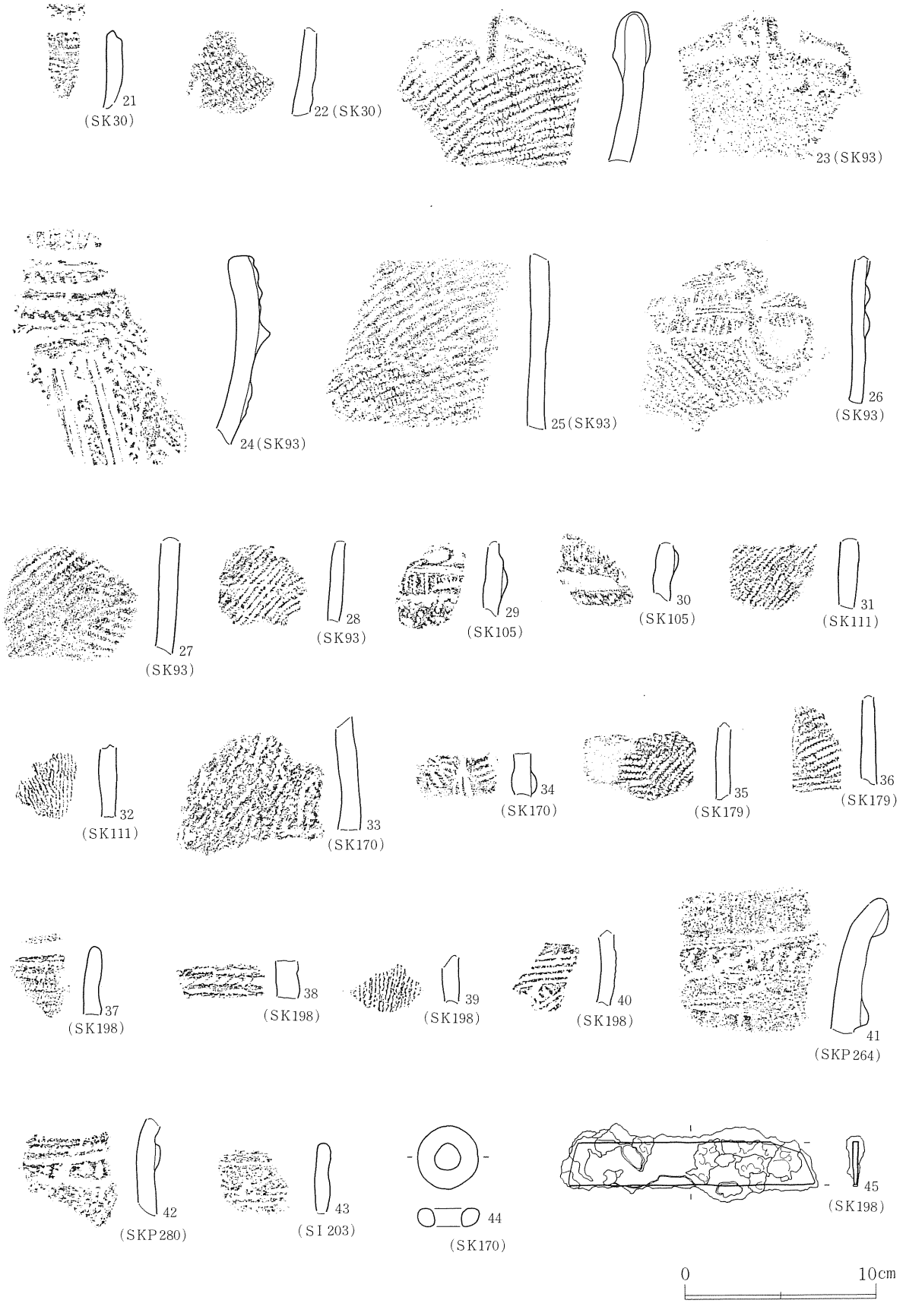
ＭＢ49グリッドに位置する。黒褐色のプランとして地山面で確認した。ＳＫＰ270と重複し、本遺構が新しい。規模と平面形は長軸39cm、短軸30cmの楕円形を呈する。埋土は単層である。遺物は縄文土器が２点出土している。

ＳＫＰ280（第16・18図）

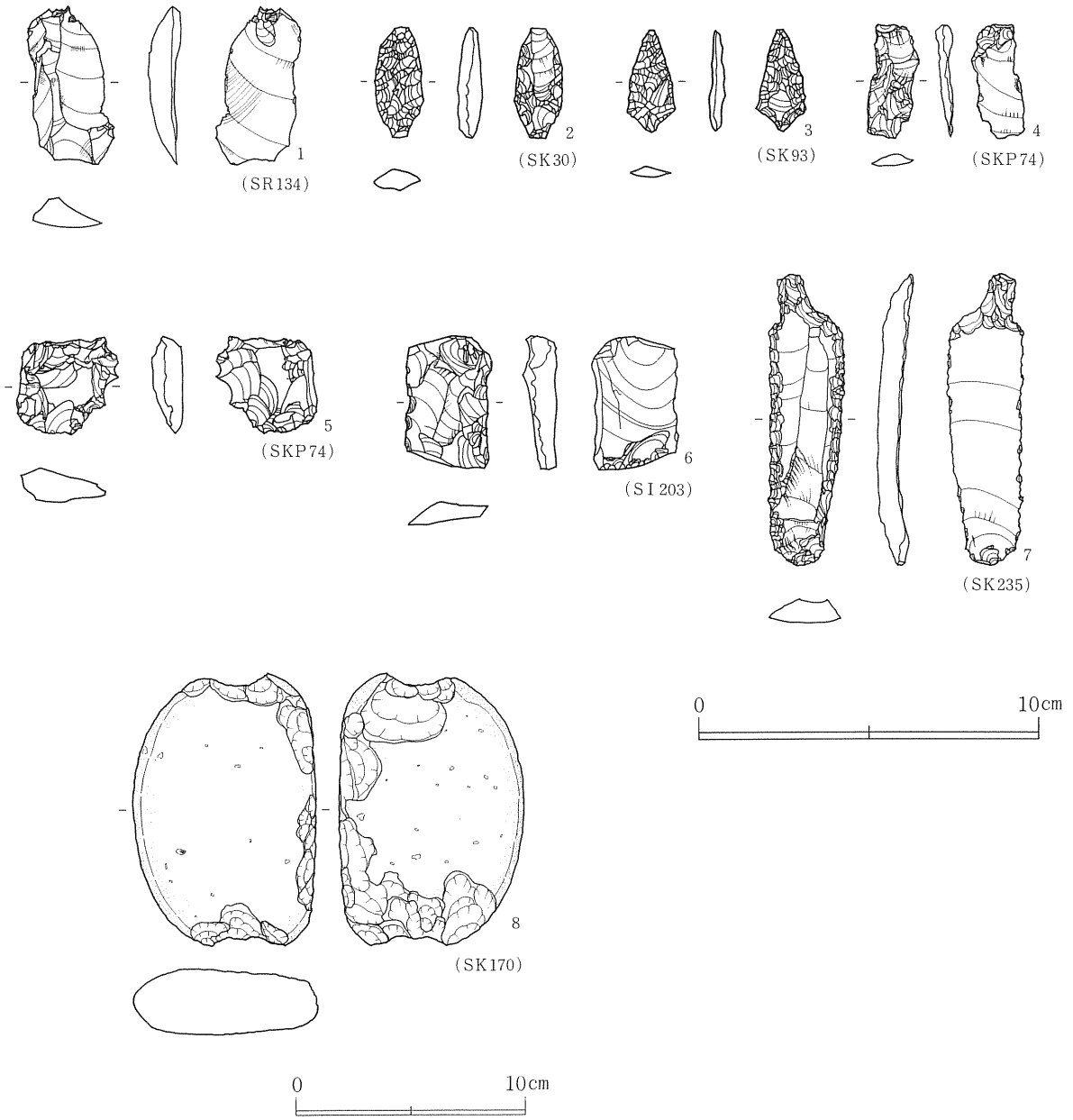
ＭＡ47グリッドに位置する。黒褐色のプランとして地山面で確認した。他の遺構との重複はない。規模と平面形は長軸28cm、短軸23cmの不整円形を呈する。埋土は単層である。隆帯間に絡条体圧痕文が施される土器(42)が出土している。



第17図　遺構内出土土器（１）



第18図　遺構内出土土器（２）



第19図　遺構内出土石器（１）

第２表　遺構内石器属性表

挿図番号	出土遺構	器種名	石質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)
19-1	SR134-RQ01	ＵＦ	黒曜石	47	20	10	7.7
19-2	SK30-RQ07	石鏃	珪質頁岩	32	14	6	2.6
19-3	SK93	石鏃	珪質頁岩	30	14	4	1.0
19-4	SKP74	ＲＦ	珪質頁岩	33	15	5	1.6
19-5	SKP74	楔形石器	珪質頁岩	29	25	9	7.4
19-6	SI203	ＲＦ	珪質頁岩	39	25	10	8.3
19-7	SK235-RQ02	石匙	珪質頁岩	86	21	10	15.3
19-8	SK170-S19	半円状扁平打製石器	輝石安山岩	120	81	29	400.2

２　遺構外出土遺物

遺構外の出土遺物のうち、縄文時代と弥生時代の遺物は、調査区中央部の平坦面南側で、標高20～25mの東向き斜面から出土している。出土量は、土器が4,483点、石器が141点、石器剥片が662点で、古代の遺物をも含めた全遺物量の91％である。

（１）土器（第20～26図）

遺構外出土の土器は、破片だけで器形が明瞭なものは無いため、文様を中心に分類を行う。

１類(46～52)：口縁部文様帯に原体の側面圧痕文が施される土器で、口縁は直立ないしは外反し、低波状を呈するものもある。胎土は緻密で、焼成も良好である。口唇は丸みがあり、縄文原体の側面圧痕が縦位に付され、口縁部にも同一の原体により数条の側目圧痕文が施される(48･49･51･52)。また、口縁部に絡条体の側面圧痕文のある土器(46･47･50)もある。円筒下層ｄ式である。

２類(53～91)：広い口縁部文様帯に１類で見られる横位の側面圧痕文に、縄文原体の一端をループあるいは弧状にしたものの側面圧痕文や、刺突文が加わる。口縁は、肥厚して１類よりも大きく外反し、波状部は「八」の字状の大きな突起となる。口縁部文様帯は、突起から垂下する１ないしは２条の隆帯によって区画され、体部とは横位の隆帯で画される。胎土は緻密で、焼成も良好である。

ループ状や弧状の側面圧痕文や刺突列は、２条一組の縄文原体の側面圧痕文に挟まれるように配置される(53～68･70～75)。また、隆帯上や隆帯に沿って２条の縄文原体の側面圧痕文を付す(87～91)ものもある。円筒上層ａ式である。

３類(92～117)：「八」の字状の突起部を起点とする隆帯が曲線的になり、鋸歯状に貼り付けたり交差させることにより、口縁部文様帯に三角形や五角形の空間を作り出している。口唇や口縁部と隆帯上には、２類と同様の原体の側面圧痕文が多用される。胎土は緻密で、焼成も良好である。円筒上層ｂ式である。

４類(118～137･159～164)：体部破片と底部破片で、胎土や焼成などから１～３類に伴うと考えられる土器である。撚糸文（118･119)、結束の羽状縄文（120～124･132)、単節斜縄文（124～131･133～136）などが付される。137は、底部から体部にかけて大きく外反する鉢形土器と考えられるが、体部の縄文の原体は、摩滅が激しく不明である。

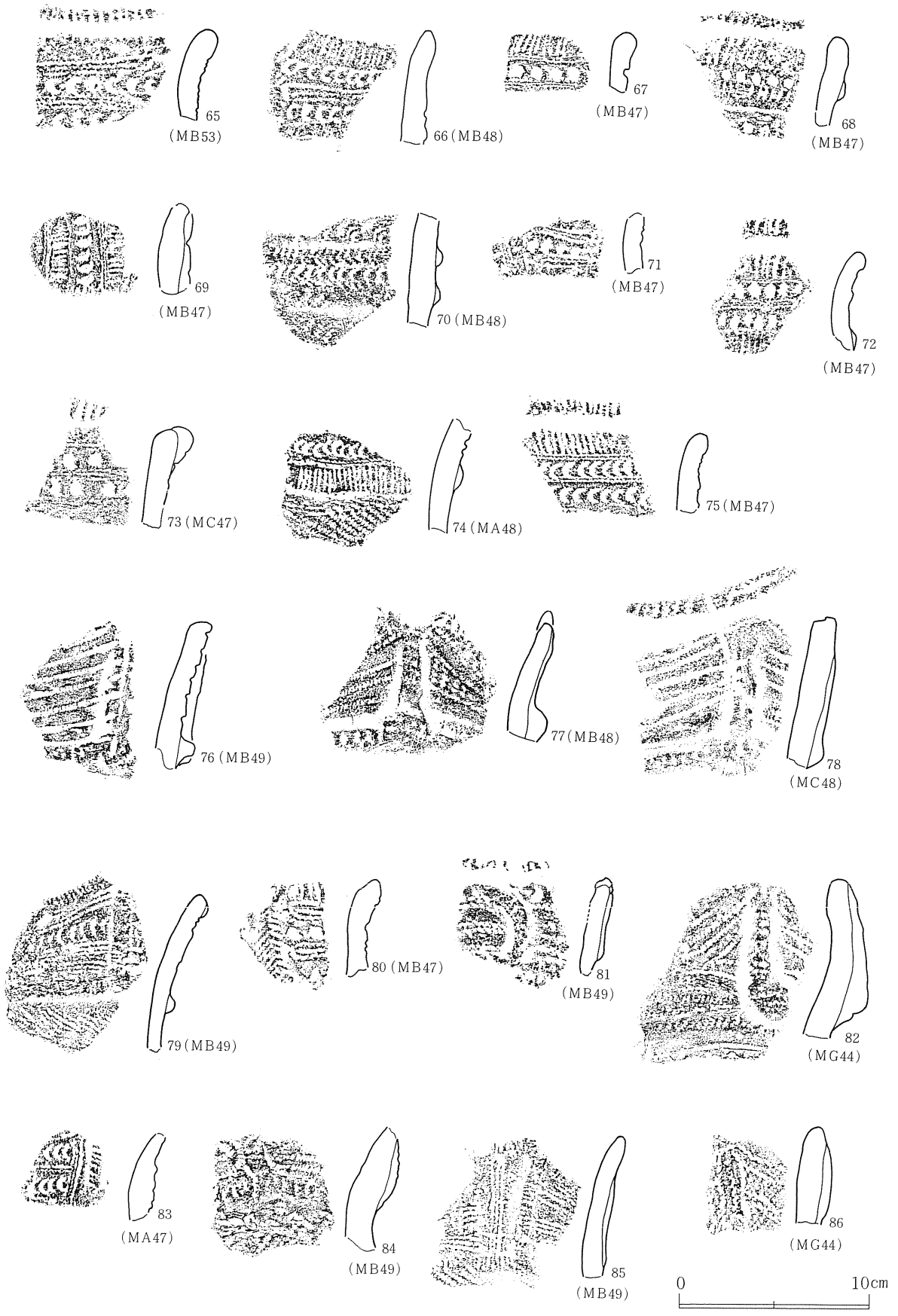
５類(137～158)：口縁部文様帯に、半裁竹管状工具による刻目がある隆帯や、格子目状や縦位の沈線文が施され、体部には単節斜縄文を地文として、縦位の平行沈線や鋸歯文が付される。北陸の新保･新崎様式の土器と考えられる。

６類(166～169)：細い沈線で囲まれた縄文帯が、矩形や鋸歯状を呈する土器である。縄文はＬＲ縄文で、(167)は壺形土器、(168･169)は台付土器の台部分である。弥生時代の土器である。

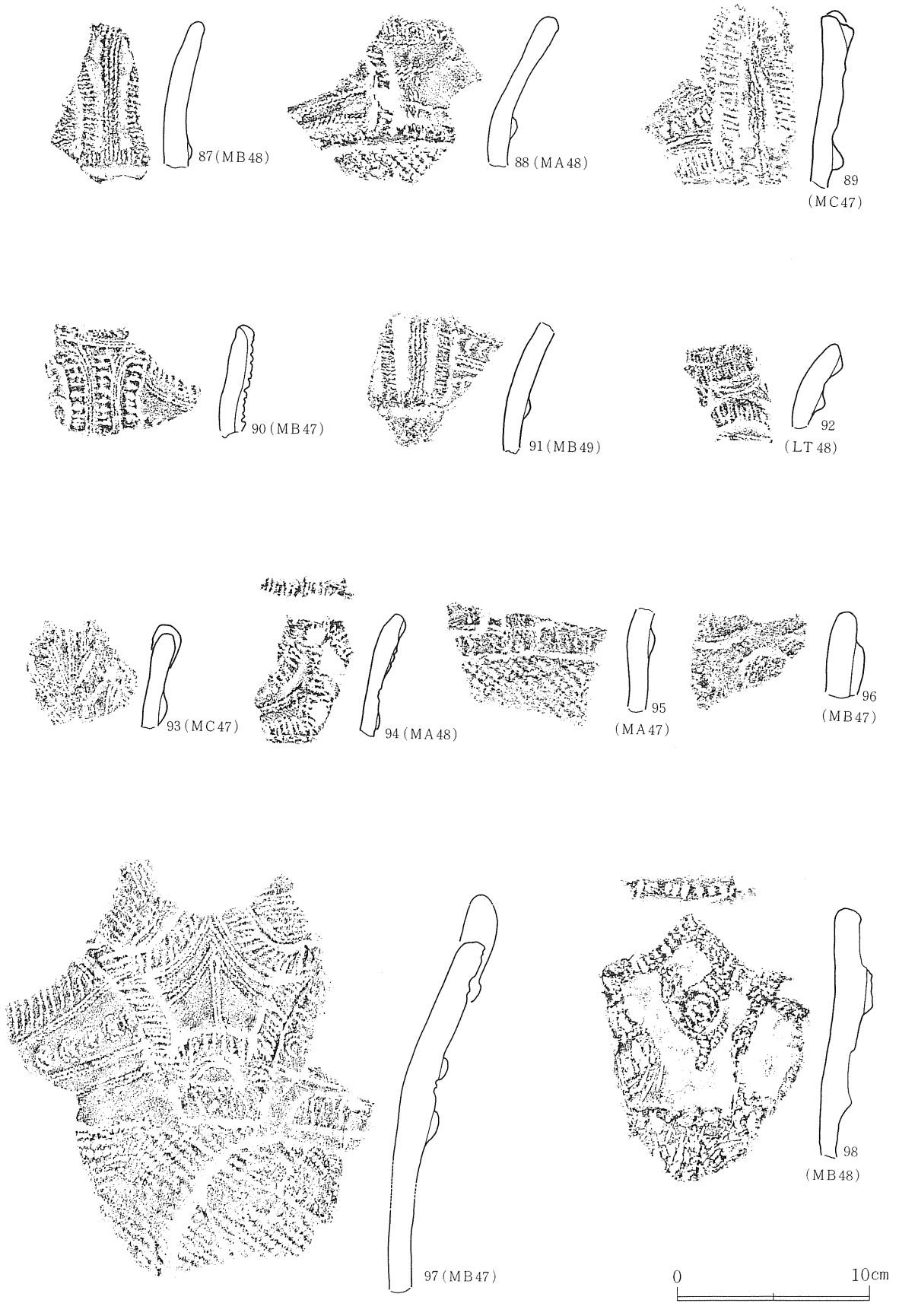
（２）土製品（第26図）

土偶(170)は、肩部から胸部にかけての部分で、胸部部分が中空となっている。背中からは肩部と上腕にかけて、頸部と胸部まで３条一組の沈線が引かれ、胸部では沈線が乳房を巻き込むようにして収束する。胸部の内面では、粘土紐の接合痕が明瞭である。胎土は、白色の砂粒を含むものの緻密で焼成も良い。(171)も沈線で文様が施される土偶破片と考えられ、胎土、粘土紐の接合痕などから(170)と同一個体の可能性がある。弥生時代の土偶である。

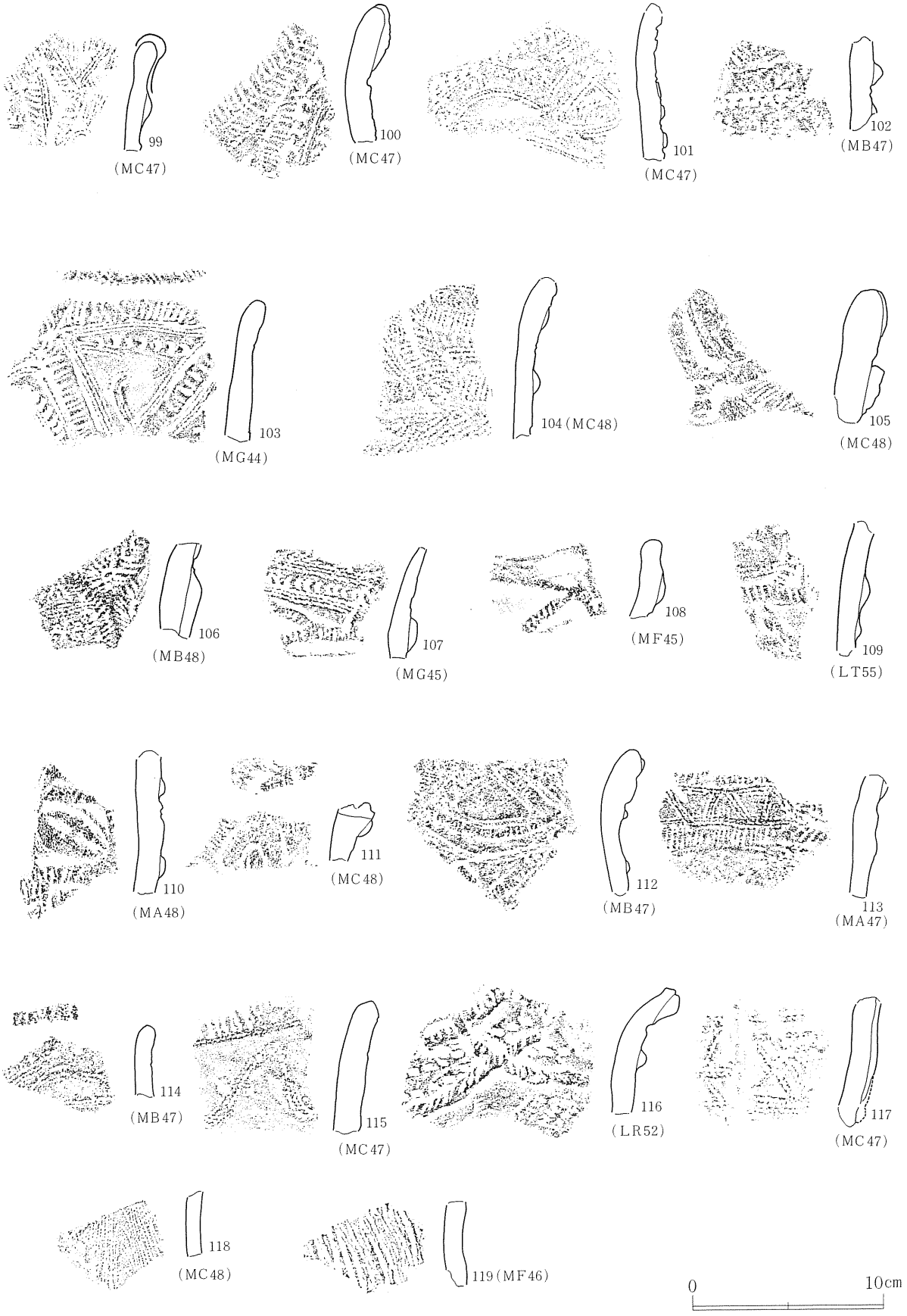
第20図　遺構外出土土器（１）



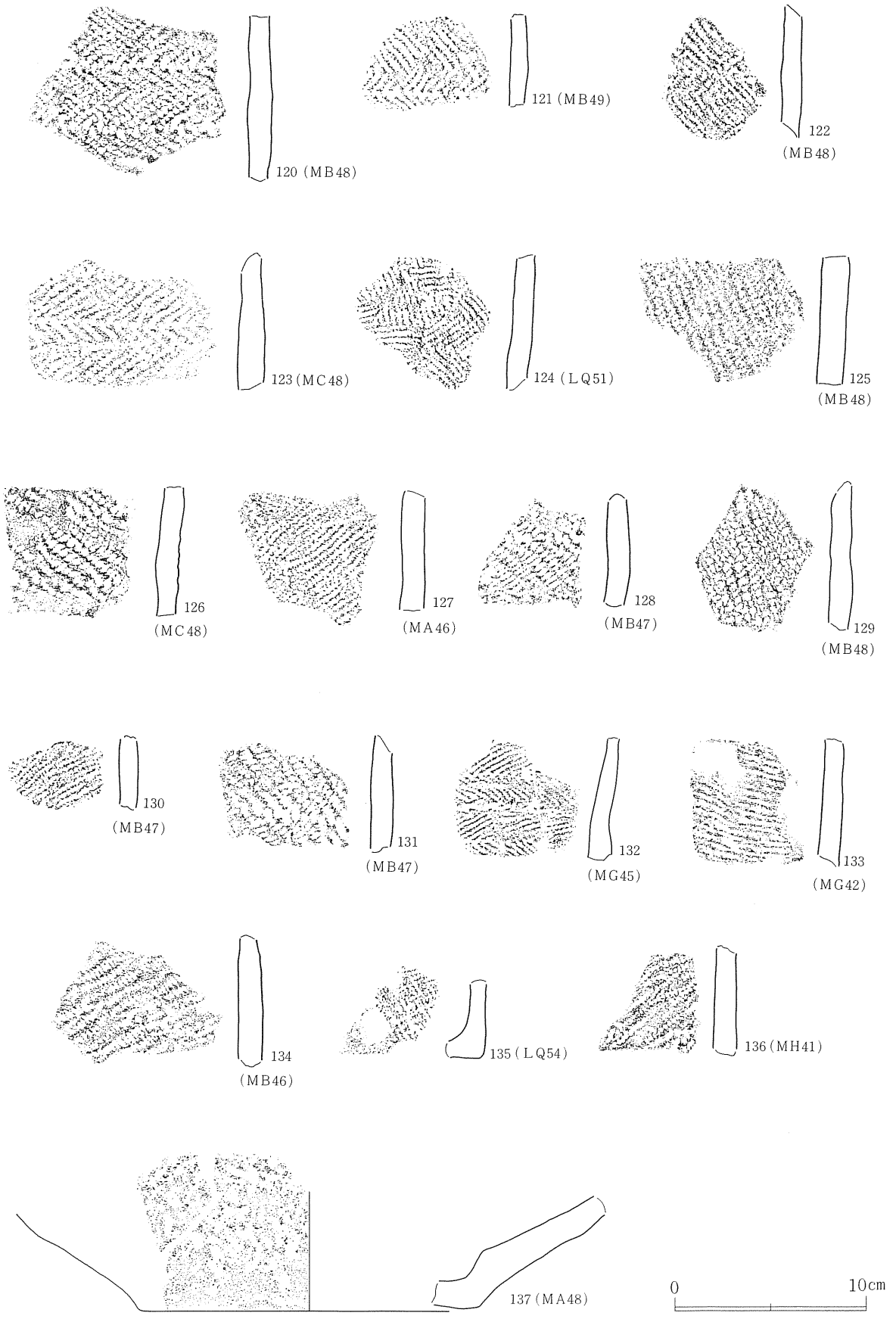
第21図　遺構外出土土器（２）



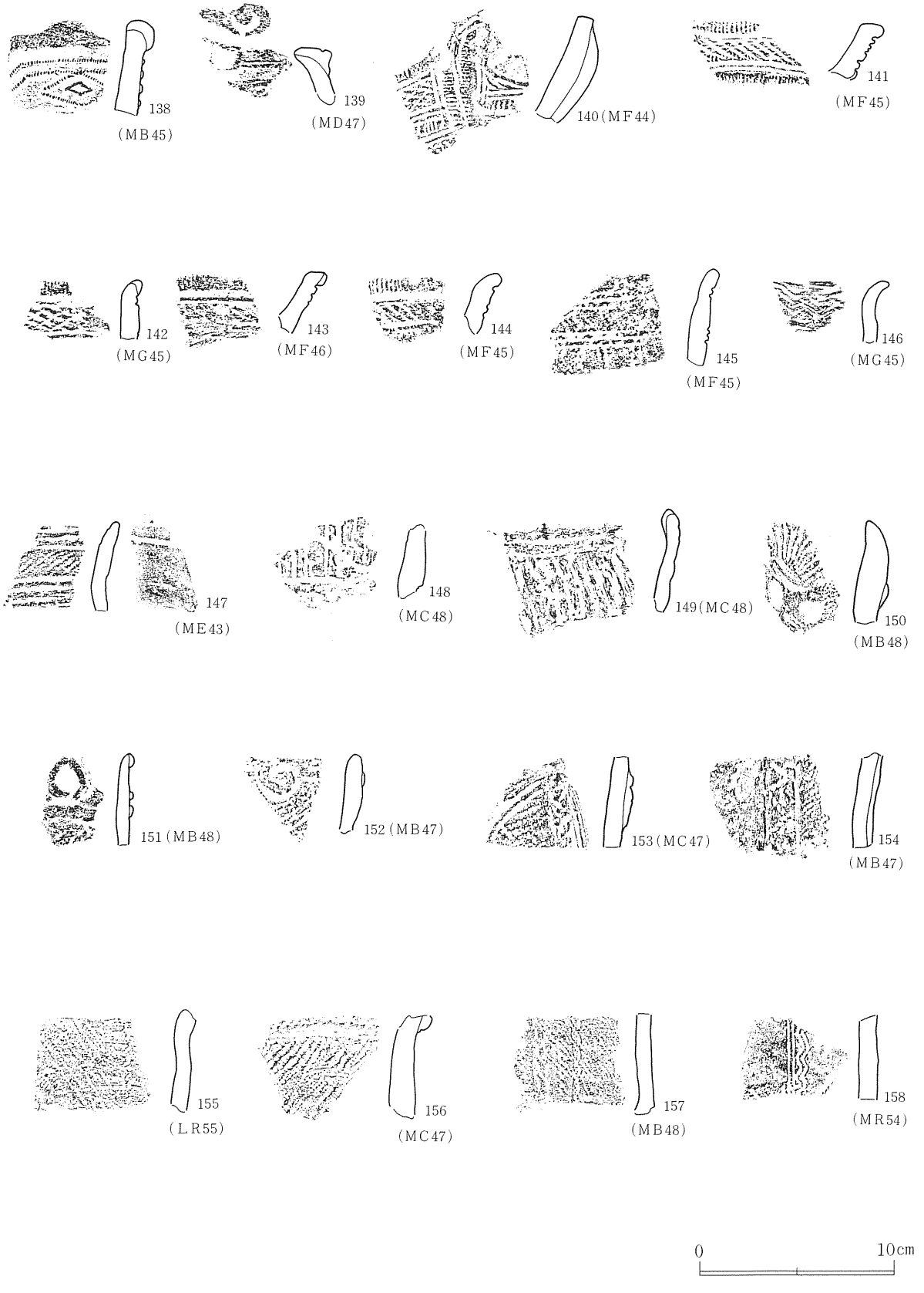
第22図　遺構外出土土器（３）



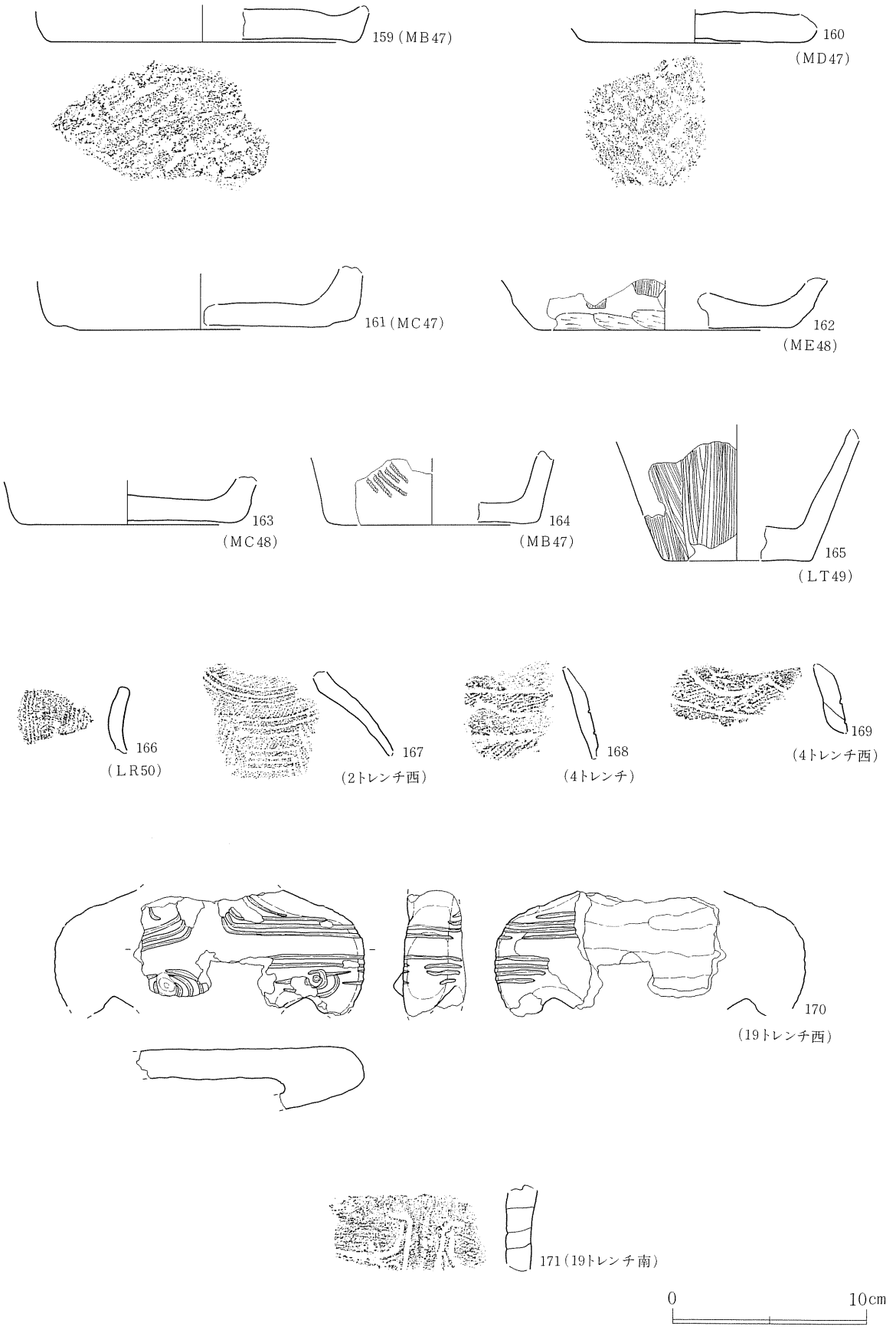
第23図　遺構外出土土器（４）



第24図　遺構外出土土器（５）



第25図　遺構外出土土器（６）



第26図　遺構外出土土器（７）

（２）石器（第27～31図）

剥片も含めた石器出土総点数は803点で、石鏃・石槍・石錐・石匙・石箆・掻器・楔形石器・凹石は全体の21％である。

石鏃（９～21･23）：無茎鏃（９～13）のうち、(10)は両面の基部付近に先行剥離面を残している。（９･11）の石質は黒曜石である。有茎鏃には鏃身部分が三角形に近い(14)、棒状の(15～21)があり、後者には鏃身部分が均整の取れた柳葉形となる(17･19)がある。石質は全て頁岩である。

石槍(22)：両面調整の施された基部に丸みのある石槍である。

石錐(25～28)：剥片素材の両面を調整し、刃部を作出した(25･26)、剥片の両面に先行剥離面を広く残し、側縁部のみに調整を行う(27･28)がある。石質は全て頁岩である。

石匙(29～36)：いずれも縦型で、素材剥片の打面側につまみ部を設けているが、(34)を除けば、つまみ部を作り出す調整以外に主要剥離面には二次調整は施されない。背面への二次調整も全面には及ばず比較的短い剥離で刃部を作り出すが、先行剥離面を広く残している。石質は全て頁岩である。

石箆(37～44)：両面に二次調整が行われ、刃部を長軸の一端に作り出す。二次調整は比較的粗く、(39･40)では主要剥離面に、(44)は背面に、(42･43)は両面に先行剥離面を残す。刃部は、長軸の一端に細かな調整で設けられる。石質は全て頁岩である。

掻器(45～52)：素材剥片の側縁や、下端に急角度の刃部を作出している。縦長剥片背面に二次調整を行って片側縁に刃部を設けた(46～49)は、両面に先行剥離面を広く残しており、特に(48･49)では顕著で、刃部以外には二次調整は行われない。(50･51)では、背面全面と主要剥離面の側縁にも二次調整が施される。石質は全て頁岩である。

楔形石器(56～58)：厚みのある剥片の両極から剥片剥取されているが、上端に強い打撃痕が認められ、楔形石器とした。石質は全て頁岩である。

両面調整石器(23･24)：両面に二次調整を加えて、両端を鋭く作り出しているのが特徴である。(23)は、石鏃の可能性もある。

使用痕のある剥片(53～55)：剥片の側縁部に、使用痕としての微細な剥離痕跡が認められる。

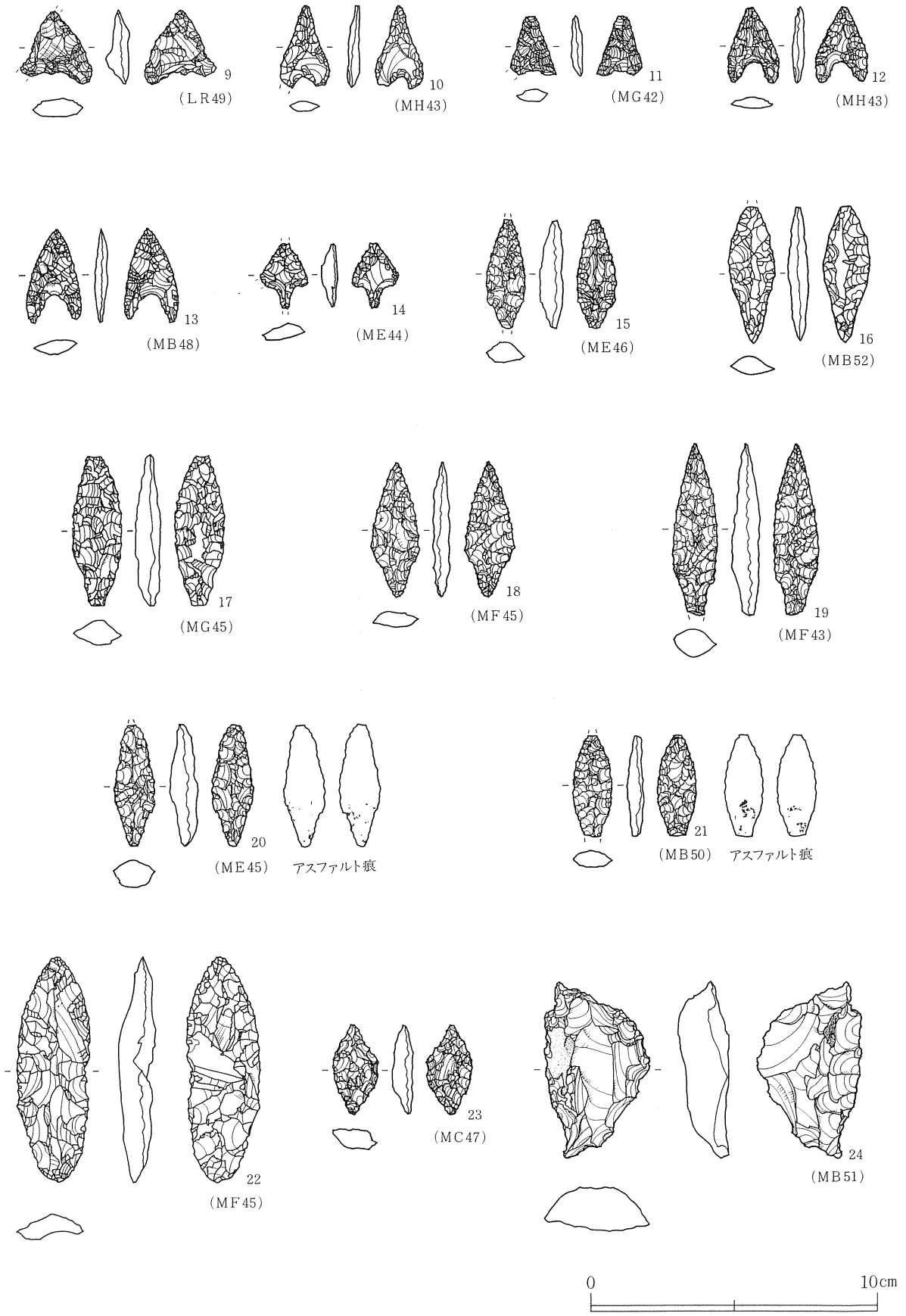
凹石(59)：厚みのある円形の凝灰岩の両面に、断面が逆円錐状の窪みがあり、線刻状の擦痕が見られる。

第３表－１　遺構外石器属性表

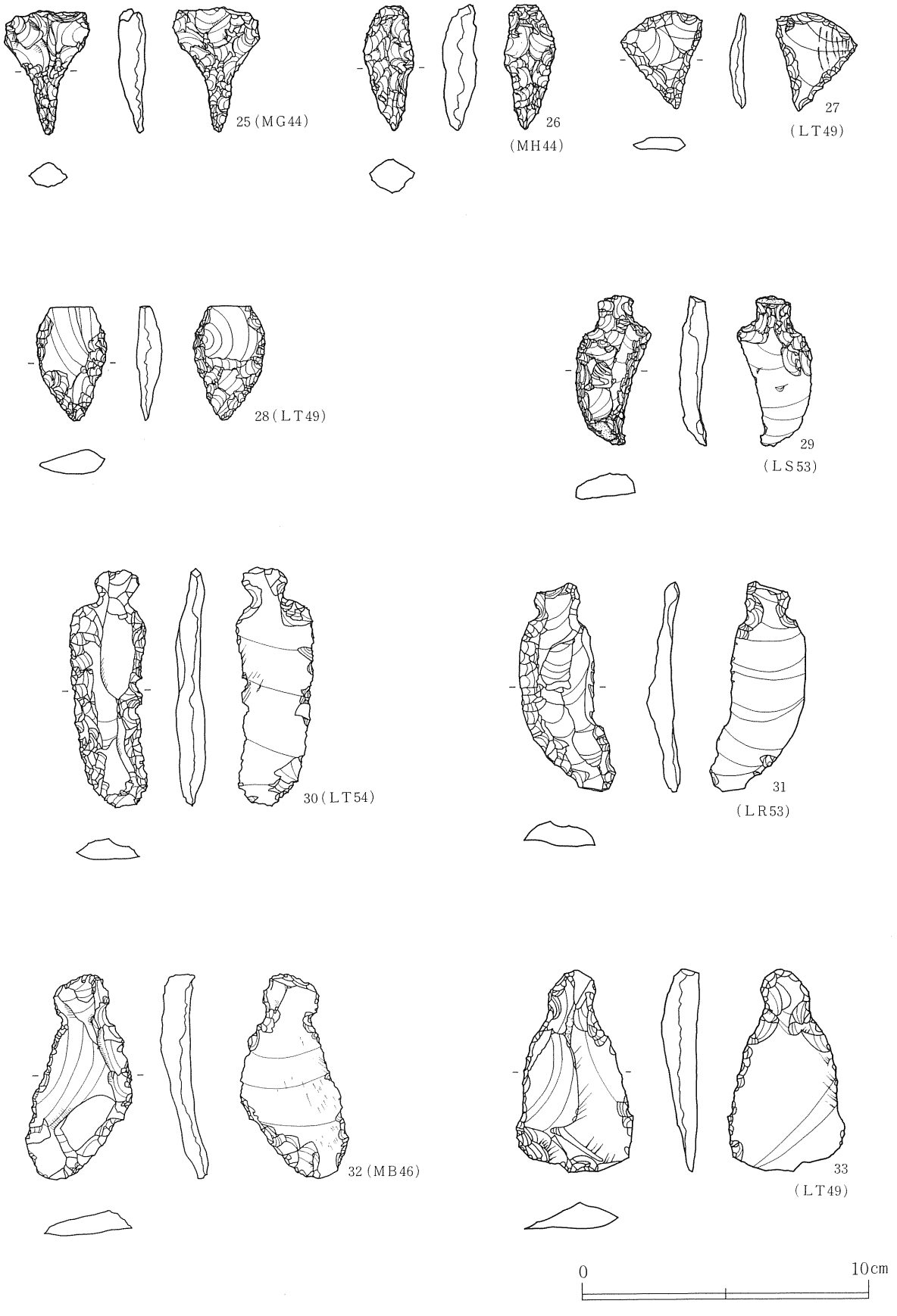
挿図番号	出土地区	層位	器種名	石　質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)
27-9	ＬＲ49	Ⅱ	石鏃	黒曜石	26	25	8	3.0
27-10	ＭＨ43	Ⅱ	石鏃	珪質頁岩	29	17	4	1.3
27-11	ＭＧ42	Ⅰ	石鏃	黒曜石	21	16	4	0.7
27-12	ＭＨ43	Ⅱ	石鏃	珪質頁岩	27	18	4	1.3
27-13	ＭＢ48	Ⅱ	石鏃	珪質頁岩	33	19	5	2.1
27-14	ＭＥ44	Ⅰ	石鏃	珪質頁岩	23	16	5	1.2
27-15	ＭＥ46	Ⅱ	石鏃	珪質頁岩	38	14	8	3.4
27-16	ＭＢ52	Ⅰ	石鏃	珪質頁岩	47	16	7	3.4
27-17	ＭＧ45	Ⅰ	石鏃	珪質頁岩	53	17	9	7.0
27-18	ＭＦ45	－	石鏃	珪質頁岩	47	17	6	3.5

第３表－２　遺構外石器属性表

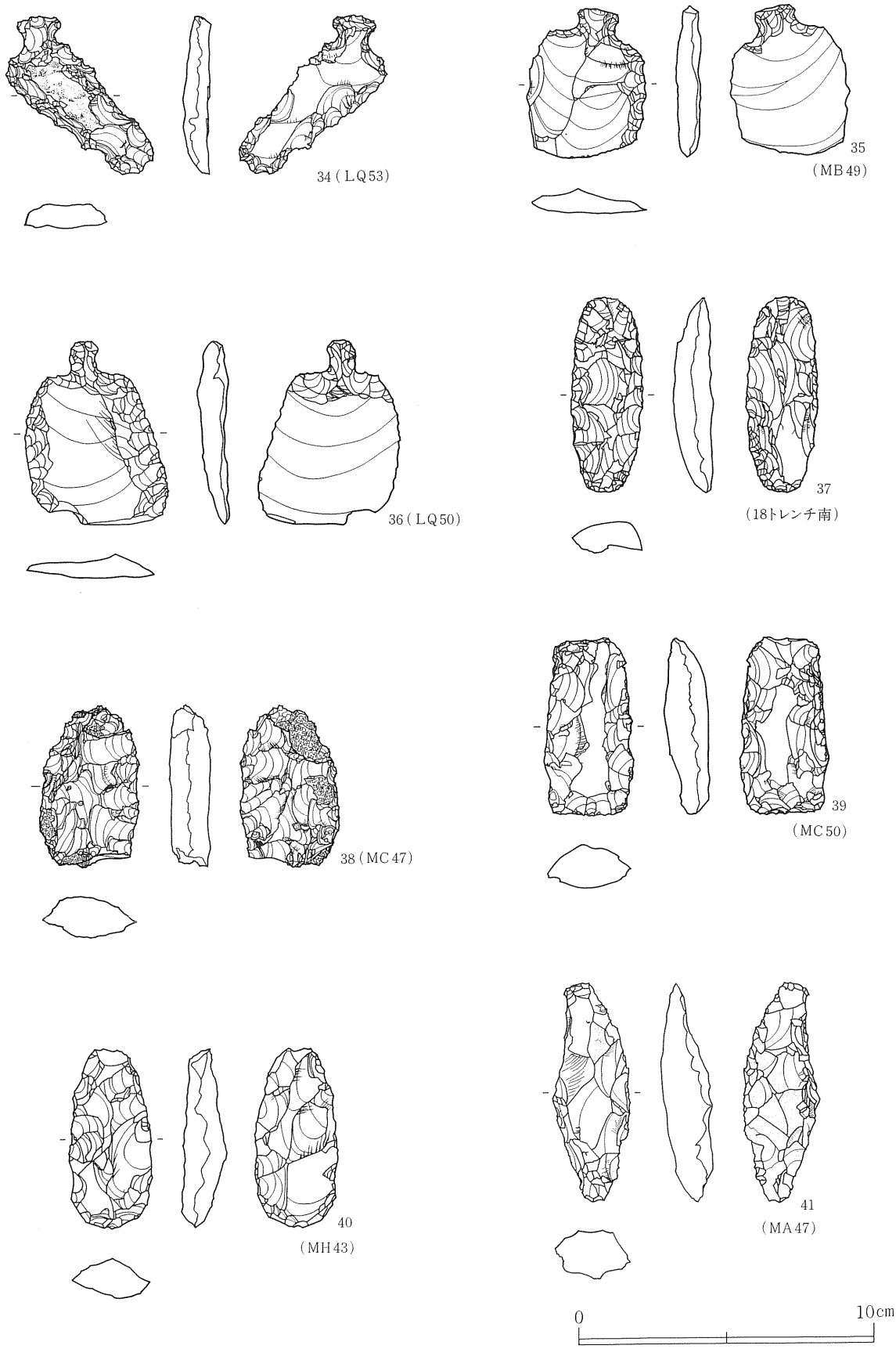
挿図番号	出土地区	層位	器種名	石　質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)
27-19	ＭＦ43	Ⅱ	石鏃	珪質頁岩	60	16	10	8.3
27-20	ＭＥ45	Ⅱ	石鏃	珪質頁岩	43	14	10	4.5
27-21	ＭＢ50	Ⅱ	石鏃	珪質頁岩	36	14	6	2.5
27-22	ＭＦ45	Ⅰ	石槍	珪質頁岩	79	24	13	20.3
27-23	ＭＣ47	表採	両面調整石器	珪質頁岩	31	16	8	3.0
27-24	ＭＢ51	Ⅱ	両面調整石器	珪質頁岩	62	37	18	34.9
28-25	ＭＧ44	Ⅱ	石錐	珪質頁岩	43	30	9	7.0
28-26	ＭＨ44	Ⅰ	石錐	珪質頁岩	44	18	12	7.6
28-27	ＬＴ49	表採	石錐	珪質頁岩	34	28	6	3.6
28-28	ＬＴ49	Ⅱ	石錐	珪質頁岩	40	25	9	7.3
28-29	ＬＳ53	Ⅰ下	石匙	珪質頁岩	53	21	10	11.0
28-30	ＬＴ54	Ⅲ上	石匙	珪質頁岩	83	22	10	21.3
28-31	ＬＲ53	Ⅱ	石匙	珪質頁岩	73	34	11	16.7
28-32	ＭＢ46	表採	石匙	珪質頁岩	73	31	17	19.0
28-33	ＬＴ49	Ⅱ	石匙	珪質頁岩	71	40	13	18.1
29-34	ＬＱ53	Ⅱ	石匙	珪質頁岩	53	50	9	14.5
29-35	ＭＢ49	Ⅱ	石匙	珪質頁岩	51	40	9	17.4
29-36	ＬＱ50	Ⅱ	石匙	珪質頁岩	62	48	10	23.5
29-37	18トレ	－	石篦	珪質頁岩	66	23	14	20.1
29-38	ＭＣ47	Ⅱ	石篦	珪質頁岩	55	34	14	27.1
29-39	ＭＣ50	Ⅱ	石篦	珪質頁岩	61	28	15	28.6
29-40	ＭＨ43	Ⅰ	石篦	珪質頁岩	61	28	15	22.4
29-41	ＭＡ47	Ⅱ	石篦	珪質頁岩	74	25	18	25.7
30-42	ＭＧ42	Ⅲ	石篦	珪質頁岩	72	28	14	31.1
30-43	ＬＴ54	Ⅰ	石篦	珪質頁岩	88	36	22	45.1
30-44	ＭＡ55	Ⅱ	石篦	珪質頁岩	68	28	11	22.7
30-45	ＭＥ45	Ⅰ	掻器	珪質頁岩	64	34	14	38.5
30-46	ＭＢ50	Ⅱ	掻器	珪質頁岩	56	26	12	9.5
30-47	ＬＱ53	Ⅱ	掻器	珪質頁岩	87	24	19	36.4
31-48	ＬＴ49	Ⅱ	掻器	珪質頁岩	59	35	13	24.0
31-49	ＭＦ46	Ⅱ	掻器	珪質頁岩	73	42	29	47.1
31-50	ＭＨ43	Ⅱ	掻器	珪質頁岩	38	32	10	8.5
31-51	ＭＦ45	Ⅰ	掻器	珪質頁岩	40	39	13	19.5
31-52	ＭＧ42	Ⅲ	掻器	珪質頁岩	60	63	18	49.7
31-53	ＬＲ53	Ⅱ	ＵＦ	珪質頁岩	42	33	7	6.5
31-54	ＭＦ44	Ⅰ	ＵＦ	珪質頁岩	42	31	9	9.1
31-55	ＭＤ47	Ⅱ	ＵＦ	珪質頁岩	38	18	5	4.2



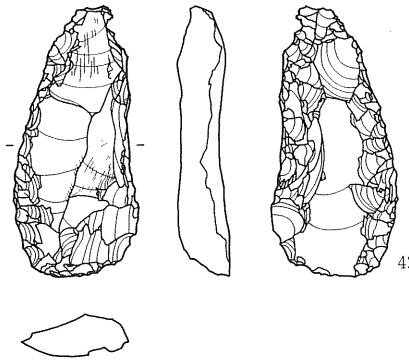
第27図　遺構外出土石器（１）

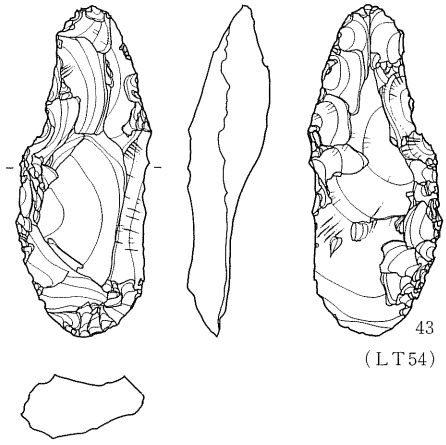


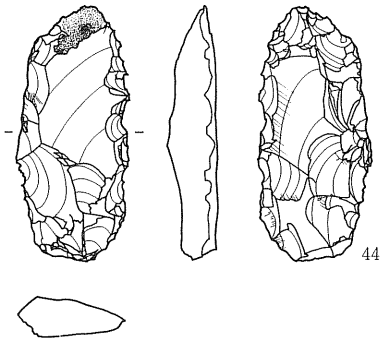
第28図　遺構外出土石器（２）

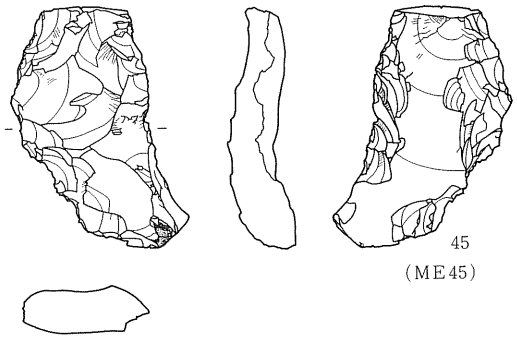


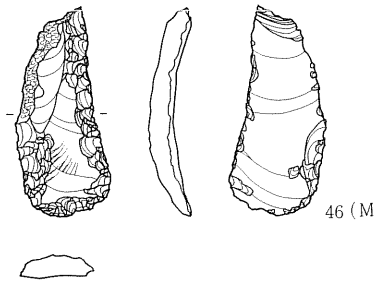
第29図　遺構外出土石器（３）

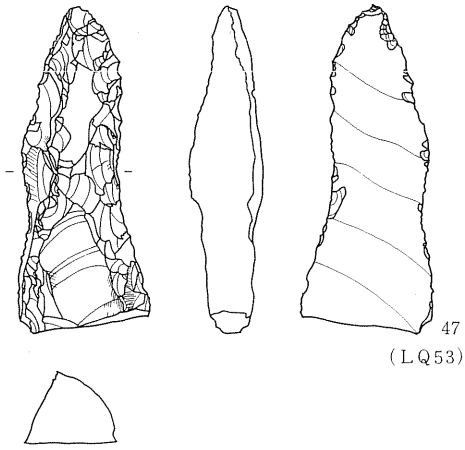


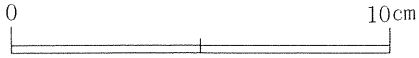






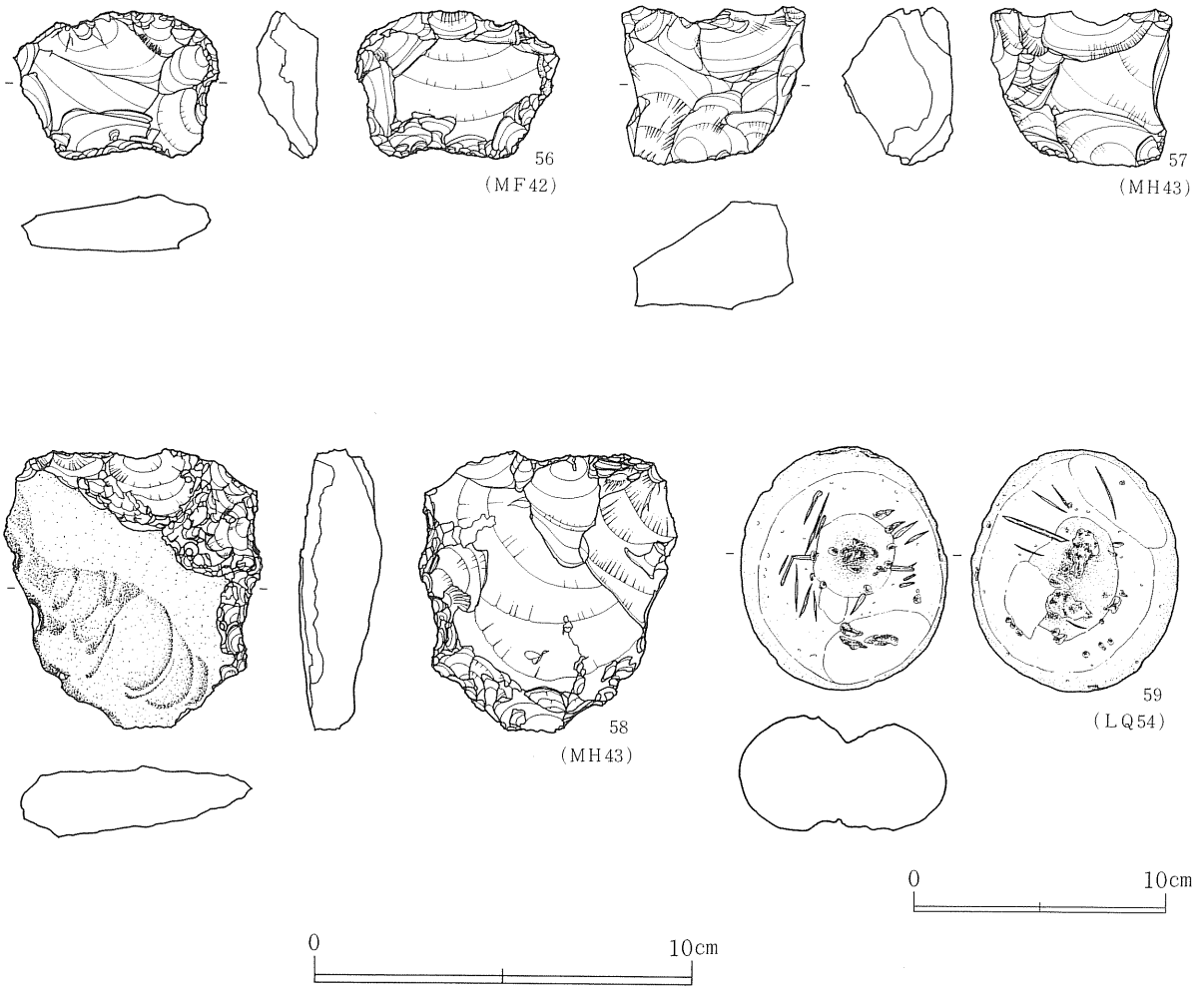






第30図　遺構外出土石器（４）

第31図　遺構外出土石器（５）



第32図　遺構外出土石器（６）

第３表－３　遺構外石器属性表

挿図番号	出土地区	層位	器種名	石　質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)
32-56	MF42	Ⅰ	楔形石器	珪質頁岩	39	54	16	32.8
32-57	MH43	Ⅰ	楔形石器	珪質頁岩	42	48	29	51.6
32-58	MH43	Ⅰ	楔形石器	珪質頁岩	75	68	22	104.2
32-59	LQ54	Ⅱ	くぼみ石	凝灰岩	96	82	46	256.2

第２節　古代

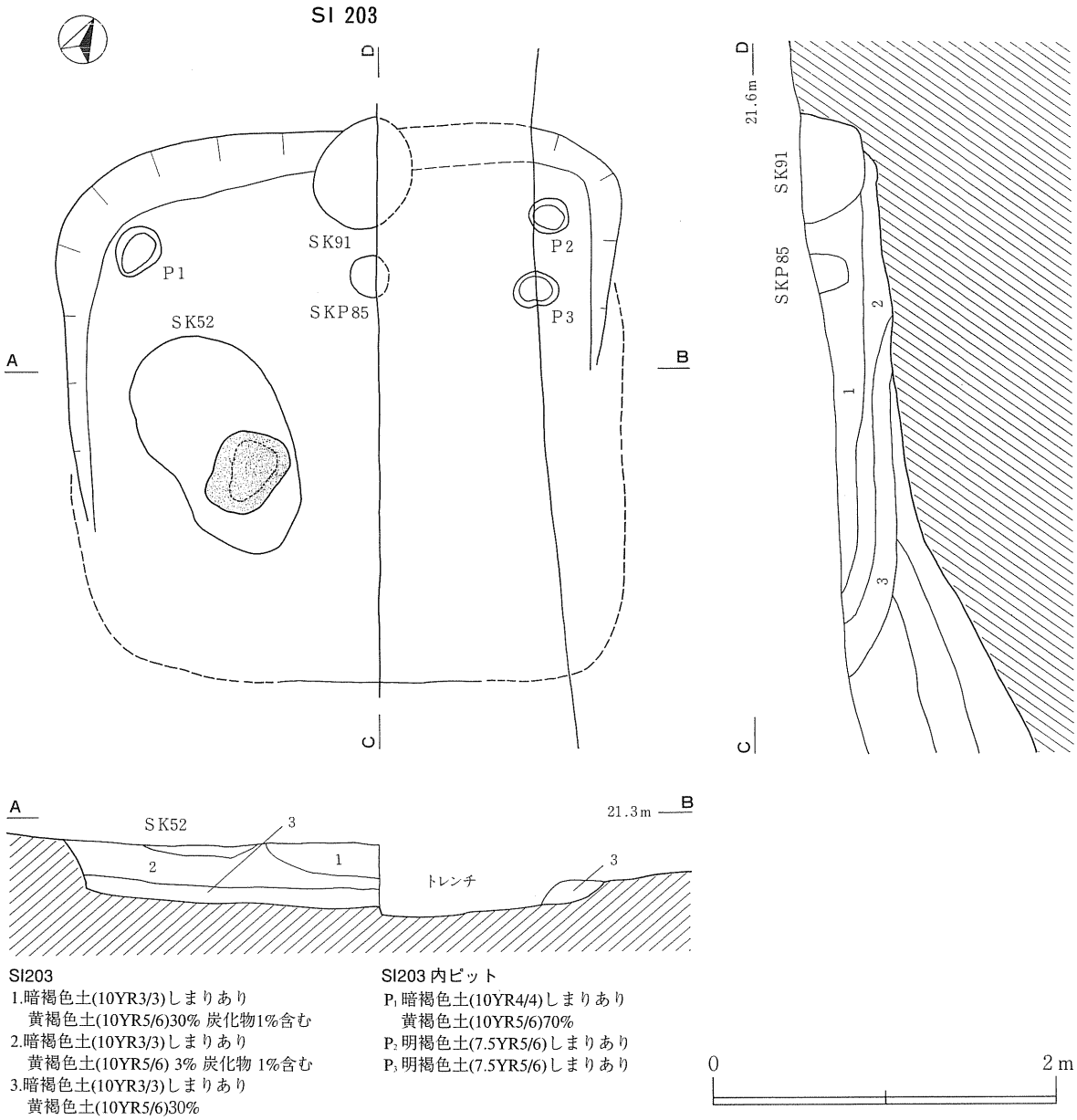
古代の遺構は竪穴住居跡１軒、土坑４基、焼土遺構４基、溝跡２条、柱穴様ピット６基である。このうち、竪穴住居跡１軒、土坑３基、溝跡２条、柱穴様ピット６基については出土遺物から、土坑１基、焼土遺構４基については、検出面、覆土状況などから古代の遺構とした。

１　検出遺構と出土遺物

（１）竪穴住居跡

ＳＩ203（第18･19･33･35図）

ＭＤ45グリッドに位置する。盛土層での遺構確認中に暗褐色の落ち込みとして確認した。斜面に盛



第33図　竪穴住居跡

土し構築したものと考えられる。南東側斜面部分および範囲確認調査時のトレンチ部分が確認できなかった。ＳＫＰ85、ＳＫ91土抗と重複しており、本遺構が古い。規模と平面形は、壁面についてはトレンチにより失われた部分は不明だが、一辺３～3.2mの隅丸方形を呈すると推定される。埋土は３層に分層され、最下層は貼床面と考えられる。最下層上面および下面にそれぞれ炭化物が認められた。

壁は現状では26～44cmの高さで、緩やかに外傾しながら立ち上がる。壁溝はない。床面はほぼ平坦で堅くしまっていた。カマドは検出できなかったが、範囲確認調査時にＳＩ203北側で支脚(10･11)を検出している。遺構の北側、西隅に柱穴が３基確認された。埋土中から土師器４点、縄文土器10点、石器４点が出土している。

（２）土坑

ＳＫ01（第34図）

ＭＪ40グリッドに位置する。Ⅲ層精査中に暗褐色土の落ち込みとして確認した。他の遺構との重複はない。規模と平面形は、長軸159cm、短軸124cmの楕円形を呈する。埋土は単層である。壁は現状では16～36cmの高さで、緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面はほぼ平坦である。埋土中から、須恵器１点、縄文土器１点が出土した。

ＳＫ52（第34図）

ＭＤ44グリッドに位置する。Ⅲ層精査中に焼土の広がりとしてＳＩ203上面で確認した。長軸135cm、短軸81cmの楕円形を呈する。ＳＩ203と重複しており、本遺構が新しい。埋土は単層で焼土が充填され、ＳＫ59と覆土状況が類似する。壁は現状では５～11cmの高さで、緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は傾斜しているが、凹凸はない。遺物は出土していない。

ＳＫ59（第34･35図）

ＭＥ44グリッドに位置する。Ⅲ層精査中に不整形の焼土の広がりとして確認した。ＳＫＰ78、79、94と重複していた。新旧関係は、ＳＫＰ78より新しく、ＳＫＰ79・94より旧い。規模と平面形は長軸204cm、短軸189cmの隅丸方形を呈する。埋土は３層に分層され、第３層が焼土の層である。壁は現状では28cmの高さで、緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は柱穴の凹凸があるが、ほぼ平坦である。遺物は埋土中から土師器16点、須恵器12点の他、土師器甕の底部２個(２・５)と、須恵器坏１個(８)が伏せて重なった状態で出土している。

ＳＫ167（第34図）

ＭＦ44グリッドに位置する。Ⅲ層精査中に黒褐色の落ち込みとして確認した。他の遺構とは重複はない。規模と平面形は長軸74cm、短軸42cmの楕円形を呈する。埋土は２層に分層できた。壁は現状では12cmの高さで、緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面はほぼ平坦である。埋土中から土師器11点が出土している。

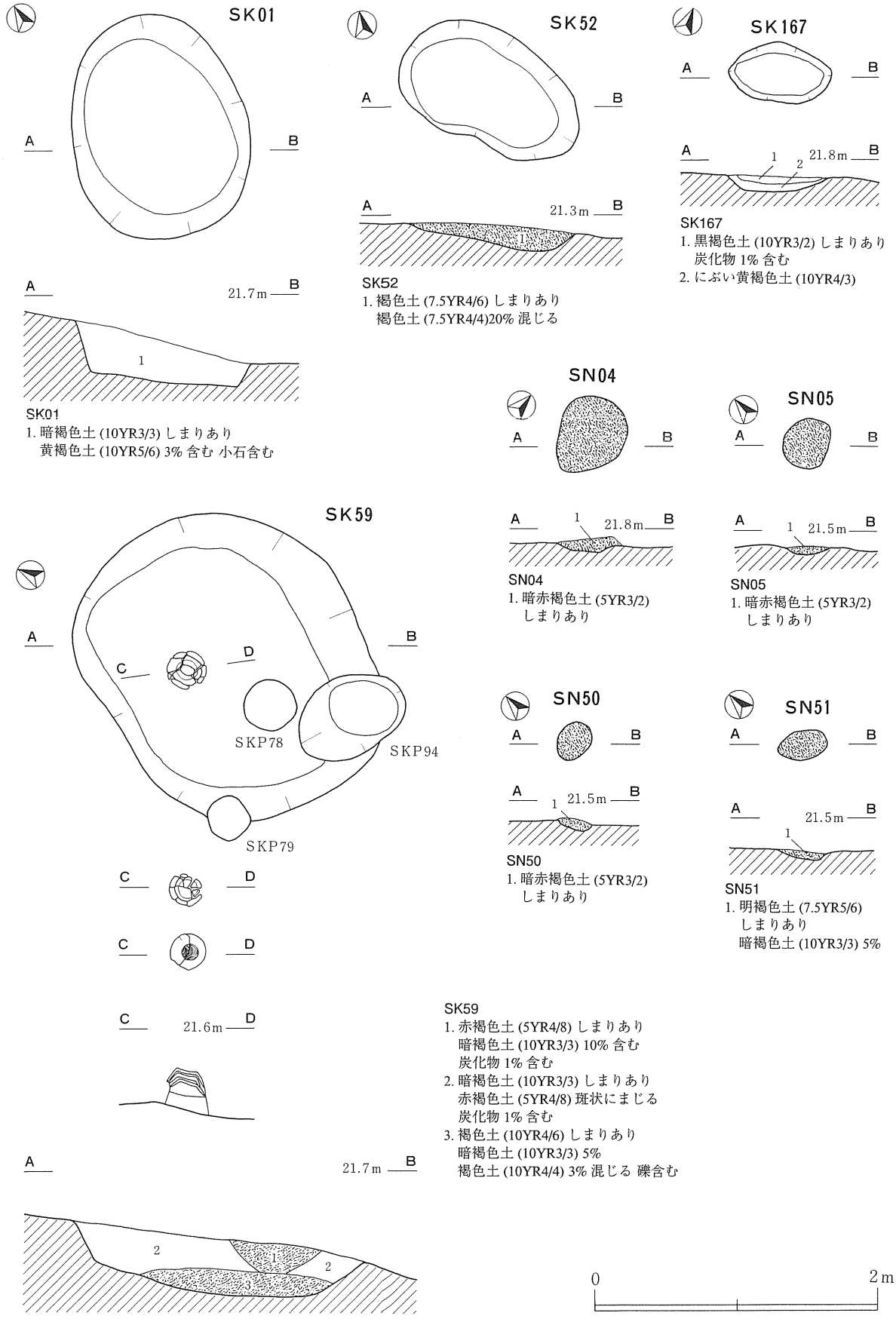
（３）焼土遺構

ＳＮ04（第34図）

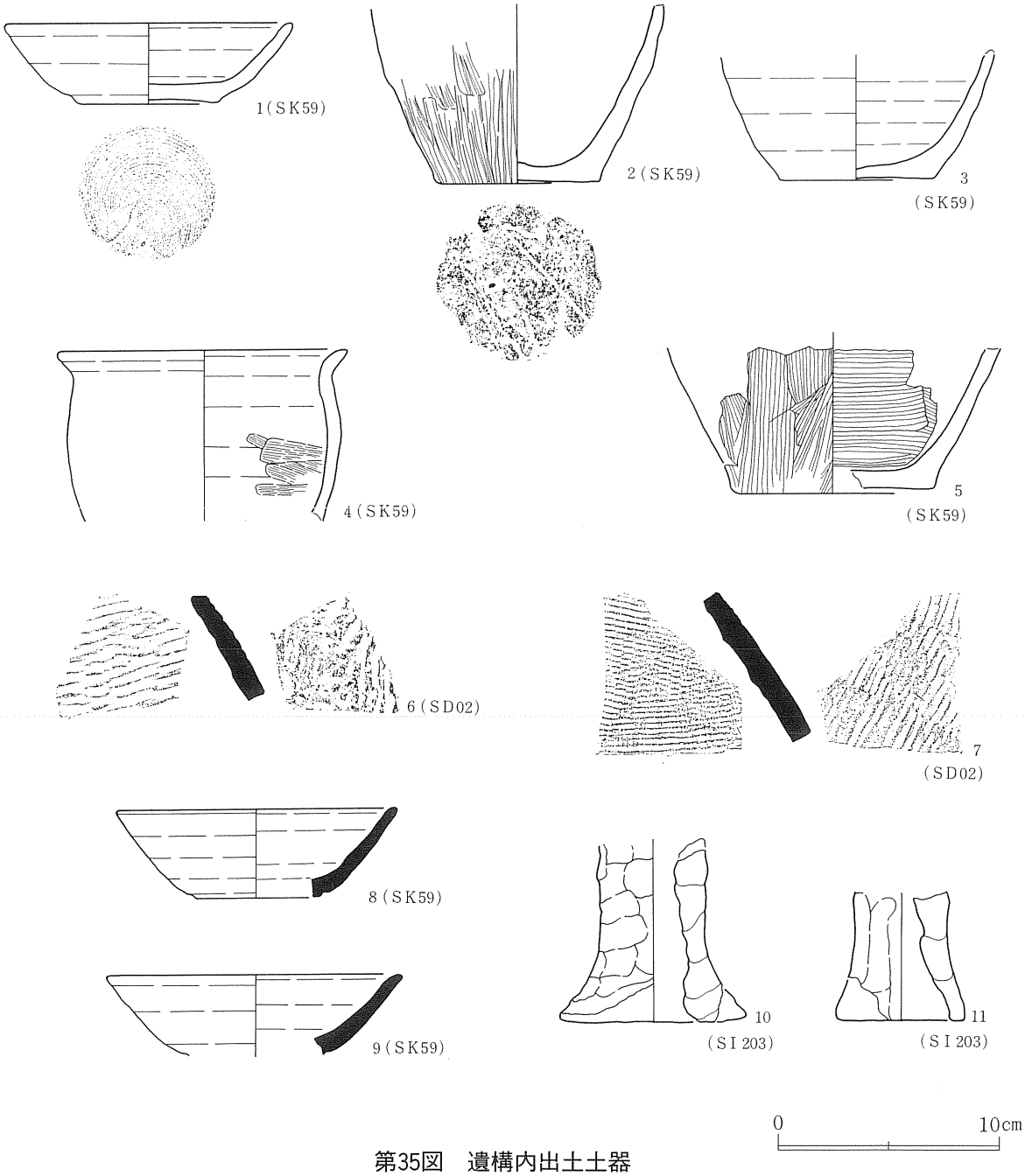
ＭＦ44グリッドに位置する。Ⅱ層精査中に焼土の広がりとして確認した。他の遺構との重複はない。焼土の広がる範囲は、長軸59cm、短軸48cmの不整円形を呈する。遺物は出土していない。

ＳＮ05（第34図）

ＭＥ44グリッドに位置する。Ⅱ層精査中に焼土の広がりとして確認した。他の遺構との重複はない。


SK01
A
B
21.7m
1
SK01
1. 暗褐色土 (10YR3/3) しまりあり
黄褐色土 (10YR5/6) 3% 含む 小石含む
SK52
1
SK52
1. 褐色土 (7.5YR4/6) しまりあり
褐色土 (7.5YR4/4)20% 混じる
SK167
1
2
21.8m
SK167
1. 黒褐色土 (10YR3/2) しまりあり
炭化物 1% 含む
2. にぶい黄褐色土 (10YR4/3)
SN04
SN05
21.8m
SN04
1. 暗赤褐色土 (5YR3/2)
しまりあり
21.5m
SN05
1. 暗赤褐色土 (5YR3/2)
しまりあり
SK59
C
D
SKP78
SKP94
SKP79
21.6m
21.7m
SN50
21.5m
SN50
1. 暗赤褐色土 (5YR3/2)
しまりあり
SN51
21.5m
SN51
1. 明褐色土 (7.5YR5/6)
しまりあり
暗褐色土 (10YR3/3) 5%
SK59
1. 赤褐色土 (5YR4/8) しまりあり
暗褐色土 (10YR3/3) 10% 含む
炭化物 1% 含む
2. 暗褐色土 (10YR3/3) しまりあり
赤褐色土 (5YR4/8) 斑状にまじる
炭化物 1% 含む
3. 褐色土 (10YR4/6) しまりあり
暗褐色土 (10YR3/3) 5%
褐色土 (10YR4/4) 3% 混じる 礫含む
0
2m

第34図　土坑・焼土遺構



第35図　遺構内出土土器

焼土の広がる範囲は、長軸37cm、短軸33cmの略円形を呈する。遺物は出土していない。

ＳＮ50（第34図）

ＭＥ44グリッドに位置する。Ⅱ層掘り下げ中に焼土の広がりとして確認した。他の遺構との重複はない。焼土の広がる範囲は、長軸28cm、短軸22cmの楕円形を呈する。遺物は出土していない。

ＳＮ51（第34図）

ＭＥ44グリッドに位置する。掘り下げ中に焼土の広がりとして盛土部７層で確認した。他の遺構との重複はない。焼土の広がる範囲は、長軸36cm、短軸21cmの楕円形を呈する。遺物は出土していない。

（４）溝跡

ＳＤ02（第35･36図）

ＭＧ43、ＭＨ42・43、ＭＩ42グリッドに位置する。黒褐色のプランとしてⅡ層で確認した。ＳＫ06と重複し、本遺構が新しい。規模は長さ9.8m、幅20～42cm、深さ４～10cmで、両端は東側に折れる。断面形はＵ字形を呈し、埋土は単層である。埋土中から縄文土器７点、土師器２点、須恵器３点、石器１点が出土している。

ＳＤ84（第37図）

ＭＥ45グリッドに位置する。黒褐色のプランとしてⅢ層で確認した。他の遺構との重複はない。規模は長さ3.9m、幅14～40cm、深さ６～10cmで、両端は東側に折れる。断面形は「Ｕ」の字形を呈し、埋土は単層である。遺物は土師器が１点出土している。

（５）柱穴様ピット

ＳＫＰ03（第37図）

ＭＩ41グリッドに位置する。暗褐色のプランとしてⅢ層で確認した。他の遺構との重複はない。規模と平面形は、長軸40cm、短軸26cmの楕円形を呈する。深さは30cmで、埋土は単層である。遺物は土師器２点が出土している。

ＳＫＰ79（第37図）

ＭＥ44グリッドに位置する。黒褐色のプランとしてⅢ層で確認した。ＳＫ59と重複し、本遺構が新しい。規模と平面形は、長軸18cm、短軸16cmの略円形を呈する。深さ16cmで、埋土は単層である。遺物は縄文土器３点、土師器４点が出土している。

ＳＫＰ80（第37図）

ＭＥ44グリッドに位置する。黒褐色のプランとしてⅢ層で確認した。他の遺構との重複はない。規模と平面形は、長軸22cm、短軸20cmの略円形を呈する。深さは12cmで、埋土は単層である。遺物は土師器３点が出土している。

ＳＫＰ94（第37図）

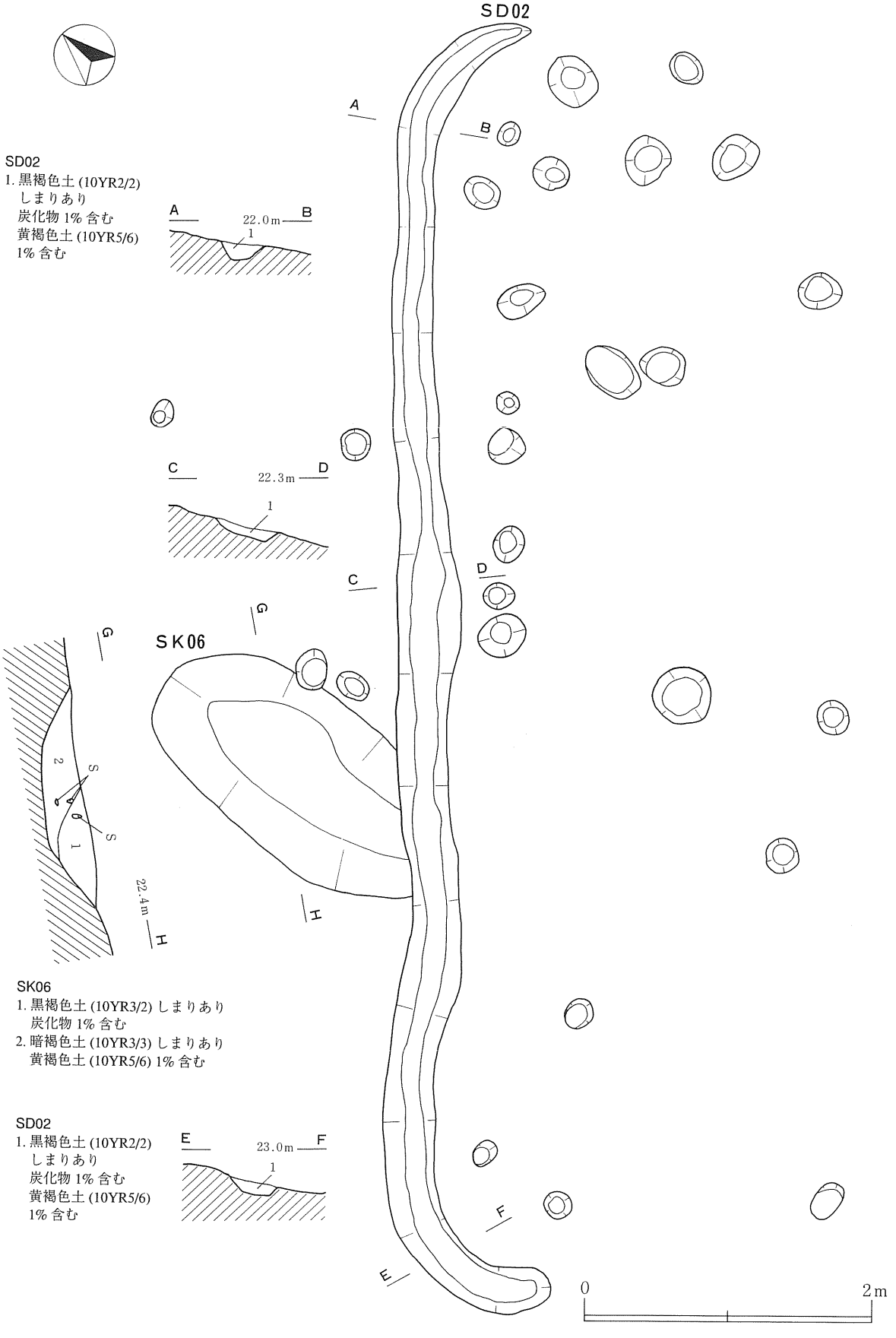
ＭＥ44グリッドに位置する。黒褐色のプランとしてⅢ層で確認した。他の遺構との重複はない。規模と平面形は、長軸40cm、短軸28cmの楕円形を呈する。深さは20cmで、埋土は単層である。遺物は土師器が１点出土した。

ＳＫＰ155（第37図）

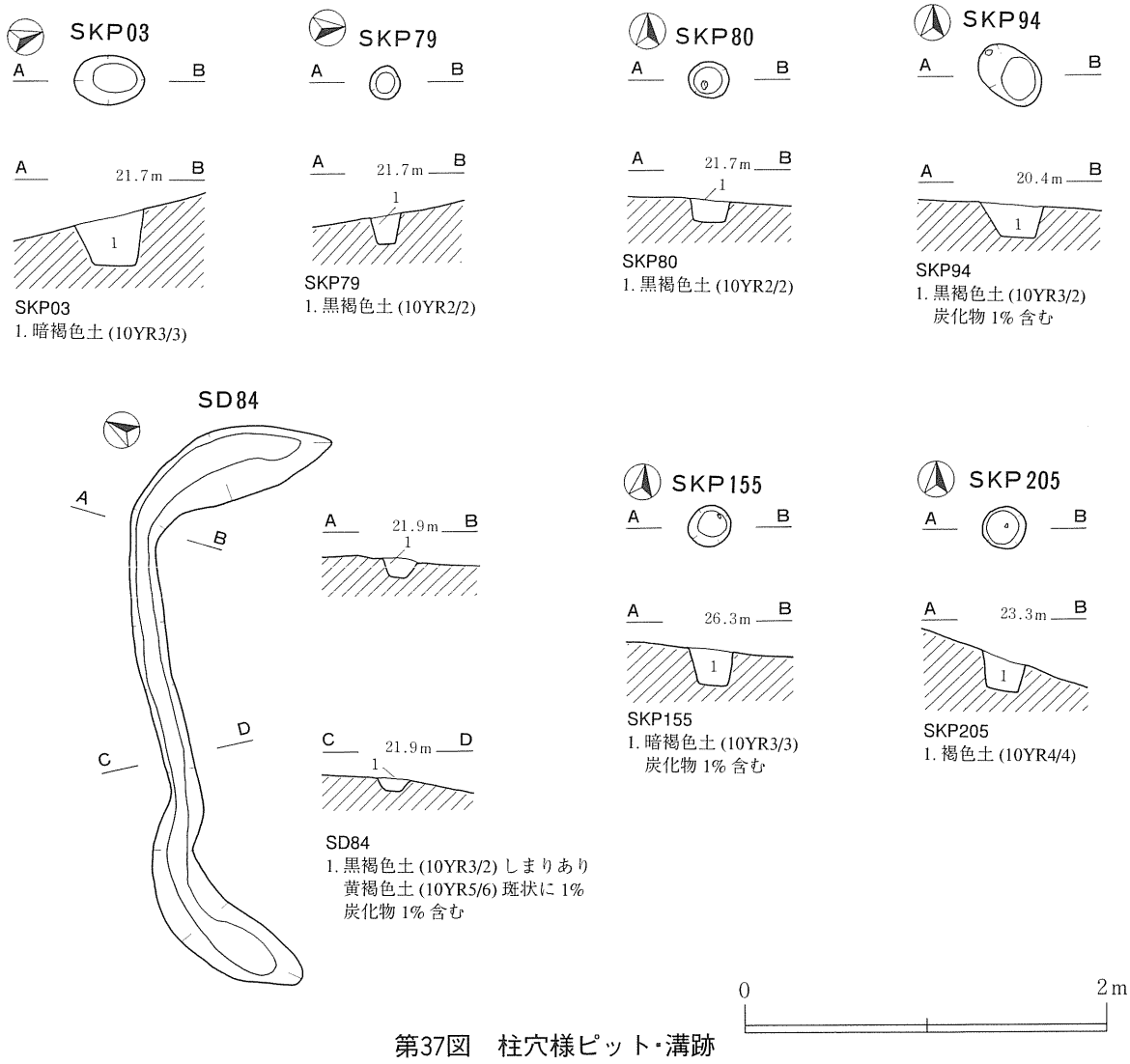
ＭＡ53グリッドに位置する。暗褐色のプランとしてⅢ層で確認した。他の遺構との重複はない。規模と平面形は、直径24cmの円形を呈する。深さ20cmで、埋土は単層である。遺物は土師器が１点出土している。

ＳＫＰ205（第37図）

ＬＳ51グリッドに位置する。褐色のプランとしてⅢ層で確認した。他の遺構との重複はない。規模と平面形は、長軸24cm、短軸23cmの略円形を呈する。深さ20cmで、埋土は単層である。遺物は土師器が１点出土している。


SD02
A
B
SD02
1. 黒褐色土 (10YR2/2)
しまりあり
炭化物 1% 含む
黄褐色土 (10YR5/6)
1% 含む
A
22.0m
B
1
C
22.3m
D
1
C
D
G
G
SK06
2
S
S
1
22.4m
H
H
SK06
1. 黒褐色土 (10YR3/2) しまりあり
炭化物 1% 含む
2. 暗褐色土 (10YR3/3) しまりあり
黄褐色土 (10YR5/6) 1% 含む
SD02
1. 黒褐色土 (10YR2/2)
しまりあり
炭化物 1% 含む
黄褐色土 (10YR5/6)
1% 含む
E
23.0m
F
1
F
E
0
2m

第36図　溝跡・土坑



第37図　柱穴様ピット・溝跡

２　遺構外出土遺物（第38～41図）

古代の遺構外出土遺物には、土師器296点、須恵器200点、鉄製品２点があり、縄文、弥生時代の遺物をも含めた全遺物総量の９％にあたる。出土地点は、ＳＩ203のあるＭＤ45グリッド付近とその斜面下方にあるＭＣ～ＭＦ43～45グリッドが中心である。

（１）土師器（12～20）

土師器には坏・甕・鍋がある。坏(12～17)は、底部から直線的に外傾して立ち上がり、切り離しは回転糸切りによる。

甕(18･19)は底部の破片で、全体の器形は不明だが、(18)の切り離しは回転糸切り、(19)は砂底で、体部下端にはヘラケズリの痕跡が明瞭である。

鍋(20)は口縁部上半が大きく外反し、体部上半からは丸みを持ちながら底部にいたると考えられる。内外面には刷目が明瞭に残る。

（２）須恵器（21～43）

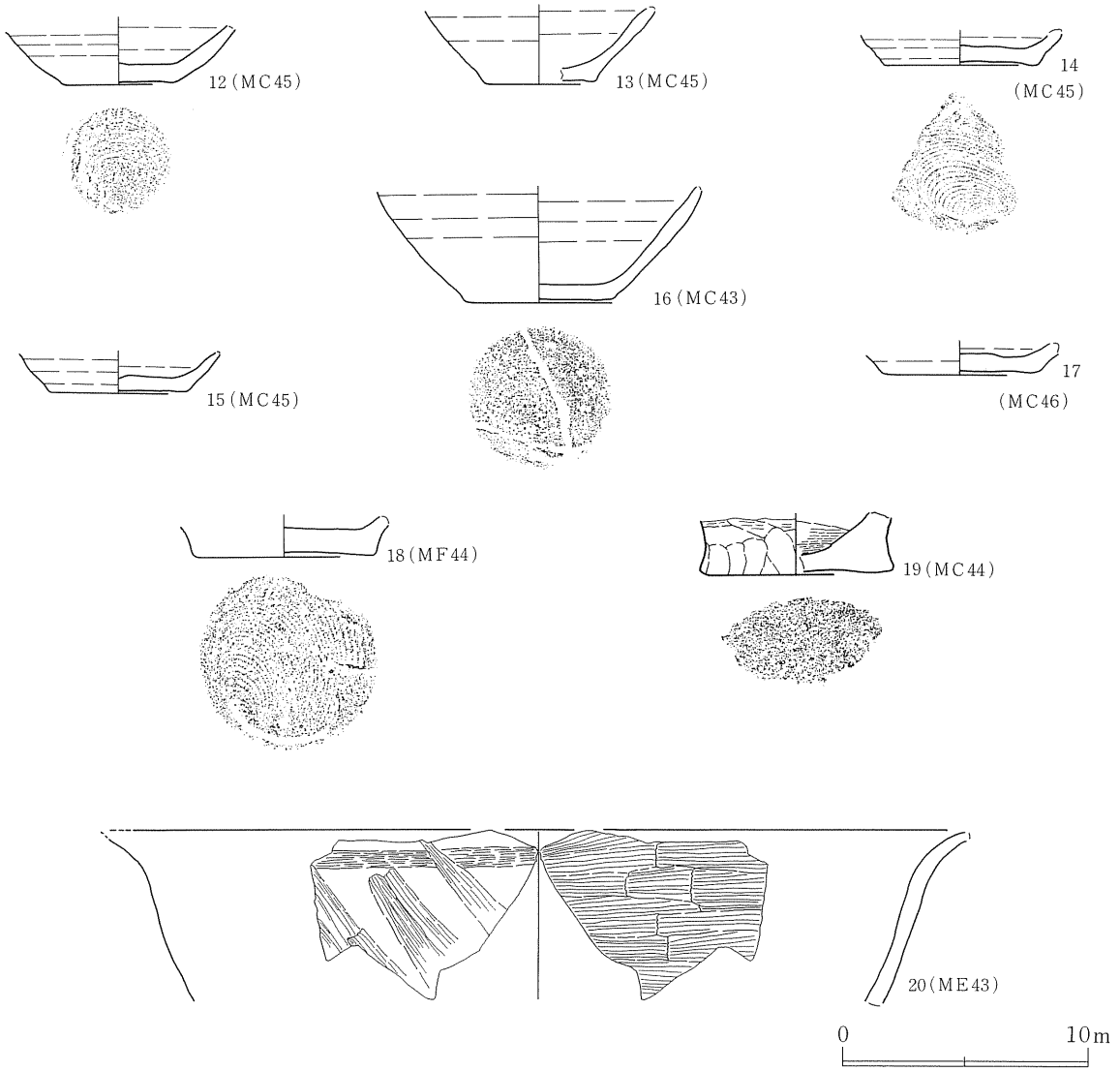
須恵器には、坏・高台付皿・高台付壺・甕・横瓶がある。坏(21～31)は、いずれも底部から直線的に立ち上がり、外反する口唇部にいたる。(22)は他に比べて、体部にわずかに膨らみがあり、口径も大きい。(25)は口唇部の外傾度からみると、皿の可能性もある。底部の切り離しは、(21･27･28･30)が回転ヘラケズリ、(31)が回転糸切りによる。

高台付皿(32～37)は、(32)の口唇部が直線的に外傾するのに対して、(33)では外傾度が強く、口唇内面が平坦になる。高台は外に開き、(34･37)の高台は、他に比べて低い。

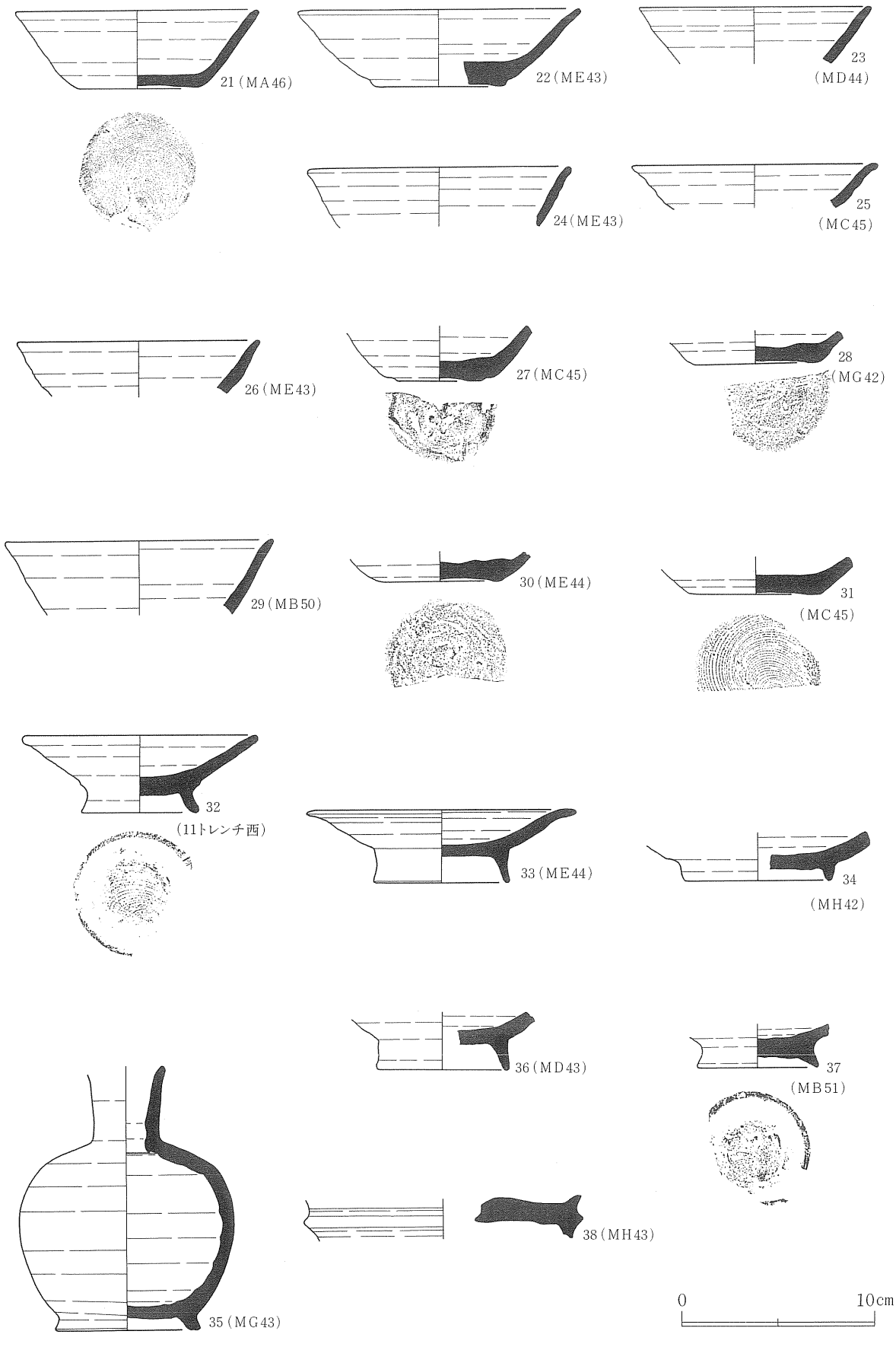
高台付壺(35･38)のうち、(35)は、外開きの低い高台から丸く膨らみのある体部、細身の頸部にいたる器形である。(38)の高台部分の内面には、墨痕が認められることから、硯として転用されたことがわかる。

甕(39～43)は、復元できるものが無く全体の器形は不明であるが、(39)の口縁部は、頸部から直線的に外傾する。

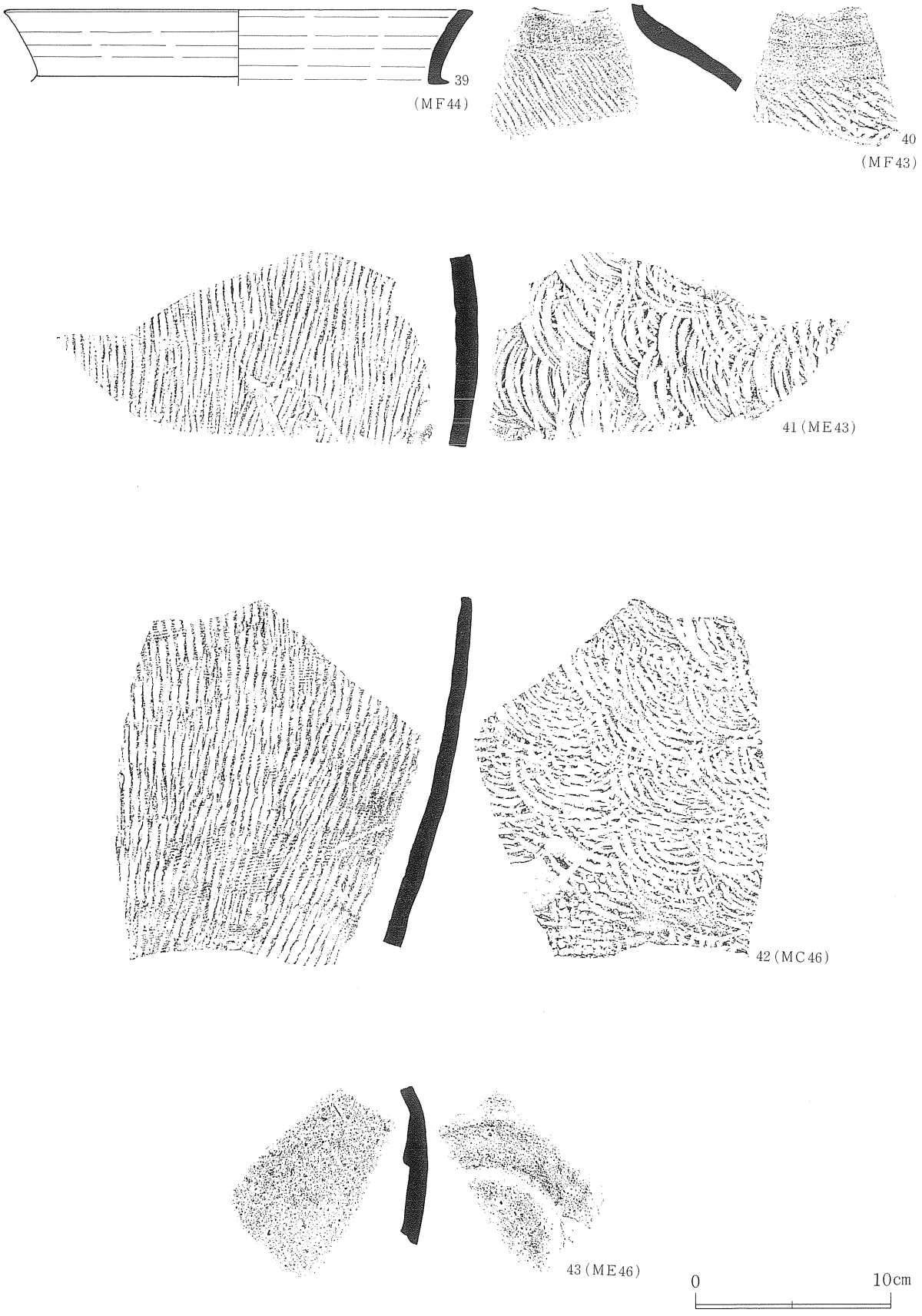
横瓶(43)は体部破片で、内面には粘土の接合痕が明瞭である。



第38図　遺構外出土土器（１）



第39図　遺構外出土土器（2）



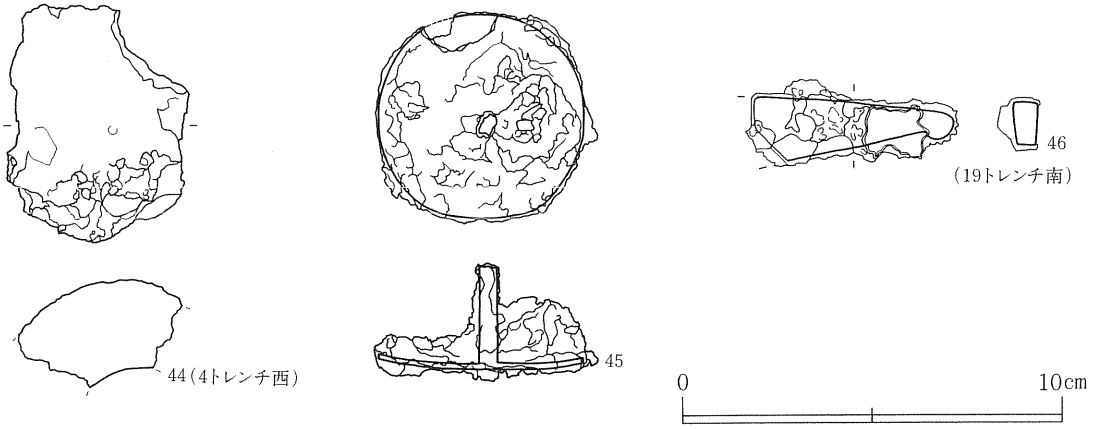
第40図　遺構外出土土器（３）

（3）鉄製品（45･46）

紡錘車(45)は直径6㎝ほどの紡錘車部分である。刀子(46)は柄に近い部分で、残存部分が4.5㎝ほどで全体の形状については不明である。

（4）フイゴ羽口（44）

羽口の破片であるが、図の下端がガラス質になり鉄分の付着も見られることから、フイゴ本体への差し込み部分と考えられる。内径は20～30㎜になると推定される。



第41図　遺構外出土鉄製品他

第４表－１　柱穴様ピット属性表

ピット番号	位置	平面形	開口部径(cm)	底面径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	出土遺物
3	ＭＩ41	楕円形	40×26	24×17	27	21.216	土師器
7	ＭＨ41	楕円形	39×21	34×17	19	20.612	－
8	ＭＨ41	円形	24	17×16	12	20.006	－
9	ＭＨ41	略円形	26×25	13×11	25	20.281	－
10	ＭＩ41	略円形	30×27	24×19	14	20.745	－
12	ＭＨ42	楕円形	29×22	25×20	11	21.136	－
13	ＭＨ41	円形	24	24×23	13	20.702	－
14	ＭＨ42	略円形	21×19	19×16	21	20.804	－
15	ＭＨ42	楕円形	22×17	12×11	41	21.458	－
16	ＭＨ42	略円形	20×19	12	12	21.638	－
17	ＭＨ42	略円形	24×20	19×14	14	21.565	－
18	ＭＨ42	略円形	25×23	15×13	16	21.276	－
19	ＭＨ42	略円形	26×22	25	13	21.193	－
20	ＭＨ42	略円形	42×41	28×24	31	21.201	－
21	ＭＧ42	円形	21	19×18	21	20.696	－
22	ＭＧ41	楕円形	33×23	33×20	23	19.761	－
23	ＭＨ43	楕円形	21×16	9	11	22.168	－
24	ＭＨ43	楕円形	25×19	17×12	10	21.919	－
25	ＭＨ43	略円形	27×22	20×18	15	21.922	－
26	ＭＨ43	略円形	23×21	16×15	9	22.857	－
27	ＭＧ43	楕円形	35×25	30×22	24	21.299	－
28	ＭＧ43	楕円形	44×30	38×22	17	21.426	－
29	ＭＧ43	楕円形	28×21	16×12	19	21.591	－
32	ＭＧ43	略円形	27×25	22×15	12	21.665	－
33	ＭＧ43	不整円形	43×36	21×18	24	21.301	－
34	ＭＧ43	略円形	37×30	20×18	32	21.105	－
35	ＭＧ43	略円形	28×27	19×18	11	21.179	－
36	ＭＧ43	略円形	43×40	30	12	21.034	－
37	ＭＧ41	楕円形	33×20	18×11	17	20.002	－
38	ＭＧ41	楕円形	42×31	34×19	15	19.919	－
39	ＭＨ44	ひし形	38×12	34×12	12	22.414	－
40	ＭＨ44	略円形	15×14	13×12	10	22.457	－
41	ＭＨ44	略円形	15×12	11×10	13	22.527	－
42	ＭＨ44	略円形	18×17	17×13	13	22.498	－
43	ＭＧ44	楕円形	29×25	21×19	20	22.813	－
44	ＭＦ45	略円形	30×27	20×13	20	23.188	－
45	ＭＦ45	略円形	33×28	27×15	11	23.071	縄文土器
46	ＭＦ45	楕円形	35×29	26×19	9	22.971	縄文土器
47	ＭＦ46	略円形	32×27	16×12	29	23.691	－
48	ＭＧ43	略円形	19×17	－	26	21.511	－
49	ＭＧ44	略円形	30×26	22×18	13	22.740	－
54	ＭＦ44	略円形	32×28	20	17	21.410	－
55	ＭＦ44	楕円形	38×29	16×14	26	21.249	－
56	ＭＦ42	楕円形	33×18	25×12	15	21.094	－
57	ＭＦ42	楕円形	40×27	15×11	29	20.859	－
58	ＭＦ44	円形	29	25×23	35	21.107	－
60	ＭＩ41	略円形	29×26	20×18	22	20.706	縄文土器
61	ＭＩ41	楕円形	30×24	24×18	14	20.869	－

第4表－2　柱穴様ピット属性表

ピット番号	位置	平面形	開口部径(cm)	底面径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	出土遺物
62	ＭＩ41	略円形	25×23	15×13	16	21.295	－
64	ＭＧ43	楕円形	39×33	17×15	21	21.433	－
65	ＭＧ45	略円形	21×15	19×14	14	23.506	－
66	ＭＦ45	楕円形	34×18	27×13	10	23.129	縄文土器
67	ＭＦ46	円形	14	9×7	20	23.846	－
68	ＭＦ46	略円形	38×32	28×26	19	23.877	－
69	ＭＦ46	略円形	21×20	15×12	17	23.446	－
70	ＭＦ46	略円形	50×42	38×28	21	23.949	－
71	ＭＧ43	楕円形	27×21	20×14	14	21.345	－
72	ＭＦ45	略円形	23×22	18×13	8	21.723	－
73	ＭＧ43	略円形	26×25	17×15	16	21.396	－
74	ＭＨ44	方形	28×22	20×13	10	22.628	縄文土器
75	ＭＨ44	略円形	30×27	29×25	8	22.523	－
76	ＭＧ44	楕円形	34×22	21×14	13	22.282	－
77	ＭＦ44	略円形	21×18	13	7	21.604	－
78	ＭＥ44	略円形	20×18	16×13	13	21.324	縄文土器
79	ＭＥ44	略円形	18×16	12×11	15	21.322	縄文土器／土師器
80	ＭＥ44	略円形	22×20	16×14	12	21.430	縄文土器
81	ＭＥ44	円形	16	12	10	21.301	－
82	ＭＥ44	円形	18	14×12	24	21.045	縄文土器
83	ＭＥ45	略円形	17×16	10×8	8	22.115	－
85	ＭＤ45	(略円形)	28×(21)	(19)×18	28	21.047	－
86	ＭＦ44	円形	16	12×11	10	21.498	－
87	ＭＦ44	円形	20	14×12	17	21.567	－
88	ＭＦ44	略円形	20×17	20×19	27	21.538	－
89	ＭＦ45	略円形	13×12	9×7	13	21.748	－
90	ＭＦ44	略円形	23×22	20×19	31	21.536	－
94	ＭＥ44	楕円形	40×28	25×20	19	21.094	土師器
95	ＭＣ45	楕円形	33×27	25×20	14	20.312	－
96	ＭＣ45	略円形	53×45	36×30	15	20.396	縄文土器
97	ＭＣ45	略円形	23×21	18×16	12	20.417	縄文土器
98	ＭＤ46	円形	14	10×8	11	21.609	－
99	ＭＤ46	略円形	24×20	18×15	9	22.553	－
100	ＭＣ46	略円形	43×42	36×29	15	21.494	－
101	ＭＥ47	楕円形	22×18	17×12	15	23.698	－
102	ＭＥ47	略円形	23×21	20×18	18	23.554	－
103	ＭＤ47	楕円形	14×10	8×7	8	23.393	－
104	ＭＤ47	略円形	18×16	14×11	13	23.697	－
107	ＭＢ46	略円形	19×16	13	19	20.633	縄文土器
108	ＭＢ47	略円形	23×21	12×11	14	20.991	縄文土器
109	ＭＢ47	略円形	35×30	28×24	13	21.147	縄文土器
110	ＭＢ47	略円形	25×24	21×20	12	21.093	－
115	ＭＣ46	楕円形	28×22	15×11	26	21.074	－
118	ＭＣ49	円形	15	8×7	12	23.424	－
119	ＭＣ49	不整円形	20×14	10×7	29	23.150	－
120	ＭＣ49	略円形	16×14	11×9	16	23.066	－
121	ＭＢ46	略円形	32×31	28×25	16	20.262	－
122	ＭＢ46	略円形	20×19	18×15	9	20.329	縄文土器
123	ＭＢ46	円形	26	19	33	19.976	－

第４表－３　柱穴様ピット属性表

ピット番号	位置	平面形	開口部径(cm)	底面径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	出土遺物
124	ＭＢ46	略円形	20×17	13×11	15	19.876	－
125	ＭＢ45	略円形	24×21	14×13	14	19.984	－
126	ＭＢ45	略円形	16×14	13×10	12	19.584	－
127	ＭＣ45	楕円形	15×12	10×７	16	20.218	－
128	ＭＣ45	略円形	27×26	21×19	13	20.175	－
129	ＭＨ43	略円形	27×23	16×13	26	21.421	－
130	ＭＨ43	略円形	34×29	17×15	23	21.522	－
131	ＭＣ52	略円形	22×19	17×14	19	26.197	－
132	ＭＢ52	略円形	26×22	21×17	31	26.068	－
133	ＭＨ43	略円形	22×21	14×13	15	21.525	－
140	ＭＢ52	円形	21	12×10	45	25.926	－
141	ＭＢ53	略円形	24×23	14	34	26.084	－
142	ＭＢ53	楕円形	22×17	16×12	20	26.116	－
143	ＭＢ53	楕円形	30×23	17×16	26	26.120	－
144	ＭＢ53	略円形	25×24	20×18	13	26.125	－
145	ＭＢ53	(略円形)	24×17	９×６	10	26.120	－
146	ＭＢ53	略円形	26×22	14×11	27	25.904	－
147	ＭＡ53	略円形	25×24	16	13	25.977	－
148	ＭＡ53	円形	22	16×15	26	25.824	－
149	ＭＡ53	円形	28	20×18	25	25.800	－
150	ＭＡ53	略円形	27×23	19×18	33	25.785	－
151	ＭＡ53	略円形	25×21	20×16	21	25.929	－
152	ＭＡ53	楕円形	24×17	17×11	16	25.982	－
153	ＭＡ53	楕円形	20×14	15×12	18	25.939	－
154	ＭＡ53	略円形	23×21	21×13	43	25.519	－
155	ＭＡ53	円形	24	16×14	20	25.945	土師器
156	ＬＴ53	円形	18	13×12	13	25.719	－
157	ＬＴ53	略円形	27×25	20×14	30	25.490	－
158	ＬＴ53	略円形	20×18	14×９	17	25.621	－
159	ＬＴ53	略円形	20×17	14×10	26	25.553	－
160	ＬＴ53	略円形	30×24	13	40	25.358	－
161	ＬＴ52	略円形	25×20	19×10	30	25.318	－
162	ＭＡ53	略円形	22×20	15×12	27	25.727	－
172	ＬＳ54	楕円形	41×29	29×23	19	24.879	－
174	ＬＳ54	楕円形	34×27	28×20	22	24.306	－
175	ＬＳ55	略円形	28×26	18×17	21	24.637	－
176	ＬＳ55	楕円形	32×24	21×17	10	23.750	－
177	ＬＳ55	楕円形	22×19	17×16	17	23.272	－
178	ＬＳ56	略円形	19×17	15×14	21	23.544	－
180	ＬＴ56	略円形	27×23	20×14	15	24.096	－
181	ＬＳ56	略円形	20×18	14×12	12	23.682	－
182	ＬＳ56	略円形	24×22	16×14	5	23.404	－
183	ＬＳ57	楕円形	24×22	20×12	16	23.614	－
184	ＬＴ57	円形	20	17×15	15	23.744	－
185	ＬＴ57	略円形	20×19	12×11	9	24.299	－
186	ＬＴ56	略円形	25×24	19×17	16	24.684	－
187	ＭＡ56	略円形	30×27	26×24	15	24.684	－
188	ＬＴ56	円形	30	25×23	14	24.511	－
189	ＭＡ56	略円形	25×23	20×19	18	24.492	－

第４表－４　柱穴様ピット属性表

ピット番号	位置	平面形	開口部径(cm)	底面径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	出土遺物
190	ＬＴ56	楕円形	26×19	19×14	17	24.368	－
191	ＬＴ56	略円形	26×23	22×19	11	24.482	－
192	ＭＡ57	略円形	24×23	18×16	13	24.243	－
193	ＭＡ57	円形	17	13	9	24.246	－
194	ＭＡ57	略円形	15×13	11×８	11	24.126	－
195	ＭＡ57	方形	15×14	９×８	9	23.978	－
199	ＬＱ52	楕円形	39×31	19×16	29	22.215	－
200	ＬＱ52	略円形	30×28	16×15	－	－	－
201	ＬＱ52	略円形	26×23	15×12	30	22.082	－
202	ＬＱ53	略円形	34×32	23	18	22.305	－
205	ＬＳ51	略円形	24×23	20×18	19	22.917	土師器
206	ＬＲ51	略円形	18×16	14×13	14	22.616	－
207	ＬＲ51	略円形	22×20	18×17	19	22.086	－
208	ＬＳ51	略円形	16×14	12	16	22.806	－
209	ＬＳ50	略円形	19×16	14×12	15	22.133	－
210	ＬＳ50	円形	30	24×20	20	21.892	－
211	ＬＳ50	楕円形	25×20	20×19	24	21.916	－
212	ＬＳ50	略円形	24×20	18×12	21	22.171	－
213	ＬＳ50	略円形	16×14	８×７	24	22.365	－
214	ＬＳ49	円形	24	14×13	31	21.850	－
215	ＬＳ49	楕円形	17×14	12×９	17	21.738	－
216	ＬＳ49	略円形	22×19	16×14	18	21.365	－
217	ＬＳ49	楕円形	22×17	15×13	13	21.196	－
218	ＬＳ49	不整円形	29×19	22×15	11	21.219	－
219	ＬＴ49	方形	20	16	14	22.223	－
220	ＬＴ49	略円形	25×22	18×14	22	22.287	－
221	ＬＴ49	円形	21	15×14	14	21.923	－
222	ＬＴ48	略円形	24×21	11	18	21.175	－
223	ＬＴ48	楕円形	18×14	12×８	8	21.414	－
224	ＬＴ49	略円形	28×27	14×13	16	21.779	－
225	ＬＴ48	略円形	19×17	10	13	21.255	－
226	ＬＴ49	略円形	24×22	12×10	25	22.635	－
227	ＬＴ49	楕円形	35×21	13×８	20	23.017	－
228	ＬＴ49	略円形	36×31	23×19	17	22.966	－
229	ＭＤ43	略円形	25×21	11	15	19.868	－
230	ＭＤ43	不整円形	39×30	20×18	29	19.812	－
231	ＭＤ43	略円形	25×24	12×９	23	19.724	－
232	ＭＥ43	不整円形	28×22	15×11	17	19.942	－
233	ＭＡ55	略円形	30×28	31×29	33	25.339	縄文土器
234	ＭＢ55	略円形	21×18	12×８	21	25.523	－
236	ＭＥ43	略円形	50×44	29×22	18	20.176	縄文土器
237	ＭＥ43	方形	42×34	30×17	11	20.140	－
238	ＭＥ43	楕円形	66×46	24×20	17	20.070	－
239	ＭＤ44	略円形	52×45	38×34	14	20.260	－
240	ＭＥ44	略円形	39×36	23×19	22	20.654	－
241	ＭＥ44	楕円形	54×30	20×18	26	20.842	－
242	ＭＥ44	楕円形	46×36	18×16	25	20.730	－
243	ＭＥ44	方形	57×43	41×32	16	20.702	縄文土器
244	ＭＦ42	略円形	22×21	17×15	11	20.630	－

第４表－５　柱穴様ピット属性表

ピット番号	位置	平面形	開口部径(cm)	底面径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	出土遺物
245	ＭＧ42	略円形	30×29	21×13	16	20.710	－
246	ＭＧ42	楕円形	47×35	32×24	10	20.902	－
247	ＭＨ41	略円形	33×30	26×20	9	20.604	－
248	ＭＨ41	楕円形	38×29	28×22	10	20.960	－
249	ＭＣ52	略円形	17×13	11	10	26.312	－
250	ＭＣ53	略円形	17×15	16×15	28	26.198	－
251	ＭＣ53	円形	16	13×11	9	26.394	－
252	ＭＣ53	略円形	18×17	11×10	19	26.230	－
253	ＭＢ53	略円形	23×20	12×10	17	26.156	－
254	ＭＢ53	不整円形	23×16	15×11	34	25.984	－
255	ＭＢ54	略円形	17×16	10× 6	20	25.708	－
256	ＭＧ41	楕円形	45×29	34×21	12	20.216	－
257	ＭＦ44	略円形	38×35	14	32	21.194	－
258	ＭＧ43	略円形	26×24	13×11	18	21.476	－
259	ＭＨ41	略円形	33×29	24×20	10	20.886	－
260	ＭＣ50	略円形	24×20	18×14	10	25.281	－
261	ＭＣ50	円形	16	16×12	16	25.144	－
262	ＭＣ49	楕円形	23×15	10	13	25.048	－
263	ＭＢ49	略円形	24×23	20×18	14	24.628	－
264	ＭＢ49	略円形	46×35	20×14	18	24.302	縄文土器
265	ＭＢ49	略円形	30×27	24×17	10	24.372	－
266	ＭＢ50	楕円形	27×19	16×15	11	24.502	縄文土器
267	ＭＢ49	略円形	34×30	23×21	24	24.272	－
268	ＭＢ49	略円形	32×29	25×22	17	23.948	縄文土器
269	ＭＢ49	略円形	39×36	30×28	10	23.514	縄文土器
270	ＭＢ49	(略円形)	38×(32)	21	14	23.145	縄文土器
271	ＭＢ49	楕円形	39×30	20×18	13	23.164	縄文土器
272	ＭＢ48	略円形	31×28	13×10	35	22.426	－
273	ＭＡ48	略円形	25×23	18×14	17	22.878	－
274	ＭＡ49	略円形	28×26	20	12	23.656	－
275	ＭＡ49	略円形	27×24	20×16	16	23.526	－
276	ＭＡ49	略円形	29×24	20×17	16	23.732	－
277	ＬＳ53	略円形	41×39	30×28	8	25.149	－
278	ＬＳ54	円形	33	22×21	17	25.186	－
279	ＭＡ48	略円形	24×23	14×11	14	22.186	－
280	ＭＡ47	不整形	28×23	21×16	12	21.898	縄文土器
281	ＭＡ57	楕円形	37×30	32×26	12	21.870	－
282	ＬＴ47	略円形	32×29	7 × 6	25	20.948	－
283	ＬＴ47	略円形	37×33	26×22	22	20.755	－
284	ＬＴ47	円形	32	22×18	23	20.630	－
285	ＬＴ47	楕円形	30×24	25×21	11	21.119	－
286	ＬＴ47	略円形	31×29	17×15	15	20.455	－
287	ＬＴ47	円形	22	14	20	21.048	－
288	ＬＳ48	略円形	14×12	10	12	21.554	－
289	ＬＲ49	楕円形	51×34	21×20	17	22.175	－

第５章　自然科学分析

第１節　後山遺跡出土炭化材の放射性炭素年代測定

株式会社　古環境研究所

１．試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.1	ＳＤ　02	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析法（ＡＭＳ法）
No.2	ＳＫ　59	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析法（ＡＭＳ法）
No.3	ＳＤ　84	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析法（ＡＭＳ法）
No.4	ＳＤ　164	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析法（ＡＭＳ法）
No.5	ＳＤ　165	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析法（ＡＭＳ法）
No.6	ＳＫ　170	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析法（ＡＭＳ法）
No.7	ＳＩ　196	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析法（ＡＭＳ法）
No.8	ＳＫ　198	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析法（ＡＭＳ法）
No.9	ＳＩ　203	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析法（ＡＭＳ法）
No.10	ＳＩ　203	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析法（ＡＭＳ法）

２．測定結果

試料名	^{14}Ｃ年代（年ＢＰ）	δ^{13}Ｃ（‰）	補正^{14}Ｃ年代（年ＢＰ）	暦年代（西暦）	測定No.（Beta-）
No.1	970±40	−26.1	950±40	交点：Cal AD 1040 1σ：Cal AD 1020 ～ 1160 2σ：Cal AD 1010 ～ 1180	147463
No.2	1240±40	−26.2	1220±40	交点：Cal AD 790 1σ：Cal AD 770 ～ 880 2σ：Cal AD 690 ～ 900	147464

No.3	890±40	−26.1	870±40	交点：Cal AD 1180 1σ：Cal AD 1160 ～ 1220 2σ：Cal AD 1040 ～ 1260	147465
No.4	1310±40	−26.5	1290±40	交点：Cal AD 700 1σ：Cal AD 680 ～ 770 2σ：Cal AD 660 ～ 790	147466
No.5	1060±40	−25.2	1060±40	交点：Cal AD 990 1σ：Cal AD 970 ～ 1010 2σ：Cal AD 900 ～ 1030	147467
No.6	4450±50	−26.5	4430±50	交点：Cal BC 3080, BC 3060, Cal BC 3040 1σ：Cal BC 3270 ～ 3240, Cal BC 3110 ～ 3000, Cal BC 2980 ～ 2940 2σ：Cal BC 3340 ～ 2910	147468
No.7	4580±50	−27.8	4530±50	交点：Cal BC 3340 1σ：Cal BC 3360 ～ 3270, Cal BC 3240 ～ 3110 2σ：Cal BC 3370 ～ 3080, Cal BC 3060 ～ 3040	147469
No.8	940±40	−25.8	930±40	交点：Cal AD 1050, AD 1100, Cal AD 1140 1σ：Cal AD 1030 ～ 1170 2σ：Cal AD 1020 ～ 1200	147470
No.9	1230±40	−23.4	1260±40	交点：Cal AD 770 1σ：Cal AD 690 ～ 790 2σ：Cal AD 670 ～ 880	147471
No.10	1250±40	−25.1	1250±40	交点：Cal AD 770 1σ：Cal AD 700 ～ 790 2σ：Cal AD 680 ～ 880	147472

（１）^{14}C年代測定値

試料の^{14}C/^{12}C比から、単純に現在（1950年ＡＤ）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は5,568年を用いた。

（２）δ^{13}C測定値

試料の測定^{14}C/^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）。この値は、標準物質（ＰＤＢ）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

（３）補正^{14}Ｃ年代値

δ^{13}Ｃ測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}Ｃ/^{12}Ｃの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

（４）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}Ｃ濃度の変動に対する補正により、暦年代（西暦）を算出した。具体的には年代既知の樹木年輪の^{14}Ｃの詳細な測定、サンゴのU-Th年代と^{14}Ｃ年代の比較により補正曲線を作成して暦年代を算出する。最新のデータベース("INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver M., et. al., 1998, Radiocarbon 40(3)) により、約19,000年ＢＰまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年ＢＰ以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、補正^{14}Ｃ年代値と暦年代補正曲線との交点の暦年代値を意味する。１σ（68%確率）・２σ（95%確率）は、補正^{14}Ｃ年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の１σ・２σ値が表記される場合もある。

（５）測定№

測定は、Beta Analytic Inc.(Florida, U.S.A) において行われた。Beta-は同社の測定№を意味する。

第２節　後山遺跡における樹種同定

株式会社　古環境研究所

１．はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、その構造は年輪が形成され針葉樹材や広葉樹材で特徴ある組織をもつ。そのため、解剖学的に概ね属レベルの同定が可能となる。木材は大型の植物遺体であるため移動性が少なく、堆積環境によっては現地性の森林植生の推定が可能になる。考古学では木材の利用状況や流通を探る手がかりになる。

２．試料

試料は、後山遺跡より出土した炭化材11点である。

３．方法

試料を割折して新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、落射顕微鏡によって75～750倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

４．結果

結果は第５表に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

ハンノキ属ハンノキ節　*Alnus* sect. *Gymnothyrsus*　カバノキ科

図版１

横断面：小型で丸い道管が、放射方向に連なる傾向をみせて散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20～30本ぐらいである。放射組織は同性で、すべて平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は、同性放射組織型で単列のものと大型の集合状のものからなる。以上の形質よりハンノキ属ハンノキ節に同定される。ハンノキ属ハンノキ節は落葉の低木から高木である。材は

器具、旋作、薪炭などに用いられる。

アサダ　*Ostrya japonica* Sarg.　カバノキ科

図版２

横断面：小型で丸い道管が、単独あるいは２～５個放射方向に複合してややまばらに散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁には微細ならせん肥厚が存在する。放射組織は、ほとんどが平伏細胞であるが上下の縁辺部は方形細胞である。

接線断面：放射組織は、上下の縁辺部が方形細胞からなる異性放射組織型で、１～３細胞幅である。

以上の形質よりアサダに同定される。アサダは、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は耐朽性および保存性は中庸で、建築、家具、器具、土木、船舶、車両などに用いられる。

クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　ブナ科

図版３・４・５

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径２mに達する。耐朽性強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ木など広く用いられる。

ブナ科　Fagaceae

横断面：部分的ではあるが大型の道管と、火炎状に配列する小道管が見られた。

放射断面：放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりブナ科の、クリ、シイ属、コナラ属コナラ節のいずれかである。なお本試料は小片であり、広範囲の観察は困難であったため、ブナ科の同定にとどまる。

トネリコ属　*Fraxinus*　モクセイ科

図版６

横断面：年輪のはじめに、大型で丸い道管が、ほぼ単独で１～３列配列する環孔材である。孔圏部外では、小型でまるい厚壁の道管が、単独あるいは放射方向に２～３個複合して散在する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は同性である。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、１～３細胞幅である。

以上の形質よりトネリコ属に同定される。トネリコ属にはヤチダモ、トネリコ、アオダモなどがあり、 北海道、本州、四国、九州に分布する落葉または常緑の高木である。材は建築、家具、運道具、器具、旋作、薪炭など広く用いられる。

不明　unknown

木材の形質を呈していない。

５．所見

同定の結果、後山遺跡出土の炭化材は、ハンノキ属ハンノキ節２、アサダ１、クリ５、ブナ科１、トネリコ属１、不明１であった。クリは、温帯に広く分布し、乾燥した台地上などに生育し、二次林要素でもある。クリ材は、重硬で耐朽保存性がよい。いずれも建築材に適し、よく用いられる。縄文時代においては、北日本で多用される。ハンノキ属ハンノキ節は、水湿のある低地に生育する落葉高木である。アサダは、温帯の山地にはえる落葉高木である。トネリコ属は、温帯に広く分布し、沢沿いなどの適潤地に生育する落葉高木である。いずれも、本遺跡の周辺地域にも分布し、容易に採取できる樹木であったと推定される。

《参考文献》

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.

島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p.296

第５表　後山遺跡における樹種同定結果

試料番号	試料内容	備考	結果（和名／学名）	
No.1	SD02内	Ⅰ層	アサダ	Ostrya japonika Sarg
No.2	SK59内	Ⅰ層	クリ	Castanea crenata Sieb.etZucc
No.3	SD84内	Ⅰ層	ハンノキ属ハンノキ節	Alnus sect. Gymnothyrsus
No.4	SD164内	Ⅰ層	クリ	Castanea crenata Sieb.etZucc
No.5	SD165内	Ⅰ層	クリ	Castanea crenata Sieb.etZucc
No.6	SK170内	Ⅰ層	ハンノキ属ハンノキ節	Alnus sect.Gymnothyrsus
No.7	SI196内	地床炉Ⅲ層	不明	unknown
No.8-a	SK198内	Ⅰ層	トネリコ属	Fraxinus
No.8-b	SK198内	Ⅰ層	クリ	Castanea crenata Sieb.etZucc
No.9	SI203内	Ⅱ層下位	ブナ科	Fagaceae
No.10	SI203内	Ⅲ層下位	クリ	Castanea crenata Sieb.etZucc

第6章　まとめ

今回の調査により検出した遺構は、竪穴住居跡２軒、土坑21基、土器埋設遺構５基、焼土遺構10基、溝跡５条、柱穴様ピット242基である。これらを遺構検出面・覆土・出土遺物・形態等から判断すると縄文・弥生時代と古代の２時期に大きく分けて考えることができる。

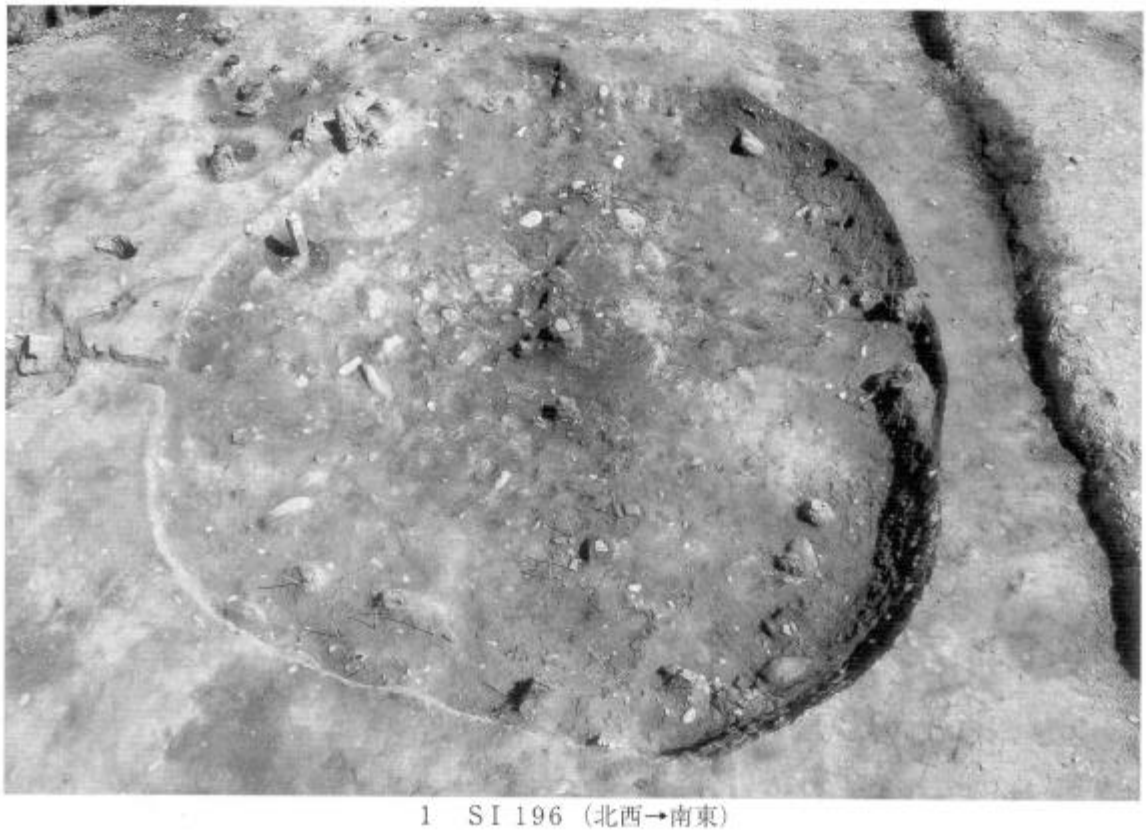
縄文・弥生時代の遺構は竪穴住居跡１軒、土器埋設遺構５基、土坑17基、焼土遺構６基、溝跡３条および柱穴様ピットが検出されている。このうち竪穴住居跡ＳＩ196を始めとして多くの遺構が調査区北西部の平坦面で検出されている。竪穴住居跡は壁溝を伴わず、６基の柱穴と中央に地床炉をもつ中期のものと考えられる。遺構内出土遺物も縄文時代中期前葉のものが多い。調査区西側の国道７号を隔てた丘陵地では縄文時代後期の土器を出土するとされる元木山Ⅱ遺跡が位置することから、後山遺跡に形成された縄文時代の集落が次第に八郎湖方向へ移動した可能性が考えられる。

古代の遺構は竪穴住居跡１軒、土坑４基、焼土遺構４基、溝跡２条および柱穴様ピットが検出されている。調査区南側に検出した土坑ＳＫ59では土師器甕底部２個体と須恵器坏１個体が伏せて重なった状態で出土している。覆土には焼土が充填していた。土師器甕底部２個体とも須恵器坏の口径に合致させるような人為的な口縁・体部の加工は認められない。遺構内において坏２個体が重なって出土した遺跡として仙北郡南外村小出Ⅰ遺跡の土器埋設遺構が挙げられ、これと同様に土坑墓として考えられよう。調査区南側斜面において盛土・整地された区域で検出された竪穴住居跡ＳＩ203は、覆土の最下層である第３層が地山が多く混入することから貼床面と考えられるが、その構造が、本調査区から約250m南に位置する元木山根Ⅱ遺跡で検出された竪穴住居跡ＳＩ04と同構造であり、本遺跡との関連性が考えられる。

遺物では、縄文時代前期後半の円筒下層ａ式から中期前半の円筒上層ａ・ｂ式までと、弥生時代、平安時代の遺物が出土している。住居跡は、縄文時代と平安時代が各々１軒検出したにすぎないが、遺物からは、上記の時期に遺跡が営まれたことがうかがえる。本遺跡を含む周辺遺跡の調査でも、住居跡が１軒だけしか検出されなかった遺跡が多く、縄文時代から平安時代にかけて共通する。今後、この観点からも、後山遺跡を含む当該地域の縄文から平安時代の様相を考えていく必要があるものと思われる。

1　調査前（北→南）

2　調査風景（南→北）



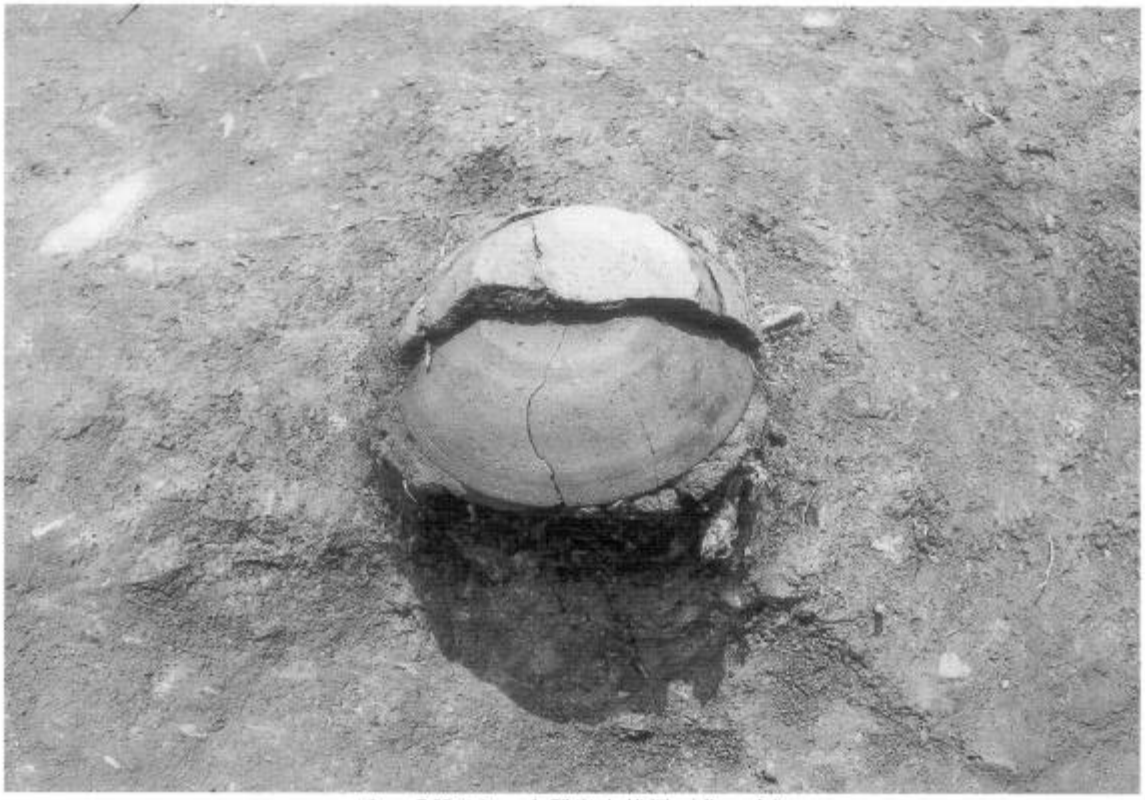
1　SI 196（北西→南東）

2　SR 169（東→西）

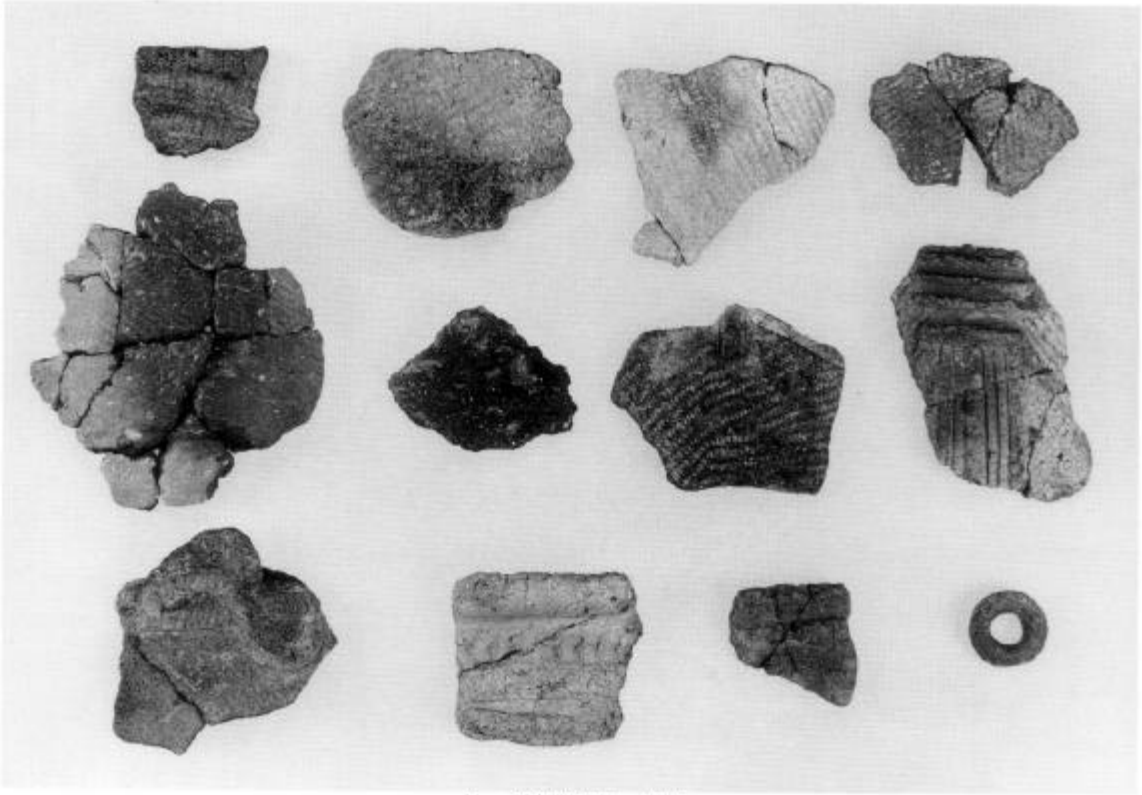
1　SK 170（南西→北東）

2　SI 203（北東→南西）

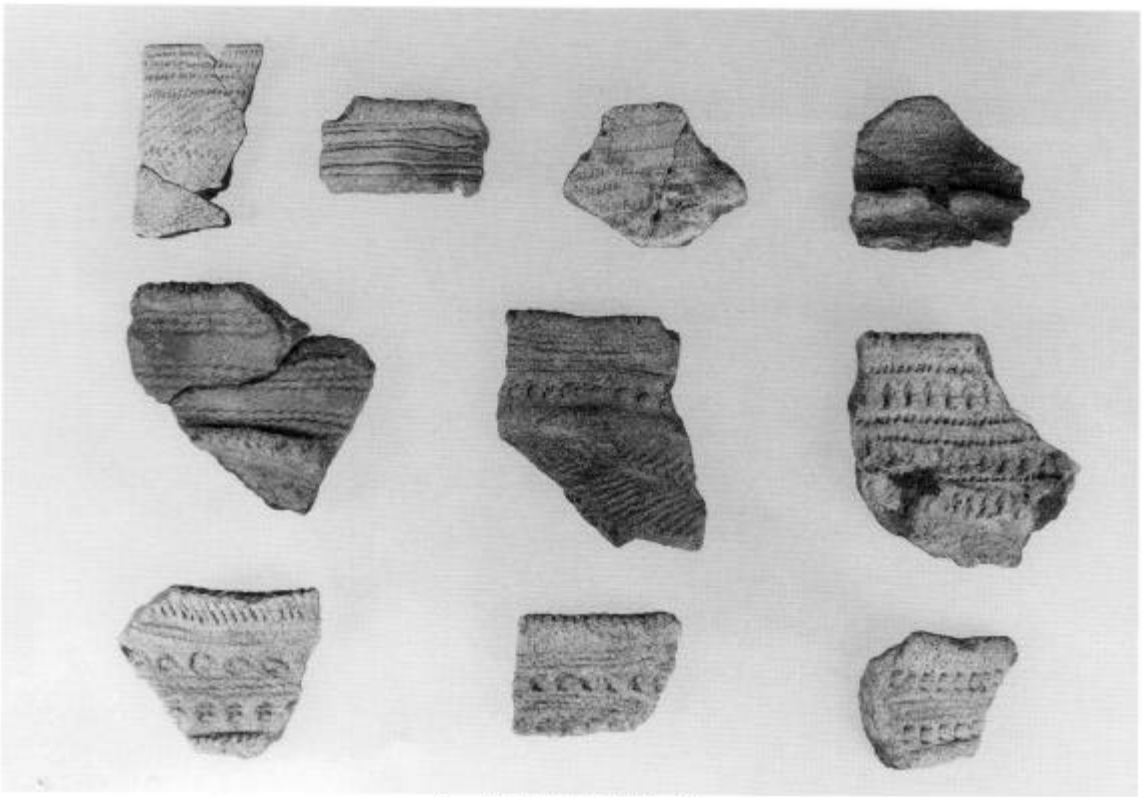
1　SK 59（南→北）



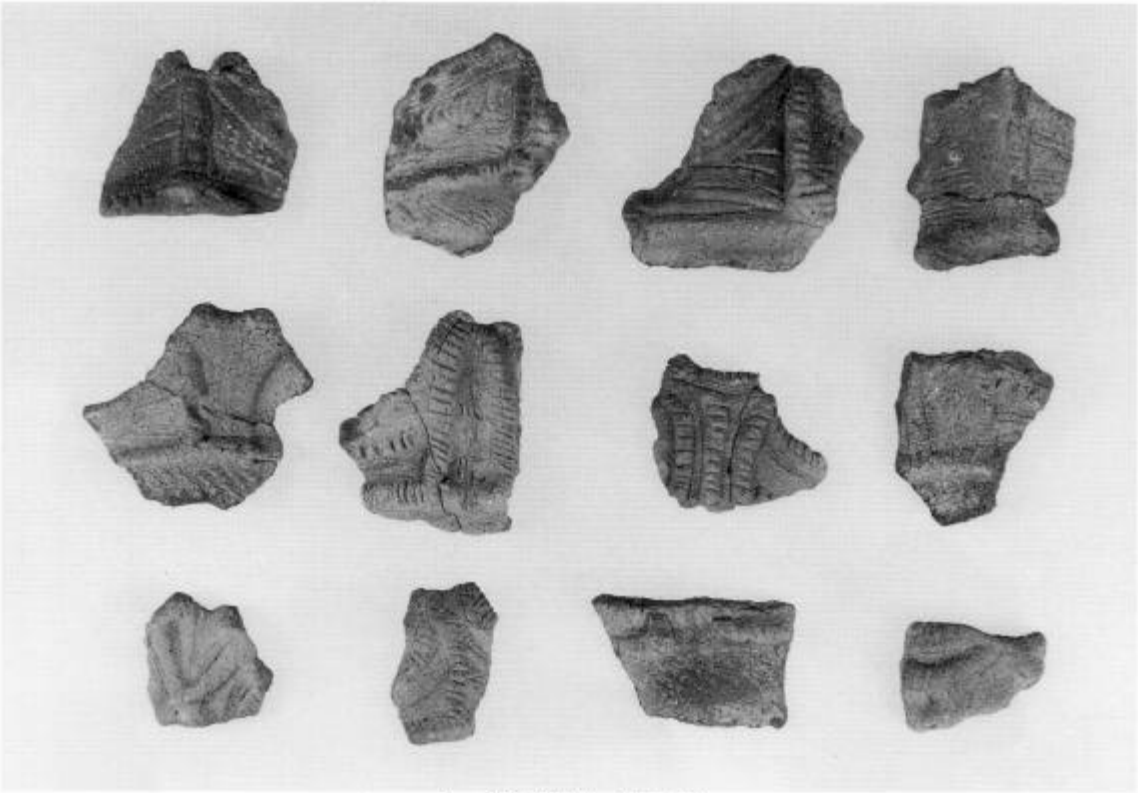
2　SK 59　土器出土状況（北→南）



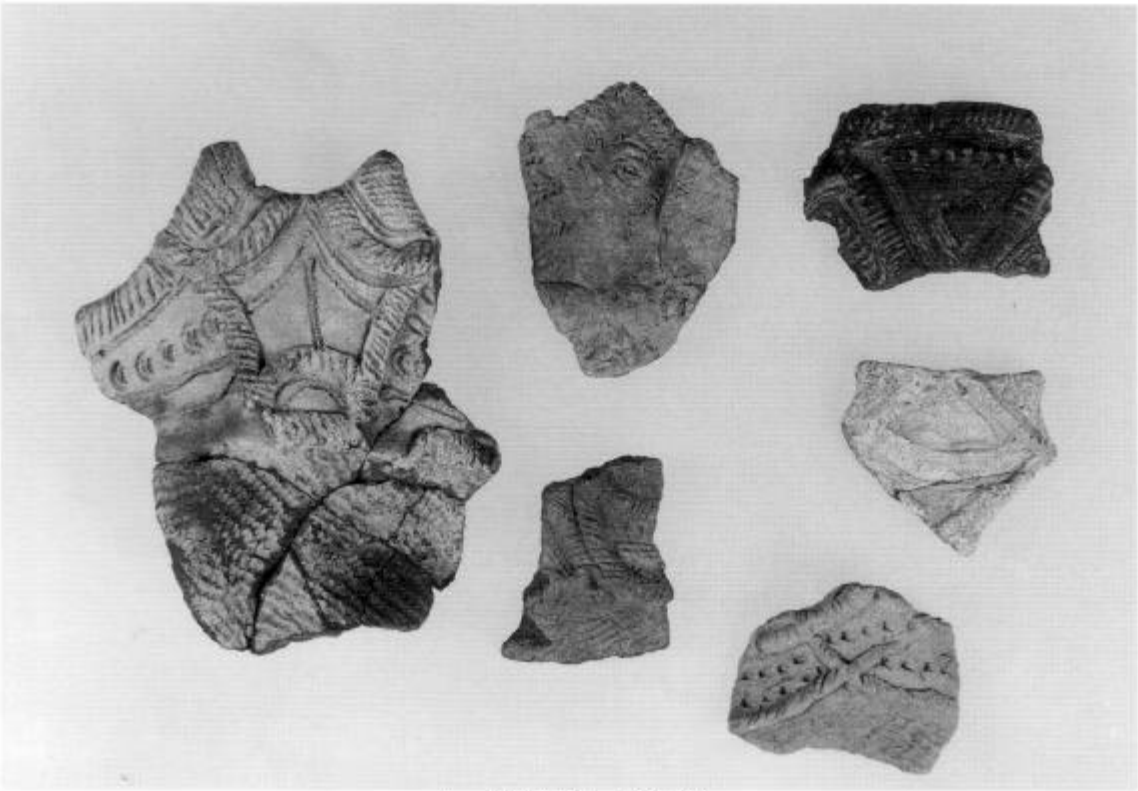
1　遺構内出土土器



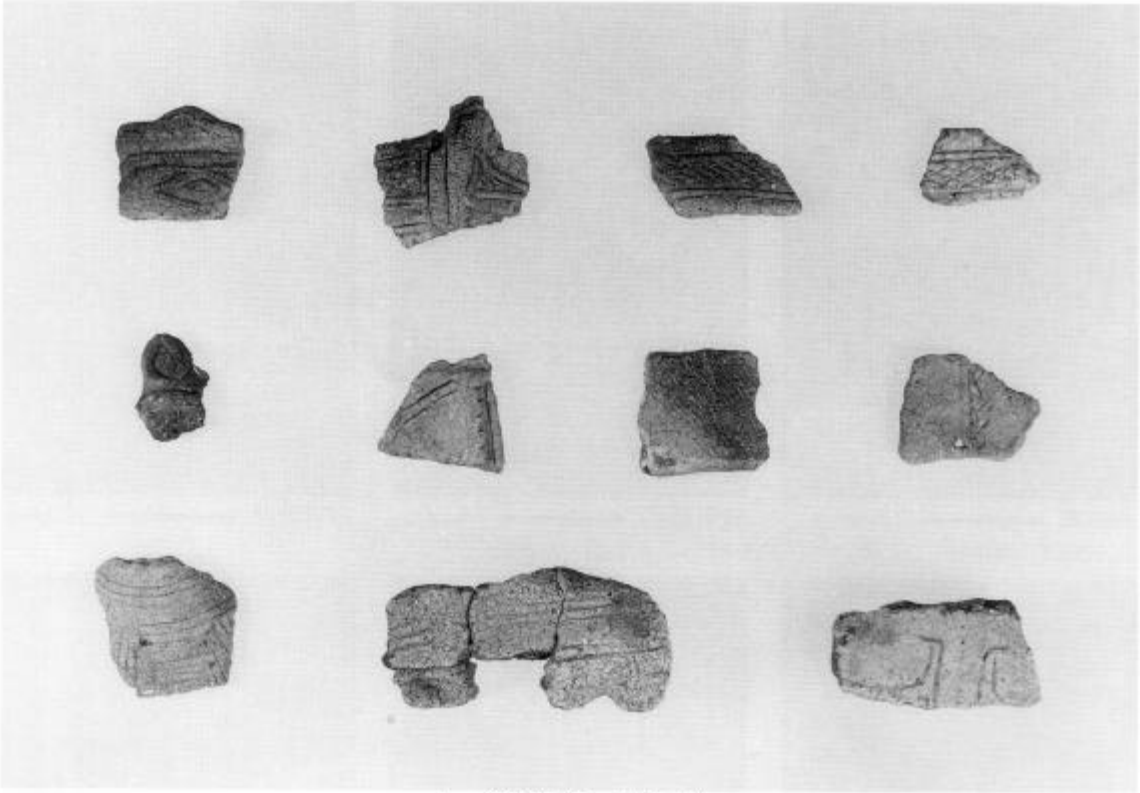
2　遺構外出土土器（1）



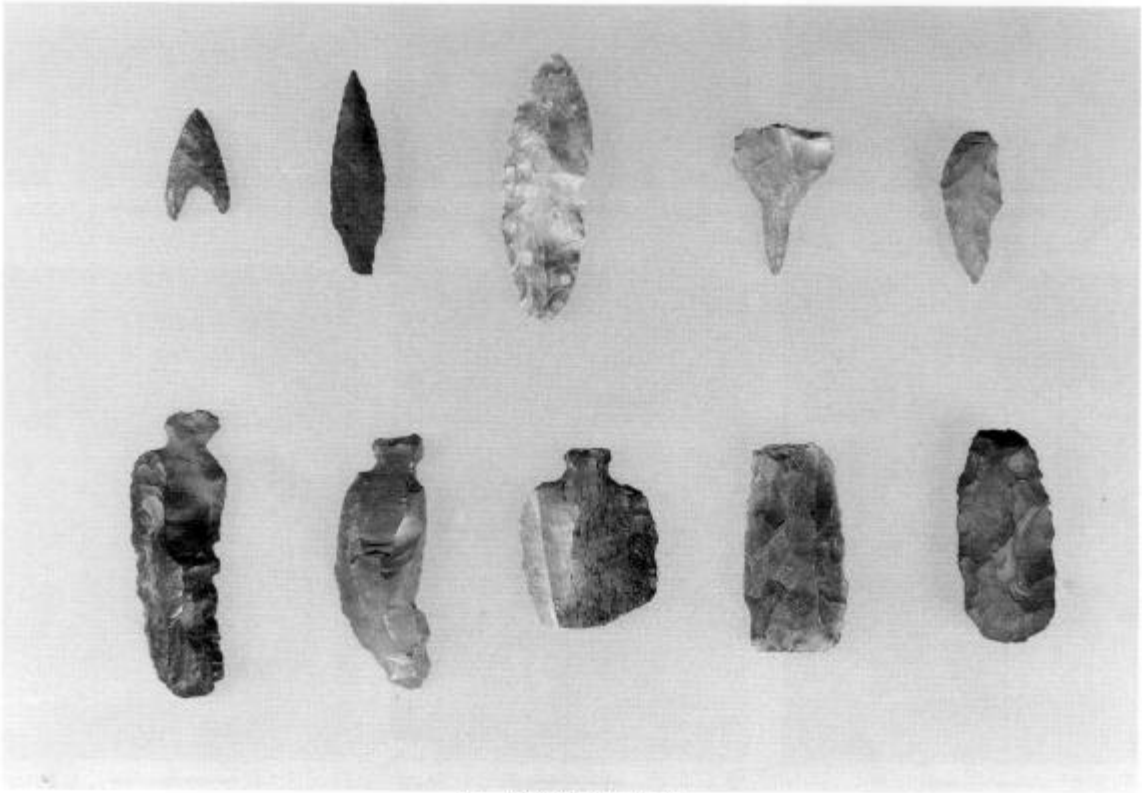
1　遺構外出土土器（2）



2　遺構外出土土器（3）

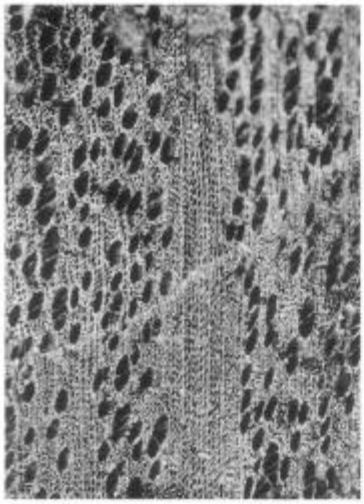
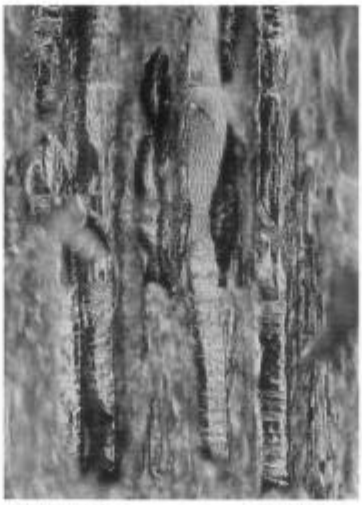


1　遺構外出土土器（4）



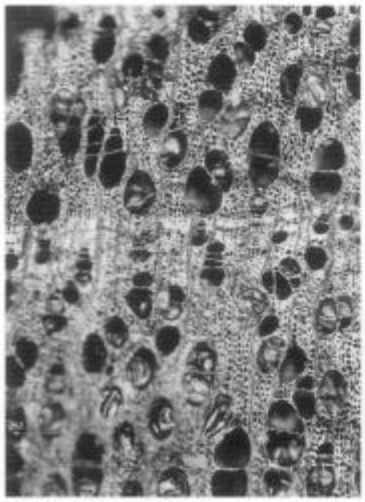
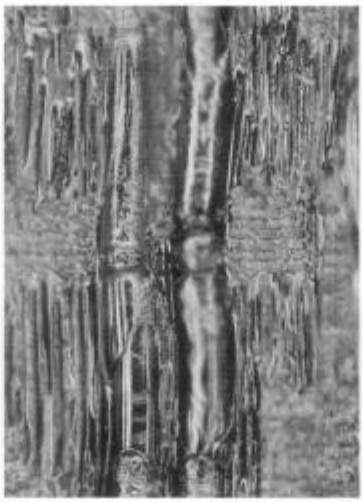
2　遺構外出土石器

図版8

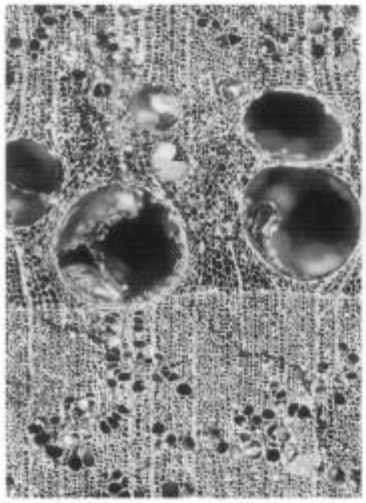
横断面 ―――― ：0.4mm　放射断面 ―――― ：0.2mm　接線断面 ―――― ：0.2mm

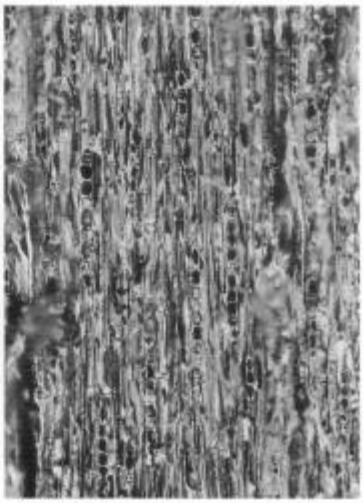
1. No.3 SD84内 Ⅰ層 ハンノキ属ハンノキ節

横断面 ―――― ：0.4mm　放射断面 ―――― ：0.2mm　接線断面 ―――― ：0.2mm

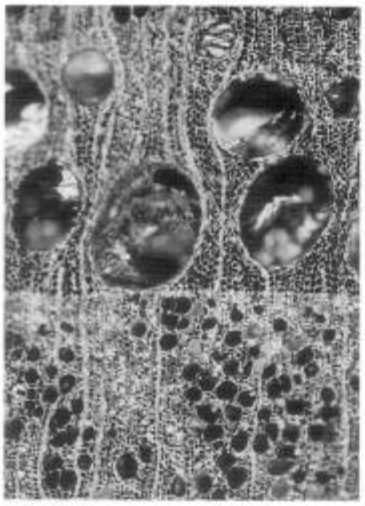
2. No.1 SD02内 Ⅰ層 アサダ

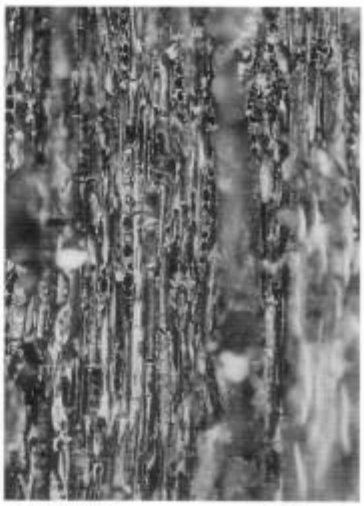




横断面 ―――― ：0.4mm　放射断面 ―――― ：0.2mm　接線断面 ―――― ：0.2mm

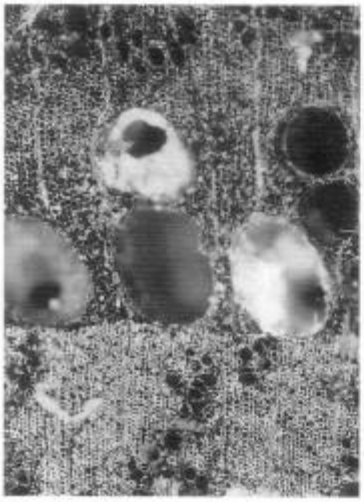
3. No.2 SK59内 Ⅰ層 クリ





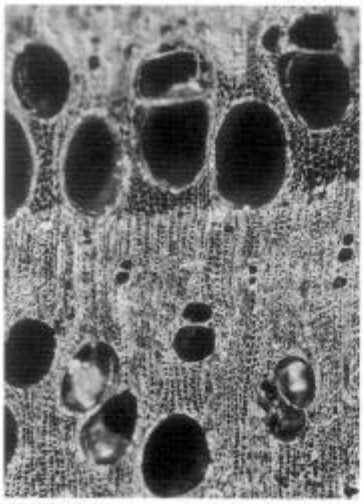
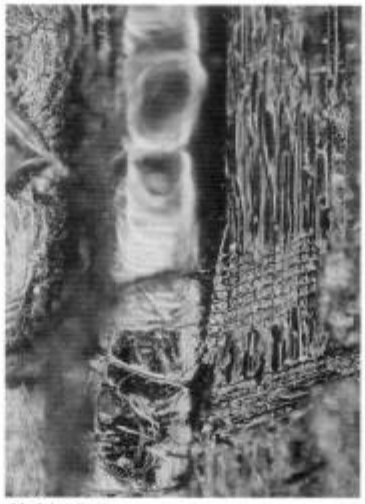
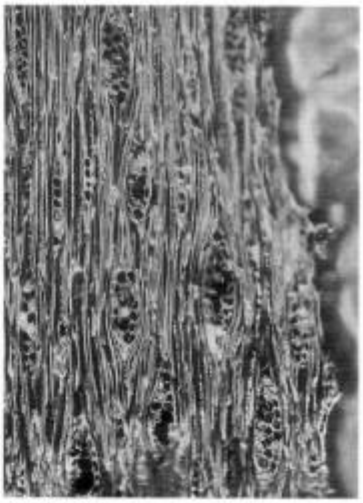
横断面 ―――― ：0.4mm　放射断面 ―――― ：0.2mm　接線断面 ―――― ：0.2mm

4.　No.4　SD164内　Ⅰ層　クリ



横断面 ―――― ：0.4mm　放射断面 ―――― ：0.2mm　接線断面 ―――― ：0.2mm

5.　No.5　SD165内　Ⅰ層　クリ

横断面 ―――― ：0.4mm　放射断面 ―――― ：0.2mm　接線断面 ―――― ：0.2mm

6.　No.8　SK198内　Ⅰ層　トネリコ属

報告書抄録

ふりがな	うしろやまいせき
書名	後山遺跡
副書名	日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	XⅡ
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第340集
編著者名	渡邊　慎一・高橋　忠彦
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター
所在地	〒014-0802　秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地　　電話0187-69-3331
発行年月日	西暦2002年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
後山遺跡（うしろやまいせき）	秋田県（あきたけん） 南秋田郡（みなみあきたぐん） 昭和町（しょうわまち） 豊川龍毛（とよかわりゅうげ） 字後山（あざうしろやま） 25-3外			39° 51′ 30″	140° 4′ 34″	20000611 ～ 20000811	1,700m²	日本海沿岸東北自動車道建設事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
後山遺跡		縄文時代	竪穴住居跡　1軒 土器埋設遺構　5基 土坑　17基 焼土遺構　6基 溝跡　3条	土器 石器	
		平安時代	竪穴住居跡　1軒 土坑　4基 焼土遺構　4基 溝跡　2条	土師器 須恵器 鉄製品	

あ と が き

調査では、縄文時代と平安時代の住居跡が、各々１軒とその他の遺構を確認したが、調査結果から後山遺跡の全貌を把握するためには、試行錯誤の連続であった。こうした中で、調査から原稿執筆まで担当した渡邉慎一氏（現 秋田県立矢島高校教諭）と、長期間にわたり整理作業に従事された臨時職員の努力に感謝いたします。

【整理作業従事者】

相場美喜子	相原すみ子	青木美貴子	石井ひとみ	石塚　春美
井手　康子	伊藤　聡子	伊藤　里佳	井上　明子	岩谷みどり
小野寺博子	加藤　智子	鎌田　耕治	菊地奈穂美	北埜　洋子
北林　玲子	工藤　裕子	熊谷キミ子	熊谷　信子	熊地　幸子
斉藤　由希	齊藤　良子	坂本　玲子	佐々木たき子	佐々木満子
佐々木みどり	佐々木理恵	佐藤　温子	佐藤　順子	佐藤美智子
佐藤　優子	鈴木留美子	高橋　麗子	武田美奈子	千葉　恵子
内藤加代子	中田ルミ子	長谷川倫子	長谷川ミネ子	畠山恵美子
原田利恵子	正木　祐子	三浦　祥子	三澤　奈歩	三森　和人
宮田美奈子	八島　知江	矢野真由美	楊　国萍	渡辺イミ子
渡辺　浩一				

（平成13年10月現在）

秋田県文化財調査報告書第340集

後山遺跡

－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書ＸＩＩ－

印刷・発行　平成14年３月

編　　集　秋田県埋蔵文化財センター
〒014-0802　秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地
電話 0187(69)3331　FAX 0187(69)3330

発　　行　秋田県教育委員会
〒010-8580　秋田市山王３丁目１番１号
電話 018(860)5193　FAX 018(860)5886

印　　刷　秋田活版印刷株式会社